

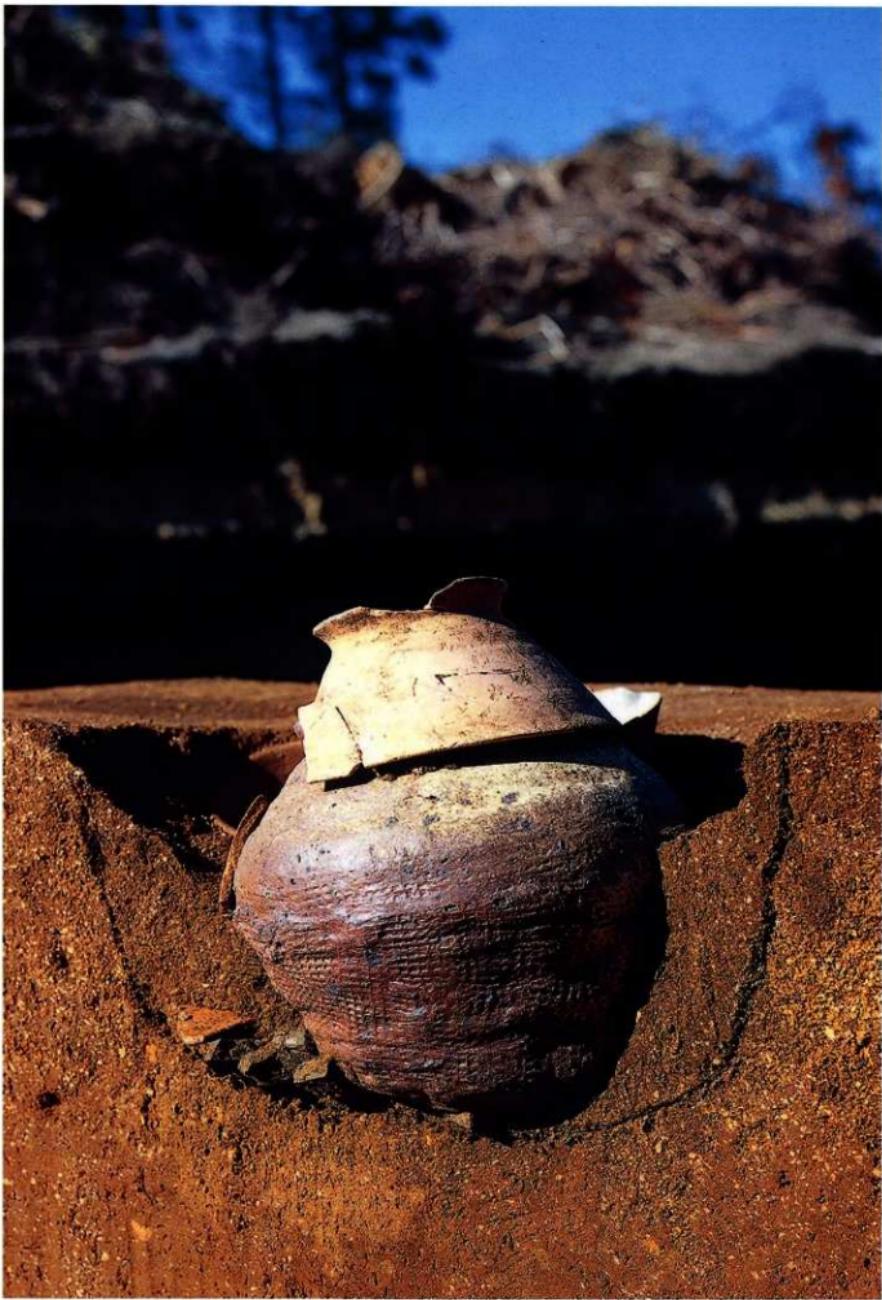
TAKARABEYOUGAO

# 財部城ヶ尾遺跡

東九州自動車道建設(木吉財部IC~国分IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 V

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



## 序 文

鹿児島県教育委員会では、東九州自動車道(末吉財部IC～国分IC間)の建設に伴い、平成11年度、財部城ヶ尾遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

この報告書は、「財部城ヶ尾遺跡」の発掘調査の記録です。

遺跡からは、縄文時代や古代の生活跡が発見されています。中でも、平安時代の生活跡は鮮明で、日常雑器の他、墨書き土器や個人の墓と考えられる埋納された藏骨器も発見されました。藏骨器が完全な状態で発見されることはまれなことで、県内の関連資料との比較検討を行いました。

本書は、南九州に住んだ先人達の歴史の一端を明らかにする貴重な手がかりを提供するものと考えております。文化財の保護や学術研究のための資料として活用していただければ幸いです。

終わりに、調査にあたりご協力いただいた日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所や関係者の方々ならびに地域の皆様に心から感謝申し上げます。

平成17年3月

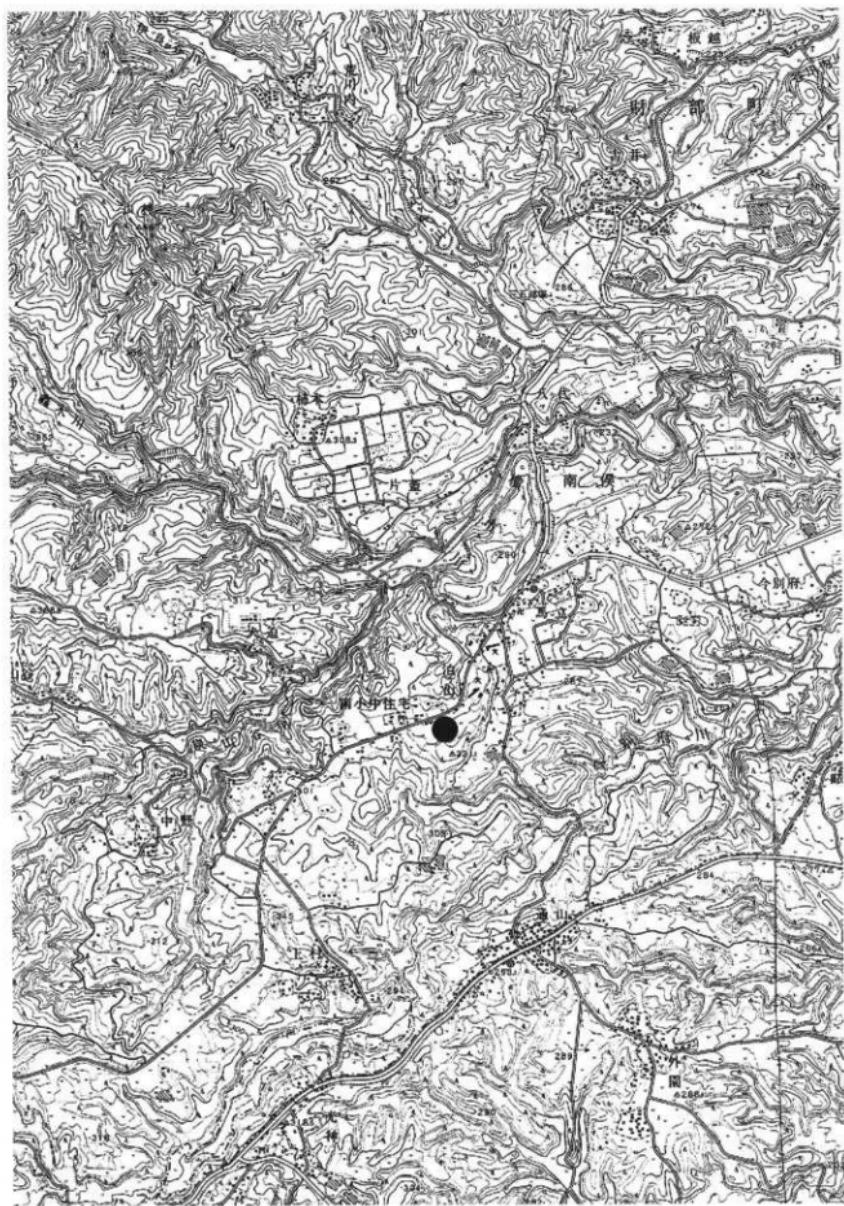
鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 木原俊孝

## 例 言

1. この報告書は、東九州自動車道建設(末吉財部IC～開分IC間)に伴う「財部城ヶ尾遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所の受託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
3. 本書で用いたレベル数値は全て海拔高である。
4. 本書の遺物番号は各章ごとの通し番号とし、挿図、表、図版の番号と一致する。
5. 発掘調査の実施においては、財部町教育委員会の協力を得た。
6. 発掘調査における実測図及び写真撮影は、調査担当者が行った。
7. 遺物実測の一部は(株)九州文化財研究所に依頼し、その監修については長野慎一が行った。
8. 遺物に関する写真撮影は、鶴山静彦、福永修一、吉岡康弘が行った。
9. 報告書の製作・整理作業にはデジタル技術を導入し、図版等の作成及び編集に関わるデータ処理は、松尾勉、野間口勇が行い、馬籠亮道、鮫島伸吾の協力を得た。
10. 本書の執筆、編集は、松尾、野間口、松田朝由が行つた。
11. 第Ⅱ章第1節については、立部剛氏(吉田町立吉山中学校教諭)に依頼した。
12. 付録「鹿児島県内の蔵骨器について」の資料収集、および集成については、松田、上末真が行い、編集は長野、松尾、野間口が行った。
13. 掲載遺物の縮尺は、土器が1/3、石器は1/1を基本とする。しかし、縄石器等大型のものについてはこの限りではない。また、遺構については1/20を基本としたが、これについても大型の遺構についてはこの限りではない。各々、図中に示したスケールを参考とされたい。
14. 土器、石器等の出土位置については、各節毎に記載した。スケールは、図中にグリッドラインを表示したので参考にされたい。
15. 本報告書に掲載した出土遺物、図面、写真等は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し活用する。なお、本報告書に使用したデーターの一部は、鹿児島県埋蔵文化財情報管理システム及び埋蔵文化財情報データベース(<http://www:jomon-no-moripp>)で公開する予定である。

## 報告書抄録

ふりがな	たからべじょうがおいせき							
書名	財部城ヶ尾遺跡							
副書名	東九州自動車道(末吉財部IC~国分IC間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	V							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	90							
編著者名	松尾 勉、野間口 勇							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175-1 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査起因
		市町村	遺跡番号					
たからべじょうがれ 財部城ヶ尾	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曾於郡 たからべじょうみなみまた 財部町南俣	464518	65-98-0	31° 41' 28"	130° 56' 25"	確認~ 本調査 19990712 19991224	8,500	東九州自動車道建設 (末吉財部IC~国分 IC間)に伴う埋蔵文 化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
			集石	土坑	押型文土器、手向山式土器			
財部城ヶ尾	包含地	早期	土坑					
		中期						
		後期						
		晩期	土坑					
		古代	火葬墓 掘立柱建物跡 焼土 土坑					
					阿高式系土器、中岳式土器、 出水式系土器 黒川式土器 土師器、須恵器、鉄製品			



遺跡の位置図

## 本文目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1	5 古遺跡	50
第1節 美索不米るまでの経過	1	第3節 古代の遺物	51
第2節 美索不米の概要	1	1 土器器形・焼	51
第3節 美索不米 (日記抄)	1	2 赤彩・黒色土器	53
第4節 今後の取り扱い	2	3 土器器形	53
第Ⅱ章 遺跡の位置と範囲	3	4 領域器形・且・壺	58
第1節 位置と特徴	3	5 領域器形・壺	58
第2節 歴史的遺跡	4	6 大春墓開拓遺物	61
第3節 遺跡の位置	12	7 鹿骨・刻文土器	62
第Ⅲ章 純文時代の遺産	16	8 烧成窯	64
第1節 純文時代の方法と概要	16	9 砂輪車	64
第2節 純文時代の遺構	16	10 烧成品	64
1 墓石遺構	16	第Ⅳ章 発掘調査のまとめ	70
2 土坑	16		
第3節 純文時代の遺物	22		
1 土器	22		
2 石器	32		
第Ⅴ章 古代の遺産	37		
第1節 調査の方法と概要	37		
第2節 古代の遺構	37		
1 領域器形	37		
2 墓土	39		
3 土坑	43		
4 鹿骨器形の遺構	46		

## 挿図目次

第1図 財部城ヶ尾遺跡の周辺の地形	6	第39図 古遺跡検出状況図(1)	47
第2図 斎宮遺跡地図	9	第40図 古遺跡検出状況図(2)	48
第3図 遺跡と周辺の地形	10	第41図 古遺跡検出状況図(3)	49
第4図 周辺地盤と調査区及びグリッド配置	11	第42図 古遺跡検出状況図(4)	50
第5図 財部城ヶ尾遺跡周辺地図	12	第43図 古代遺物出土状況図	51
第6図 土層断面実測図(1)	12	第44図 土跡器形	52
第7図 土層断面実測図(2)	13	第45図 赤彩・黒色土器	53
第8図 土層断面実測図(3)	14	第46図 土器器形	54
第9図 土層断面実測図(4)	15	第47図 土器器形(2)	55
第10図 純文時代遺構配図	16	第48図 土器器形(3)	56
第11図 純文時代牛頭瓦	17	第49図 土器器形(4)	57
第12図 領域器形実測土坑	18	第50図 領域器形・且・壺	58
第13図 V型遺跡実測図(1)	19	第51図 領域器形・壺	59
第14図 V型遺跡実測図(2)	20	第52図 領域器形	60
第15図 IV層遺跡実測図	21	第53図 火葬墓灰遺物	60
第16図 1類・6類土器出土状況図	22	第54図 鹿骨・刻文土器出土状況図	61
第17図 1類・4類土器出土状況図	23	第55図 鹿骨・刻文土器	62
第18図 5類・6類土器出土状況図	24	第56図 烧成窯	63
第19図 7類土器出土状況図	25	第57図 烧成品	63
第20図 7A・8A・9A・10A・11A・12A・13A・14A・15A・16A・17A・18A・19A・20A・21A・22A・23A・24A・25A・26A・27A・28A・29A・30A・31A・32A・33A・34A・35A・36A・37A・38A・39A・40A・41A・42A・43A・44A・45A・46A	26	第58図 烧成品	63
第21図 7 A類土器(模製泥抹形土器)実測図	27	第59図 初期山土遺物の発合	70
第22図 7 B類土器(模製泥抹形土器)実測図	28	第60図 各ニリアの遺物出土状況	71
第23図 7 B類土器(模製泥抹形土器)7 C 黒土(模製泥抹形土器)実測図(1)	29	第61図 木造跡と廻場遺跡との地理的関係	72
第24図 7 C類土器(模製泥抹形土器)実測図(2)	30		
第25図 純文時代出土石器分布図	32		
第26図 純文時代 石器実測図(1)	33		
第27図 純文時代 石器実測図(2)	34		
第28図 純文時代 石器実測図(3)	35		
第29図 古代遺構実測図	37		
第30図 1号領立柱遺物及び4号土坑	38		
第31図 2号領立柱遺物	38		
第32図 3号領立柱遺物	39		
第33図 4号領立柱遺物	40		
第34図 1, 2, 3, 4号燒窯	41		
第35図 1, 2, 3, 4号土坑	43		
第36図 5, 6, 7号土坑	44		
第37図 8, 9, 10号土坑	45		
第38図 鹿骨器形納遺物	46		

## 表 目 次

第1表 遺跡地名表(1) ······	7
第2表 遺跡地名表(2) ······	8
第3表 陶石器類表 ······	17
第4表 繩文時代土坑觀察表 ······	21
第5表 1類～6類土器觀察表 ······	24
第6表 7類土器觀察表(1) ······	30
第7表 7類土器觀察表(2) ······	31
第8表 繩文時代 石器觀察表 ······	36
第9表 挿立柱遺物跡觀察表 ······	42
第10表 繩土觀察表 ······	42
第11表 七流觀察表 ······	46
第12表 土器部杯・拘縫觀察表 ······	64
第13表 赤色・黒色土器觀察表 ······	65
第14表 土器器型觀察表(1) ······	66
第15表 土器器型觀察表(2) ······	67
第16表 須恵器杯・皿・撇瓶觀察表 ······	68
第17表 須恵器蓋・壺觀察表 ······	68
第18表 火葬墓周邊遺物觀察表 ······	69
第19表 瓦青・割薪土器觀察表 ······	69
第20表 燐溫曲線觀察表 ······	69
第21表 銀鏡布紋觀察表 ······	69
第22表 銀製品觀察表 ······	69
第23表 土器器「壺」器厚の比較 ······	72
第24表 土器器「壺」の比較 ······	72

## 図 版 目 次

遺跡近景 ······	図版1
①標示土塚(Ⅰ～X留想)ほか ······	図版2
①2号土塚半掘ほか ······	図版3
①1号墳丘往復跡部分 ······	図版4
藏骨器鉢的構造 ······	図版5
①E-5区右側ほか ······	図版6
縄文時代 1類～6類土器 ······	図版7
縄文時代 7種土器(1) ······	図版8
縄文時代 7種土器(2) ······	図版9
縄文時代 7種土器(3)と焼附土器底部 ······	図版10
縄文時代 石器 ······	図版11
古代 火葬墓開闢遺物(1) ······	図版12
古代 火葬墓開闢遺物(2) ······	図版13
古代 土器 ······	図版14
土器器杯・碗・赤色・黒色土器 ······	図版15
須恵器杯・皿と土器器皿(1) ······	図版16
古代土器 底部ヘラ切り・火埠・縫合調整板 ······	図版17
土器器皿(2) ······	図版18
土器器皿(3) ······	図版19
須恵器蓋・壺 ······	図版20
瓦青・割薪土器 ······	図版21
燒接窯と古銅器、銅製品 ······	図版22

# 第Ⅰ章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道（末吉財部IC～四分IC間）の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受け、鹿児島県教育委員会、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県立埋蔵文化財センターとの間で協議を行い、工事予定区内を対象にして、鹿児島県立埋蔵文化財センターが分布調査を行うことになった。分布調査は、平成6年10月と平成7年5月に実施した。

その結果、工事予定区内に13か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点が所在することが判明した。そこで、再度協議を行い、平成8年4月から、用地買収等の条件が整った区域を対象として順次確認調査を実施することになった。

この結果をもとに、緊急発掘調査の必要な遺跡について、鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することになった。

財部城ヶ尾遺跡は確認調査未了のため、確認・本調査のスタイルで8,500m<sup>2</sup>の発掘調査を実施し、縄文時代早期・晚期・古代の遺物包含層が残存することが明らかになった。

調査は、平成11年7月12日～12月24日（実働101日）の期間で実施した。

## 第2節 調査の組織

### 平成11年度 確認～本調査

事業主体者 日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調査 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 吉永 和人

作成企画者

次長兼総務課長 黒木 友幸

主任文化財主事兼調査課長 井崎 勝洋

課長補佐兼第一調査係長 新東 兼一

主任文化財主事兼第二調査係長 立神 次郎

主任文化財主事 長野 眞一

調査担当者

文化財研究員 藤野 義久

〃 宇都 俊一

〃 山崎 克之

〃 有馬 孝一

事務担当者

総務係長 有村 貢

主 事 政倉 孝弘

〃 今村孝一郎

平成16年度 報告書作成作業

事業主体者 日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調査 鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 木原 俊孝

作成企画者

次長兼総務課長 貴雅 彰

調査課長 新東 兼一

課長補佐 立神 次郎

主任文化財主事兼第二調査係長 篠塚 久志

主任文化財主事 長野 真一

作成担当者

文化財主事 松尾 勉

〃 野間口 勇

事務担当者

総務係長 平野 浩二

主 事 福山忠一郎

報告書作成検討委員会 平成16年12月27日 所長以下

報告書作成指導委員会 平成16年12月24日 調査課長他

企画担当者 長野真一、八木澤一郎、黒川忠広、

上床真、馬籠亮道、鶴島伸吾

指導者・協力者

日本道路公団九州支社

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

財部町教育委員会

鹿児島大学学術部 峰 和治

奈良大学文学部 東野治之

平田信芳、松田朝由、上床 真、山崎克之、有馬孝一、

立部 剛

整理作業員

海戸 亮子、平岡増子、宮原美子、岡島明子、赤坂涼子、

小村幸子

## 第3節 調査概要（日記抄）

平成11年7月12日～12月24日まで本調査を実施した。調査の経過については、日記抄をもってかえる。記載は月単位とした。

7月

調査に必要な基準軸、グリッドを設定し、環境整備を実施した。表七剥ぎ、E～G-2～4区のVI～VII層を掘り下げた。E-2区IV層で古道、F-3区V层で集石を検出した。

8月

C～G-2～7区のVI層～VII層を掘り下げた。C～E-2～5区で古道を、また、G-2～4区にかけて縄文時代の土坑を検出した。E～G-2～4区にかけて下層確認のトレンチを設定し、X層～XVI層を掘り下げた。

9月

B～E-5～8区のIV層～VI層を掘り下げた。C-3・4区とE-8区で縄文時代の土坑を検出した。

10月

D～F-11～13区のIV層を中心に掘り下げを行った。多数のピット、土坑、焼土跡等を検出し、写真撮影、実測を行った。

11月

E・F-13～14区を中心、IV層より掘立柱建物跡、焼土等の遺構を検出し、写真撮影、実測を行った。さらに、E-17区で古道を検出した。また、C・D-10～13区にトレンチを設定し、下層確認を行った。

12月

D～G-15～18区にかけて、IV層を中心に掘り下げを行った。掘立柱建物跡や、骸骨器埋納遺構を検出し、写真撮影、実測を行った。

#### 第4節 今後の取り扱い

東九州自動車道建設に伴う財部城ヶ尾遺跡発掘調査は、本報告書刊行をもって完結する。しかし、今回の調査区を中心とした東側と西側の範囲には、昭和61年度に実施された発掘調査(財部特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査)によって明らかになった長十塚遺跡(財部町埋蔵文化財発掘調査報告書1)が残存しているため、今後も遺跡の現状保存を要する。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 位置と特徴

財部城ヶ尾遺跡は、鹿児島県曾於郡財部町南俣に所在する。

遺跡の所在する財部町は鹿児島県の北東部、宮崎県との県境に位置し、北及び東は宮崎県都城市、西は姶良郡霧島町、国分市、姶良郡福山町、南は皆於郡末吉町と接している。

町市街地は都城盆地の一角をなし、大淀川の上流にあたる溝ノ口川、横市川に沿って水田や集落が散在している。その一方、山林が総面積の67.2%を占める山岳地帯でもある。

町域はほぼ三角形をなしている。西部は瓶巣山(543m)、白鹿岳(604m)、障が岡(430m)と、山地が南北に連なるが、全体としては南東に位置する都城盆地へ傾斜する台地からなっている。そして、この台地間を大淀川の支流である溝ノ口川、横市川が東流する。地質は大部分がシラス、ボラなどの火山灰土層となっている。年平均気温は15.8度、年間降水量は2,400mm程度である。

さて、本遺跡が所在する南俣地区は財部町の南部にあたり、町西部の山地から東部の都城盆地へ漸移する標高約200~360mの丘陵性台地が卓越する地域である。さらに、この丘陵性台地は、大淀川水系に属する諸河川により侵食を受け、小台地群に分断されているが、本遺跡はこうした小台地のひとつに立地している。

#### ◇遺跡を取り巻く地形・水文環境

まず、5万分の1地形図図幅の範囲において行った地形分類によって、遺跡のおかれた地形を概観すると、図幅中央をほぼ南北に走る山地があって、東側の都城盆地に傾く地域と西側の国分低地へ傾く地域を分かっている。南部は隣接する岩国山地と同じく、西岸に高隈山地があり、その東に東へ傾く牧之原台地が付着し、西高東低の地形を形成している。

(第1図)

まず山地は北部より南部に向かって、瓶巣山(543m)、黒石岳(524m)、白鹿岳(604m)、荒磯岳(538.7m)と標高500~600mの山々をもつとして中生代後期から新生代前期からなる小起伏山地が連なるが、瓶巣山や白鹿岳を中心とした山地には小起伏山地も見られる。これらの山地を九州を構成する大地形の幹組みの中を見ると、西南日本外帶西縫にあたる九州山地とひと続きの地質構造をもち、南の大隅半島側が大きく屈曲することによって、琉球外弧の北端をなすにいたった地域である。さらに九州山地の延長は、宮崎平野から南南西に続く都城盆地により、東側の鰐塚山地と西側の高隈山地に分けられ、本図幅に見られる山地群は西側の高隈山地から種子島、屋久島へと連なっていく。また、この山地群の西は、火山フロント及び琉球内弧にある鹿児島地溝の東縫の断層崖によって明確に区分される。

次に山地群に付着するような形で分布するのが、丘陵地である。上述した山地群は約28~25万年に噴出した入戸火砕

流堆積物によって、その谷が埋められて緩傾斜の丘陵地形を形成したものと思われる。さらに、この火砕流堆積物によって形成された台地も広範囲に分布する。この台地は本図幅中央部の山地群を境に、東西にいずれも約300mの標高を示し、河川による侵食、開拓が進んでいるが、その様相は東西で異なる。台地原面を比較的広く残す西側の台地(牧園、春山原、須川原、上野原)に対し、東側は、台地を侵食した河谷の斜面が広い部分を占め、台地原面は局部的に残存するに過ぎない。近接する河谷との比高も西側では200~250mに達するのに対し、東側では100m未満であることが多い。

台地に小規模ながら付着するものが段丘面である。本分類では中位段丘面として取り扱った。大淀川水系に属する横市川、川内川などが都城盆地の西縫をなす財部市街地付近に集まる部分に比較的まとまって見出せる。これらは、いずれもシラス台地に多く見られる河成侵食段丘であると思われ、入戸火砕流堆積後、極めて短期間に形成されたであろうことが報告されているが、詳細は後述する。

最後に低地だが、台地や丘陵間の河谷沿いに見られる小規模な谷底平野を除けば、図幅西縫の国分低地が最大である。

この低地を含めた姶良カルテラ北縫地域には既新世段丘が認められるが、その詳細な地形発達史についてはここでは省略する。図幅東縫は、都城盆地西端をなす低地がみられ、財部町市街地にある。

都城盆地は、南部九州の基盤をなす地質構造の屈曲を切って、九州山地と鰐塚山地の間に形成された北東~南西方向の低地帯である。本遺跡の位置を地形から概観すると、盆地中心部に向かう傾斜の一角にあたることから、この盆地の概略にも触れる。都城盆地は、宮崎平野と四十万帯の諸山丘陵で分けられるが、その延長ととらえられ、盆地の概形は前期史新世にさかのぼるとされる。現在の盆地の地形を支配しているのは、厚く堆積した入戸火砕流堆積物及び二次の堆積物である。もともと全体として盆地状の地形に火砕流が厚く堆積すると、まず縁辺部がやや高く、中央部に低い深い皿状の地形が生じ、これに堆積物が厚い中央部ほど大きな沿流作用が加わることで、当初より深い皿状の地形が生じた可能性が指摘されている。

入戸火砕流の堆積後、その侵食・開拓過程の中で現地形が形成されたが、これらを地形分類の上からみると、西半分のシラス台地、東半分の扇状地性の段丘に分けてとらえることができる。西半分のシラス台地は、東に向かって漸次低くなっている。高さ200m付近で、高位段丘面(台地面)と中位段丘面に分けることができる。これらの台地を開拓したのは、丸谷川、庄内川、横市川といったいずれも大淀川水系に属する諸河川である。東半分の扇状地性段丘に目を移すと、これらを形成したのは急峻な山地から流れ出る東岳川と沖水川である。扇状地は東縫部で約200mの高さを示し、西に緩く傾き下り、大淀川東岸で140mほどである。沖水川以北と以

南の扇状地には標高帯が見られる。また、扇状地北縁には10m前後の崖が見られるが、南縁は緩やかに原河川氾濫源に漸移し、その境は明瞭ではない。

さて、以上の地形の概観をふまえて、本遺跡周辺の地形に絞ってみると、黒石岳、白鹿岳、荒磯岳といった山地群から、都城盆地に向かって下る小台地群や中位段丘面に移行する緩やかな斜面上に立地する。本遺跡は横市川と今別川によって挟まれた台地に立地する。本遺跡に開わる河川は、いずれも大淀川水系に属し東流することから、遺跡の立地する台地は、河川によって南北に分断され、東西に細長い形状をなす。遺跡周辺の地形の基盤をなすのは、山地の主体となっている四十万累帯であると思われるが、入火砕流堆積物によって、その低所が埋積された。さらに、その後の侵食・開拓過程によって、現在の地形を形成している。

この侵食・開拓過程について、その大半が入戸火砕流堆積後、無植生のうちに、流水による激しい侵食、開拓が極めて短期間のうちにに行われたという説明がある。本地域でも、台地面のみならず、河成侵食段丘の段丘面や地形分離に表れにくい小規模な段丘状の地形における平坦面などにおいて、シラス上位に後述する成層した二次シラスが、露頭や近辺の発掘調査で数多く確認された。加えて、二次シラスの上にのるローム層中に約2.2~23万年前の噴出物とされるSz-Tk6(桜島高岡6・P17)が見出せることは、少なくとも、このテフラの堆積までには、現地形の大半が形成されたことが推察される。

このようにして、台地の分断や高密度の谷分布が本地域でも形成されたが、ここで現在の水系にも目を移してみたい。本遺跡は横市川の侵食、開拓に開わる。この河川は、第1回図幅中央部の山地から東流し、都城盆地内にて、大淀川に合流し、鰐塚山地北縁で先行谷をなしつつ、宮崎平野に向けて北流する。この水系の原型は前期更新世中葉から後半というかなり古い時期に推定されている。しかし一方で、大淀川の水系については、過去のある時期、志布志低地に向かって南下していた可能性が指摘されている。都城盆地の入戸火砕流堆積物の下位に、河成または湖成と考えられる都城層が確認されており、この都城層が全体として南方に傾斜しているためである。新しく考えると、阿多火砕流や入戸火砕流が末吉町付近に厚く堆積することで、現在の分水界を形成したという可能性も考えられている。いずれにしろ、本遺跡において後期旧石器時代以降の古水系は、ほぼ現水系とはほぼ同一の流向が想定される。

#### ◇遺跡を取り巻く地質環境

地形上の特色は、本地域の地質の相違を反映している。遺跡周辺で見られる最も古い岩石は、砂岩頁岩互層からなる間結堆積物であり、中央部の山地の主體である。これらの岩石は、地質構造的には四十万累帯に属し、秋父累帯とともに九州山地の主部をなすが、九州南部において、西南日本外帯の構造が南北に急変し、広く南部九州の基盤となっている。

四十万累帯は北帶と南帶とに分かれれるが、本地域に見られ

るものは、主に白亜紀~古第三紀からなる北帶である。こうした岩石は、第1回図幅南東部の台地を刻む河谷中にも小露頭が見られることより、図幅南東部には基盤岩として広く分布することが予想される。特に、本遺跡南側は、この砂岩頁岩互層が基盤の高まりとして地表に露出し、小丘陵をなして、本遺跡と接している。また、同様の高まりは周辺で顕著であり、本遺跡の南約1.2kmに位置する耳取遺跡付近で再び露出する。これらの基盤の上に、入戸火砕流堆積物が台地を構成するのだが、基盤の高まりが見られる部分では火砕流の堆積が薄く、基盤の低所では厚く堆積しているのは言うまでもない。

現地形を支配する入火砕流堆積物であるが、その大半は非溶結いわゆるシラスである。灰色~淡黄褐色を呈し、その上部は風化により黄褐色に変色していることがある。無層理で淘汰が悪く、軽石漂の他、多数の外来漂を含む。シラス下位においては、溶結凝灰岩に漸移する場合もある。また、シラス上部には成層した二次的な軽石・火山灰層(二次シラス)が認められることが多い。本遺跡及び周辺の遺跡においてもまた同様であった。これは、前述したように火砕流堆積直後、植生に覆われる前に、流水による激しい侵食・堆積が行われたためであると考えられている。

シラス上位、台地面の最上部を覆って、ローム層が分布する。台地面や平坦面においては、3~4mの厚さを示す。このローム層中には多数のテフラが確認される。本遺跡においては、上位より、Sz-Ts(桜島大正・P1), Sz-Bm(桜島文明・P3), Kr-M(霧島御池)、K-Ah(鬼界アカホヤ)、Sz-Sy(桜島末吉・P11)、Sz-Si(桜島薩摩・P14)、TkN(尚野)、Sz-Tk4(桜島高岡4・P15)、Sz-Tk6(桜島高岡6・P17)といった6枚のテフラが確認されており、基本的層序に違いは見られない。詳細は層序の項を参照されたい。

#### 第2節 歴史的環境

古代の行政区分では、本遺跡周辺は日向国諸県郡財部郷に属した。「和名抄」には財部たからべ、縣(あがた)、瓜生(うりゅの)、山鹿(やまか)、穆佐(むかさ)、八代(やつしろ)、大田(おおた)、春野(はるの)の八郷を載せ、日向区内では国府所在郷の肥満郷と並び最大の郷である。

「財部」の名の起源については、日光神社に関連する古代「財日奉部」によるとする説がある。「財日奉部」は人和政權の勢力がおよぶ數箇所に、日嗣りに適した処を選び、太陽信仰に基づく日嗣りの祭祀や、日迎えを行っていた。「財日奉部」の「財部」に由来する地名は、国内にいくつかあったが、現在まで残っているのは本県の財部町だけ。最も古い地名である。

「日嗣り」は日光神社や白鹿岳周辺で行われたのではないかと考えられ、現在も日光神社に引き継がれている。

財部郷は、現曾於郡財部町から宮崎県都城市にかけての地域に北定される。鹿児島県内では最も早く大和政權の勢力が及んだ地域とみられ、現志布志町夏津の飯盛山古墳は5世紀中期の前方後円墳、現大崎町横瀬の横瀬古墳は5世紀後半の

前方後円墳である。中世は『日向国速久田田帳』に「財部院百余丁」とあり、古代令制下の当郷を継承するものとみられる。

近世には鹿屋藩の外城のひとつ財部郷としてみえ、郷域は北諸県郡財部村及び大隅の東曾於郡下財部・北俣・南俣(現財部町)が比定されている。主として現曾於郡財部町を中心とし、宮崎県都城市南東部にわたる一帯と考えられる。明治4年7月の薩摩震災後は鹿児島県に属し、同年11月からは郡城縣に所属した。その後宮崎縣に移管され、明治9年8月には再び鹿児島県に合併された。明治22年に町村制が実施され、従来の財部郷を財部村と改称し、北俣、南俣、下財部、3か村の名称は大字に改められた。その後、大正15年の町制施行により財部町となり現在にいたっている。

埋蔵文化財は、昭和58年に鹿児島県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査によって多くの遺跡が確認された。その後も、農政関係の分布調査などにより遺跡の数は増加しつつある。

昭和61年には長十塚遺跡(財部城ヶ尾遺跡)と石仏段遺跡の確認調査が行われ、縄文時代晚期や古代の遺物が出土している。昭和62年には横尾遺跡、横尾山遺跡、中崎上遺跡確認調査が行われている。横尾遺跡からは縄文時代早期の土器や石器等が出土し、中崎上遺跡からは縄文時代早期の押型文土器、撫子文系土器、塞ノ神式土器、前期の曾畠式土器、中期の阿高式土器、後期の岩崎上畠式系土器等が出土している。

昭和63年には中崎上遺跡の一部の全面調査が行われ、西之表市下別峯遺跡出土の縄文時代早期の貝殻文系円筒土器に類似する土器が出土している。

平成5年には宮原・霧島追A、B遺跡の確認調査が実施され、縄文時代早期や晚期の遺物が出土している。

平成9年には西栗柄遺跡の確認調査が実施され、縄文時代早期や後・晚期の遺物が出土している。

平成12年には田平下遺跡の発掘調査が行われている。

また、東九州自動車道建設(末吉財部IC~四分IC間)にともなう大規模な発掘調査は平成8年~12年にかけて実施され、旧石器時代から近現代の遺構、遺物が確認された。

#### <参考文献>

- 1 「九戸田遺跡 供養之元遺跡 前原和田遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(36)2002
- 2 「高麗坂遺跡 水磯遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(61)2003
- 3 「長十塚遺跡 石仏段遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)1988
- 4 「横尾遺跡 横尾山遺跡 中崎上遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)1988
- 5 「横尾遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)1989
- 6 「宮原遺跡、霧島追A・B遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)1994
- 7 「西栗柄遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)

1998

8 「財部町郷土史」財部町郷土史編纂委員会 1997

9 「九戸田遺跡 水磯遺跡 高麗坂遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(71)2004



第1図 財部城ヶ尾遺跡の周辺の地形

地図中●印は財部城ヶ原遺跡の位置を表す

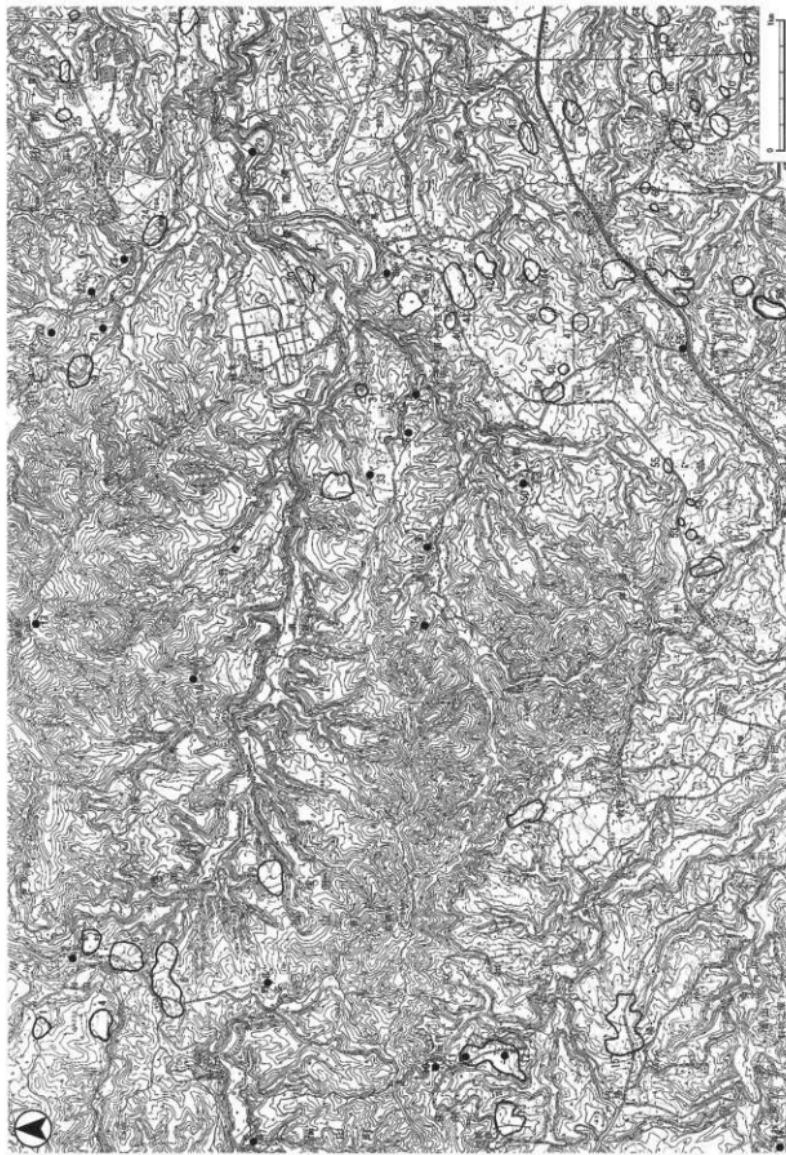
第1表 遺跡地名表(1)

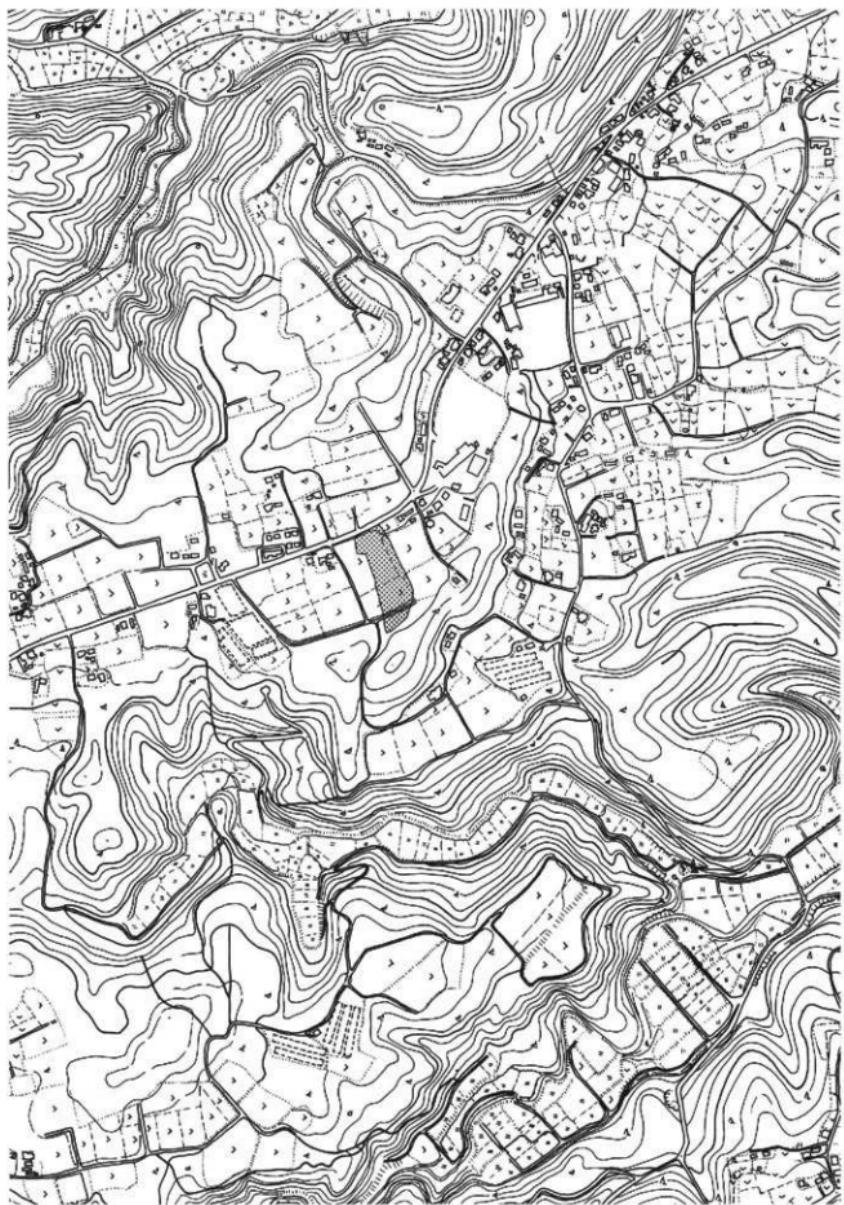
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	小坂元A	福山町 比曾木野	小坂元	縄・古・歷	土器・成川式・土師器	
2	新村	※ 新村	台地	縄(中)	岩崎式	
3	前原	※ 前原	台地	縄・古・歷	土器・成川式・土師器	
4	城ヶ尾	※ 城ヶ尾	台地	旧・縄・古	ナイフ形石器・塞ノ神式・成川式	H153 報告書
5	前原和田	※ 前原和田	台地	旧・縄(早)	ナイフ形石器・押型文	H143 報告書
6	供養之元	※ 供養之元	台地	縄・古	塞ノ神式・成川式	H143 報告書
7	長谷	※ 長谷	台地	弥	大型石斧	
8	野谷下	※ 野谷下		古・歷	成川式・土師器	
9	水鏡	※ 水鏡	台地	旧・縄・歷	細石器・手向山式・土師器	H153 報告書
10	辰伴	福山町 佐伯川 辰伴	台地	弥	土器	
11	栗ノ脇	※ 栗ノ脇		縄	土器	
12	芹牟田	※ 芹牟田		縄	土器	
13	赤松段	※ 赤松段		縄	土器	
14	山神段	※ 山神段		縄	土師器	
15	一本松	※ 一本松	台地	縄(中・後)	阿高式・岩崎上層式・指宿式	H10 調査
16	花建原	※ 下牧之原	花建原		須恵器	
17	黒櫛城根	財部町 南保 天子馬場				
18	花平陣跡	※ 丸鶴城ヶ原				
19	黒櫛	北側 黒櫛	台地	縄(早)・歷	押型文・麻製石斧・土師器	
20	松峯	※ 松峯	台地	歷	内黒土師器	
21	下戸越	※ 下戸越	台地	歷	土師器	
22	柳ノ口	※ 柳ノ口	台地	縄(前・後)	轡式・春日式・河内式・指宿式・石盤	
23	古井後ヶ谷	※ 古井後ヶ谷	台地	縄		
24	西原	※ 西原	台地	縄(早)・歷	押型文・土師器	
25	古井下原	※ 古井下原	台地	歷	土師器	
26	宮後	※ 宮後	台地	歷	土師器	
27	霧島追B	※ 霧島追	台地	歷		
28	田代ノ上	南保 田代ノ上	台地	縄・歷	土師器・須恵器	
29	久保谷	※ 久保谷	台地	歷	土師器	
30	八ヶ代上	※ 八ヶ代上	台地	縄(早・後)・歷	前平式・土師器	
31	高篠坂	※ 高篠坂	台地	縄(早)	前平式・手向山式	H153 報告書
32	高篠	※ 高篠	台地	古代	土師器・須恵器	H163 報告書
33	大迫A	※ 大迫	台地	縄(早・前)	轡式・黒曜石	
34	炭山谷	※ 井牧ヶ平俱追	台地	縄・歷	石斧・土師器	
35	炭山	※ 炭山	台地	縄(後)・歷	指宿式・土師器	
36	大迫B	※ 大迫	台地	歷	土師器	
37	片瀬前	※ 片瀬前	台地	縄(早・前)	押型文・塞ノ神B式・チャート	

第2表 遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
38	九糸岡	◎ ◎ 九糸岡	台地	旧・繩・歷	三棱尖頭器・手向山式・土師器	H163報告書
39	馬立	◎ ◎ 馬立	台地	歷(奈良)	十輪器・須恵器	
40	石仏段	◎ ◎ 石仏段	台地	繩(晚)・歷	黒色磨研土器・土師器	S61調査
41	財部城ヶ尾 (長十塚)	◎ ◎ 長十塚	台地	繩・歷	土器・石鏡・土師器・須恵器・鐵製品	本報告書(H11調査)
42	跡場	◎ ◎ 跡場	台地	繩(早)・歷	墓ノ神式・土師器・須恵器	H163報告書
43	王ヶ平	◎ ◎ 王ヶ平	台地	歷	土師器・須恵器	
44	九日田	◎ ◎ 九日田	台地	繩(早・後)・歷	石坂式・黒川式・土師器	H143報告書
45	耳取	◎ ◎ 耳取	台地	旧・繩・歷	ナイフ形石器・古田式・土師器・礫群	H11～12調査
46	前山2	◎ ◎ 前山	台地	繩(晚)・歷	黒色磨研土器・土師器	
47	前山1	◎ ◎ 前山	台地	歷	土師器	
48	芭蕉ヶ追2	◎ ◎ 芭蕉ヶ追	台地	繩・歷	石皿・敲石・土師器	
49	芭蕉ヶ追1	◎ ◎ 芭蕉ヶ追	台地	繩・歷	土器・土師器	
50	中野	◎ ◎ 中野	台地	歷	土師器・須恵器	
51	長田	◎ ◎ 長田	台地	繩・歷	土器・土師器	
52	梅田	◎ ◎ 梅田	台地	繩・歷	土器・土師器	
53	荷床2	◎ ◎ 荷床	台地	歷	土師器	
54	八戻	◎ ◎ 八戻	台地	繩・歷	土器・土師器	
55	荷床1	◎ ◎ 荷床	台地	歷	土師器	
56	野方	◎ ◎ 野方	台地	繩・歷	土器・土師器・内墨土師器	
57	桐木	末吉町 谷訪方 桐木	台地	旧・繩・歷	ナイフ形石器・船元式・土師器	H9～13調査
58	桐木B	◎ ◎ 桐木	台地	旧・繩・歷	墓ノ神式・深瀬式・土師器・住居遺構	H12～13調査
59	閑山西	◎ ◎ 閑山西	台地	繩・彌・中世	土器・土師器・須恵器	H13調査
60	閑山	◎ ◎ 閑山	台地	繩	十器	H13調査
61	通山上川路	◎ 深川 五位塚通山上川路	台地	繩(晚)・中世	夜白式	S59調査
62	真方入口	◎ ◎ 真方入口	台地	繩(前・晚)	轟式	S59調査
63	牛半牧	◎ ◎ 牛半牧	台地	繩(晚)・古代	土師器	S61調査
64	楠木岡C	◎ ◎ 楠木岡	台地	繩(晚)・古代	土師器	S61調査
65	楠木岡B	◎ ◎ 楠木岡	台地	繩(晚)・古代	土師器	S61調査
66	楠木岡A	◎ ◎ 楠木岡	台地	繩(晚)・古代	土師器	S61調査
67	臼杵	◎ ◎ 臼杵	台地			
68	下ノ塙	◎ ◎ 五位塚下ノ塙	台地	繩(晚)・古代	入佐式・土師器	
69	四枝道	◎ ◎ 四枝道	台地	繩(晚)・古代	土師器	S61調査
70	饭牧	◎ ◎ 五位塚飯牧	台地	古代	土師器・須恵器	S60調査
71	五位塚渡り下	◎ ◎ 五位塚渡り下	台地	繩(早)	山形押模文	S60調査

第2図 周辺地図





第3図 遺跡と周辺の地形



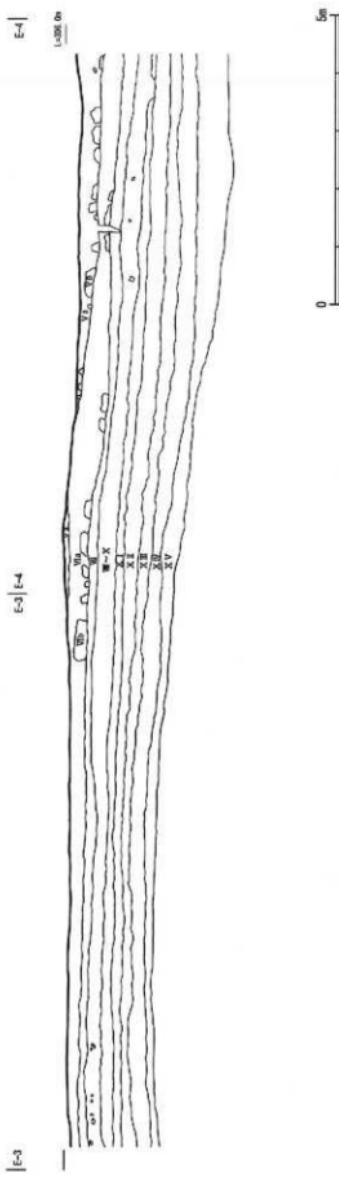
第4図 周辺地形と調査区及びグリッド配置図(1/1250)

### 第3節 遺跡の層位

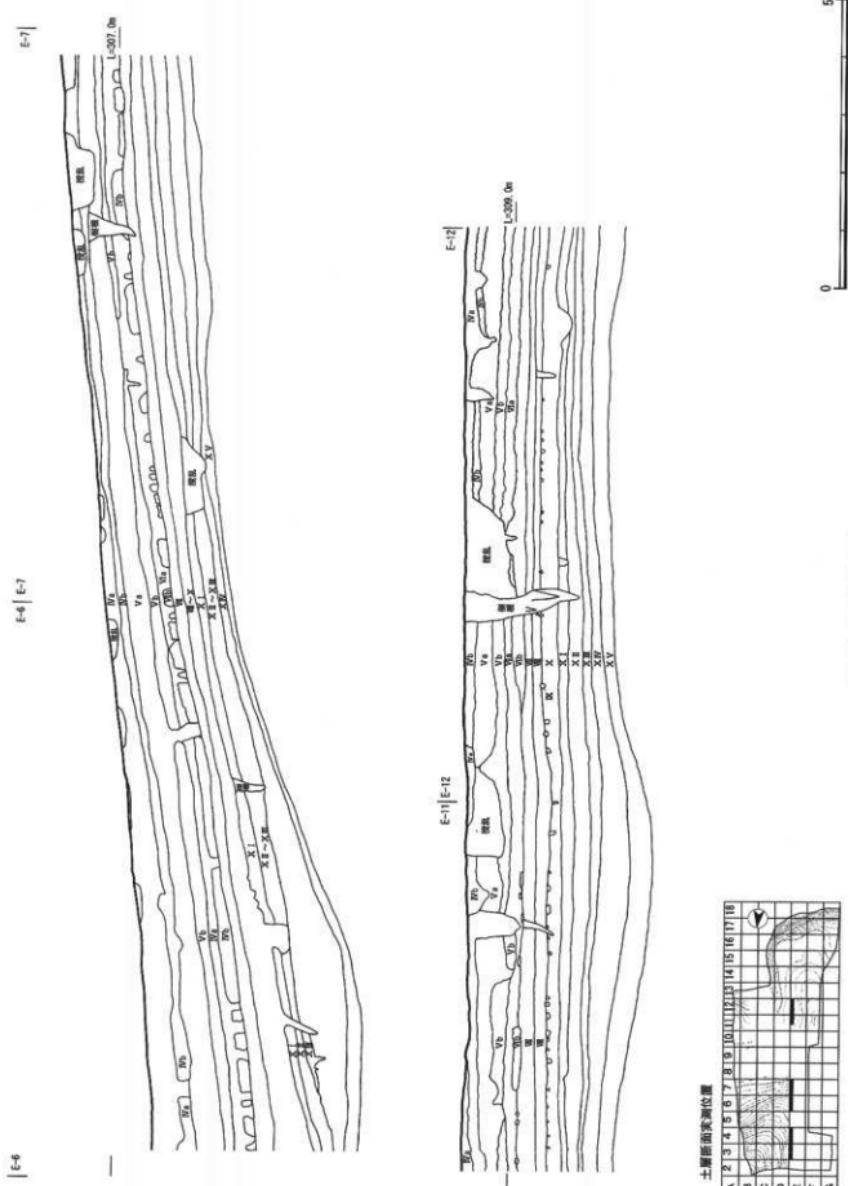
- I層 墓褐色土 現表土  
 II層 黄白色輕石層 P-3 文明ボラ 西暦1471年頃の  
 桜島の噴出物（一部に残存）  
 III層 黒色腐植土 繩文晩期～古代遺物包含層  
 IVa層 黄褐色土 繩文時代後期～晚期及び古代の遺物が  
 混在する包含層  
 IVb層 黄褐色細粒輕石混硬質土 御池輕石 約4,200年  
 前の桜島御池の噴出物  
 Va層 墓橙色土 Vb層の腐植土  
 Vb層 明橙色火山灰 アカホヤ火山灰 約6,400年前の  
 鬼界カルデラの噴出物  
 VIa層 黄褐色輕石混淡茶褐色土 繩文時代早期の遺物含  
 層  
 VIb層 黄褐色輕石層 P-11 約7,400年前の桜島の噴出  
 物  
 VII層 明茶褐色土 繩文時代早期の遺物包含層  
 VIII層 黑褐色土 繩文時代早期の遺物包含層  
 IX層 黄白色火山灰 P-14 サツマ火山灰 約11,000年  
 前の桜島の噴出物  
 X層 黑褐色土  
 XI層 黄褐色軟質ローム  
 XII層 暗茶褐色軟質ローム  
 XIII層 褐色土  
 XIV層 暗褐色硬質土 当該  
 層上部び下部付近に赤  
 褐色バミス(P-15)が点在  
 する。  
 XV層 暗褐色硬質土 vs  
 XVI層 暗褐色硬質土 赤褐  
 色バミス(P-17)が点在す  
 る。  
 XVII層 濁黃白色砂質土 シ  
 ラス 角礫混明黄白色  
 砂質土約25,000～28,000  
 年前の姶良カルデラの  
 噴出物  
 P=バミス=輕石

桜島の噴出物に新しいものか  
 ら順に番号を付している。

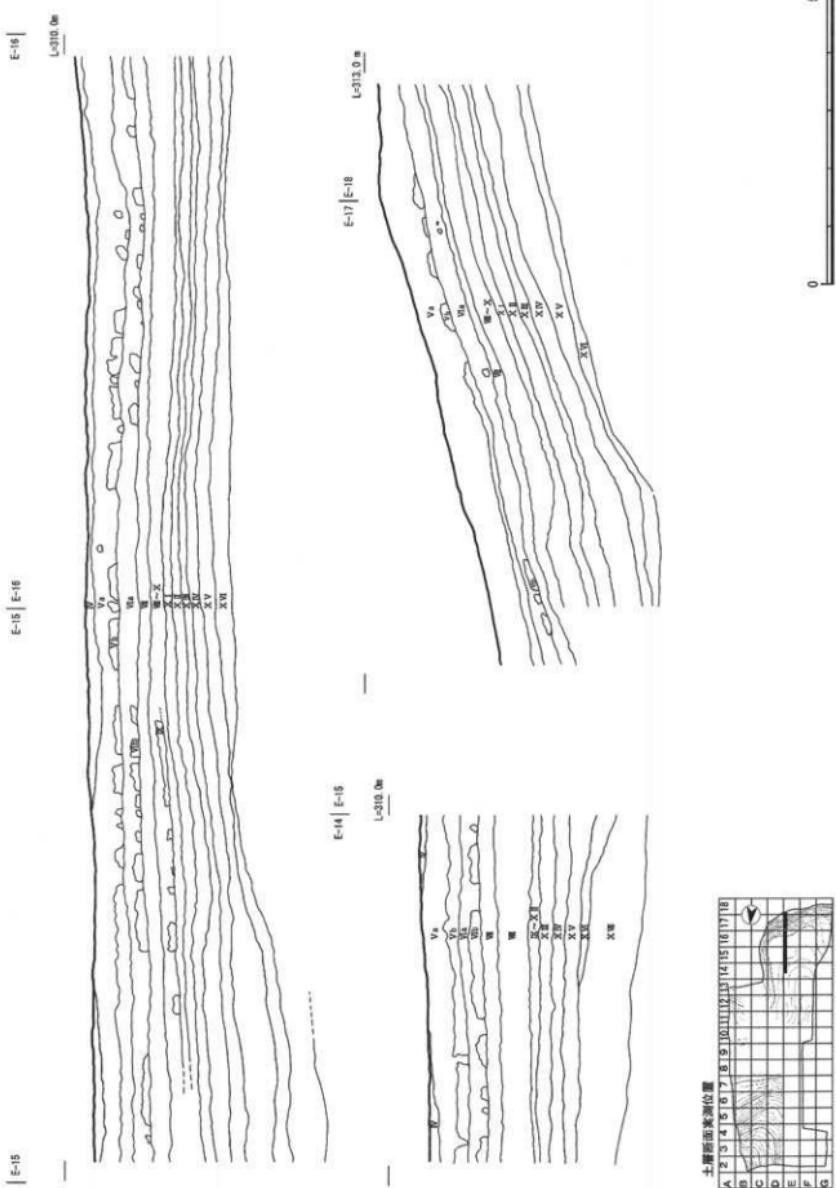
第5図 財部城ヶ尾遺跡標準土層図



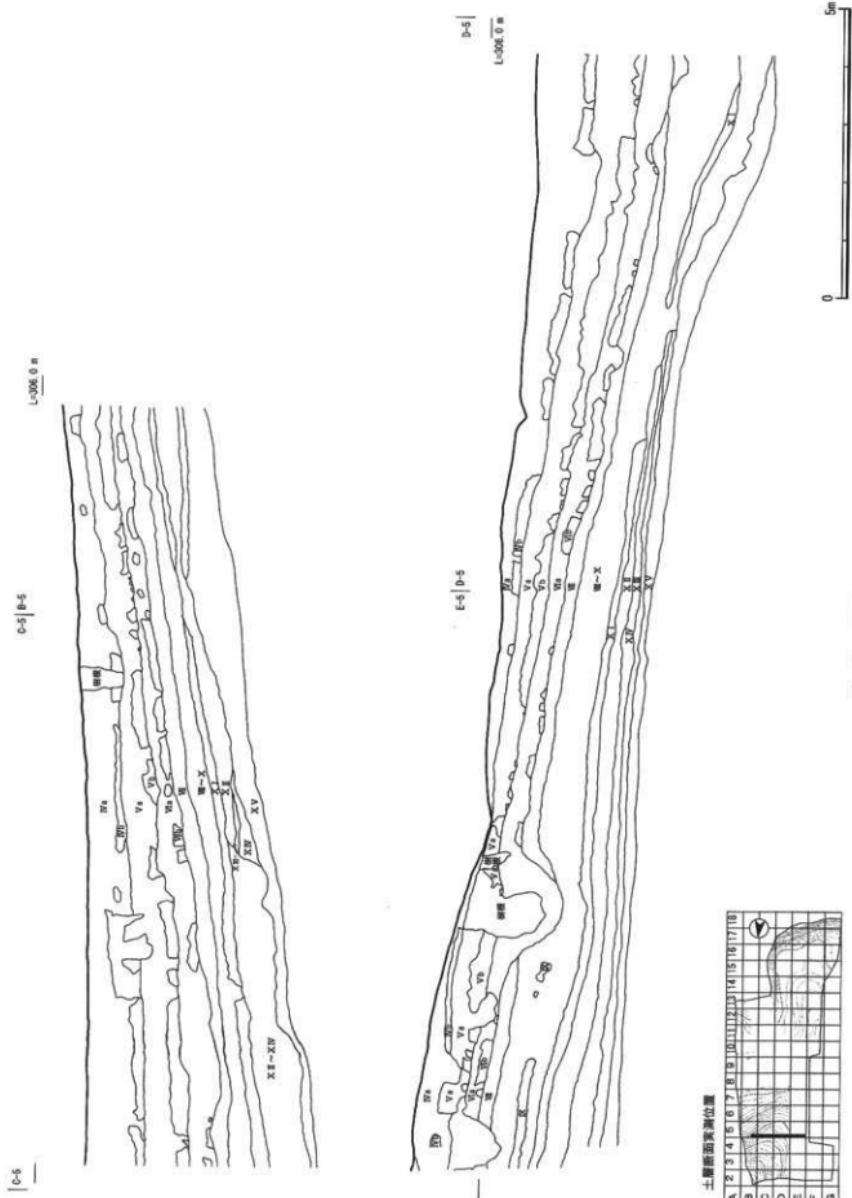
第6図 土層断面実測図(1)



## 第7圖 土層斷面測量圖(2)



第8図 土壌断面実測図(3)



### 第9図 土層断面実測図(4)

### 第Ⅲ章 縄文時代の調査

#### 第1節 調査の方法と概要

縄文時代の調査は10m四方のグリッドを設定し、全面発掘調査を行った。

調査区内は、中世相当のⅢ層がほとんどの区で削平が進んでいたが、古代から縄文時代の遺物包含層は、整然と堆積した複数の火山灰層に挟まれ、良好に保存されていた。Ⅴ層の薩摩火山灰層(P-14)とⅥb層の桜島起源軽石噴出(P-11)との間に縄文時代早期の遺構と遺物を、Ⅳb層御池駒石火山灰層の上位に縄文時代後期及び晚期の遺構、遺物を発見した。

縄文時代早期の調査では、土坑2基、集石遺構1基を、縄文時代中期の調査では、土坑4基を、縄文時代晚期の調査では、土坑3基を確認した。

#### 第2節 縄文時代の遺構

##### 1 集石遺構(第11図)

Ⅴ層で1基検出した。検出した区域は平坦な地形であったが、礫にはまとまりが見られず、散逸した状態である。礫は5~15cm大の角礫が多く、10cm以内の大さきのものが主体である。礫間のレベル差は10cm以内に収まり、掘り込みは確認できなかった。

##### 2 土坑(第12~15図)

調査区北側を中心に縄文時代早期から晚期にかけての土坑を9基検出した。埋土の色調等は図版に併載した。

###### (1)1号土坑

F-4区、Ⅴ層で検出した。上面プランは隅丸長方形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は底面に近いところでⅦ層上部の明茶褐色土、その上位にはP-11と思われる黄褐色軽石を含む淡茶褐色土が流入していることから、P-11堆積以前と判断している。

###### (2)2号土坑

D-5区、X-I層で、北側に向かって傾斜していく地点で検出した。上面プランは梢円形で、逆台形状の掘り込みの底部には明瞭な楔状の逆茂木痕が3本伴うが、樹皮等、杭の痕跡は確認できなかった。逆茂木痕の深さは平均約36cmである。

###### (3)3号土坑

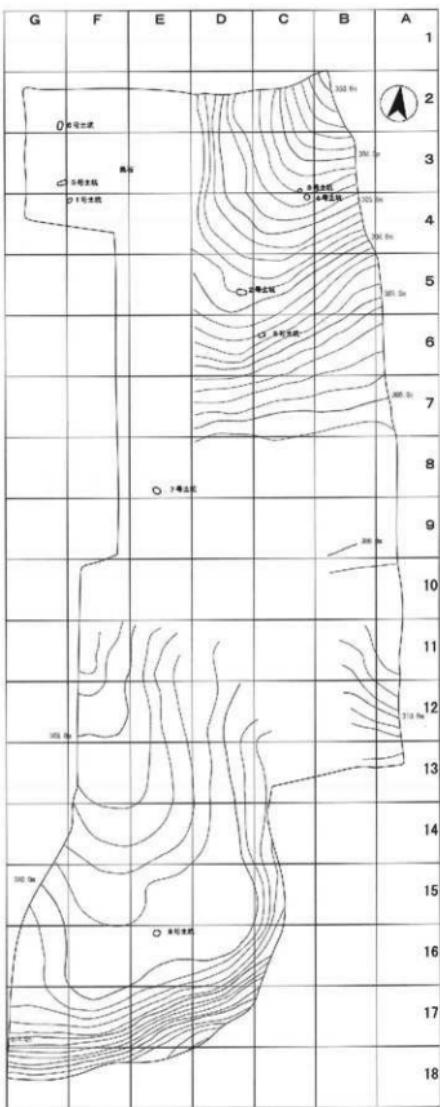
C-3区、Ⅳb層で検出した。上面プランはほぼ円形で、底面はほぼ平坦である。

###### (4)4号土坑

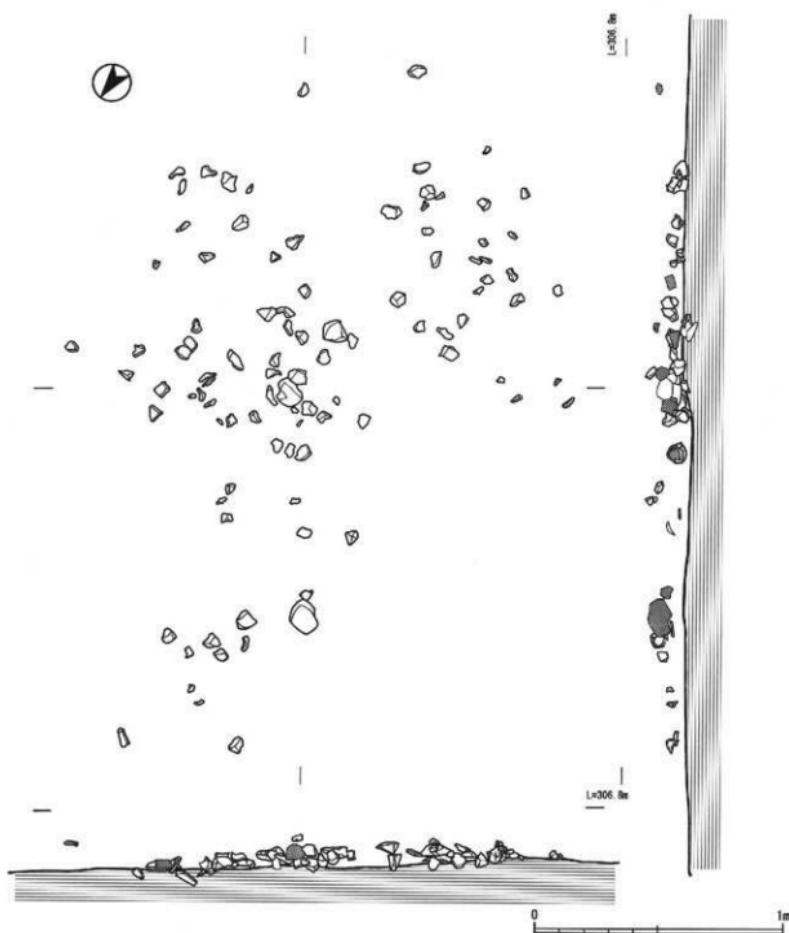
上面プランは円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや丸みをもち、中央に炭化物片を検出した。

###### (5)5号土坑

上面プランは隅丸長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中の上面に棒状(約50cm大)の炭化物片が含まれていた。炭化物は周縁部が黒炭化しているが、内部は土層が混入している。土坑は検出面より上位で掘り込まれているが、後年何らかの作用により削平等を



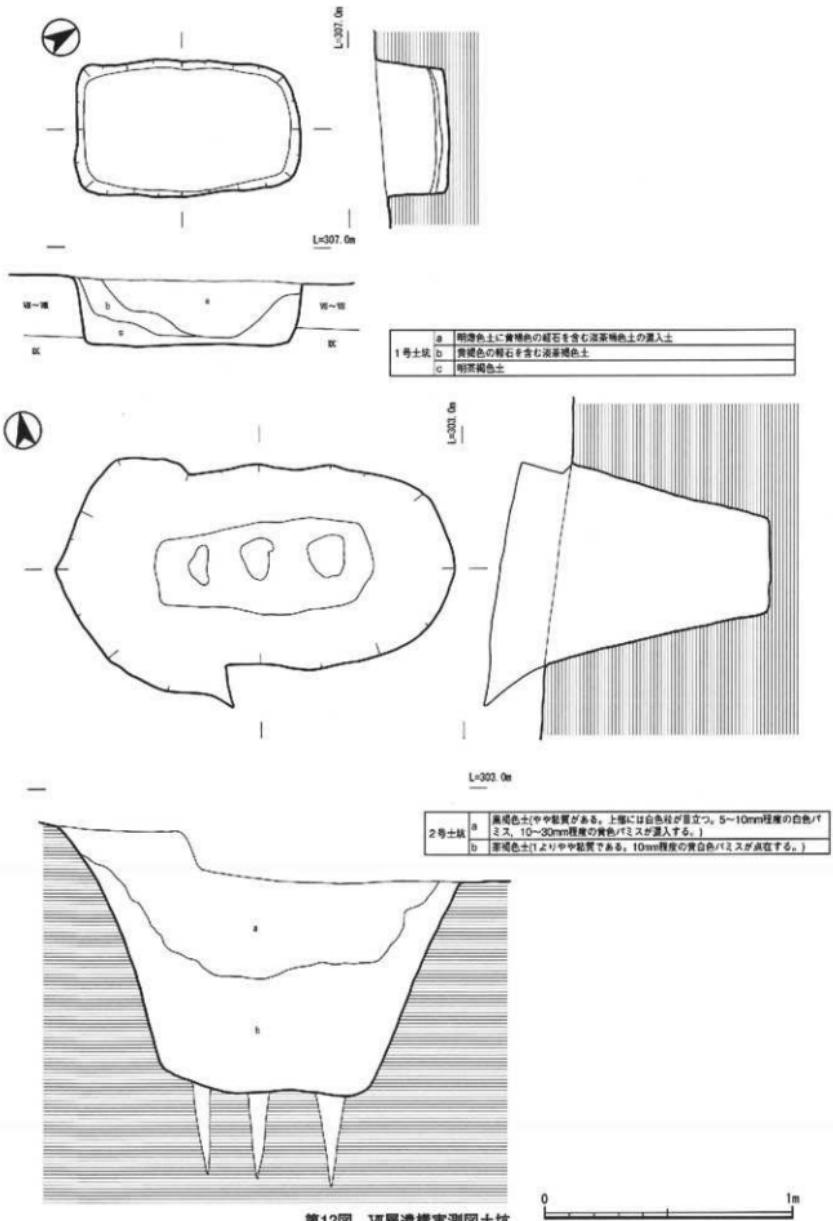
第10図 縄文時代遺構配置図(S=1/800)



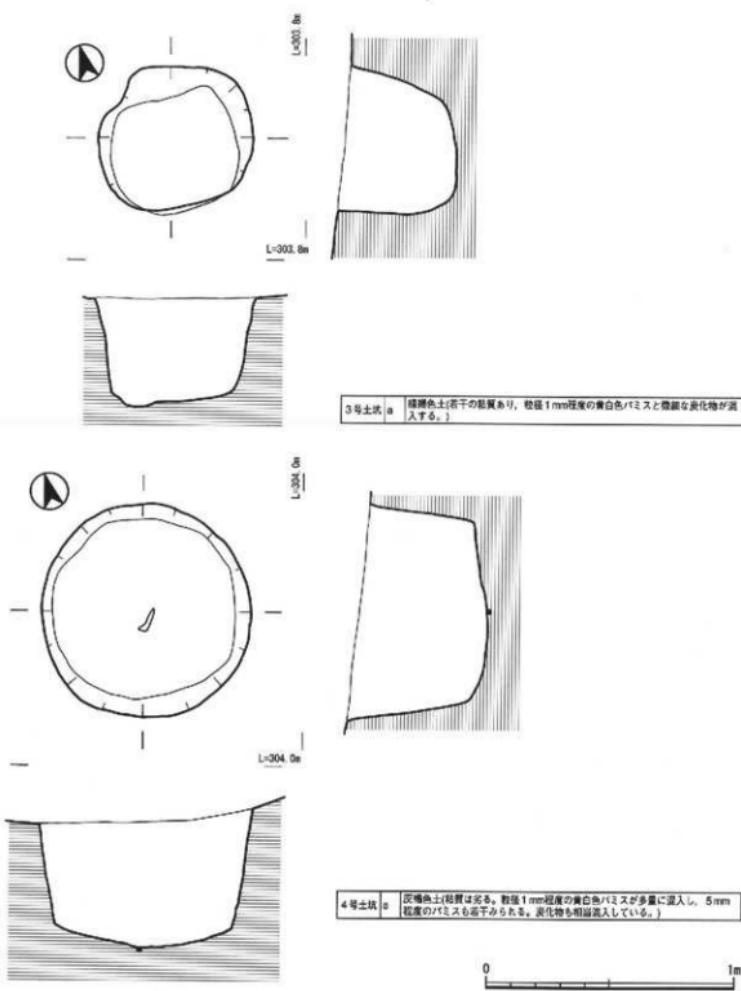
第11図 縄文時代早期集石

第3表 集石観察表

探査 番号	検出区/層	長径(cm)	短径(cm)	総面(個)	備 考
11	F-3/VII	282	205	99	壁の密着性が低く、崩れた状態である。



第12図 4層構造実測図土坑



第13図 V層遺構実測図(1)

受けたものと思われる。

#### (6) 6号土坑

上面プランは隅丸長方形、底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面に逆茂木痕を4本確認したが、長さに顕著な差異はみられない。痕跡はXII層上面まで達し、検出した掘り込みよりも深いことから、土坑自体は上位で掘り込まれたが、後年何らかの作用により削平等を受けたものと思われる

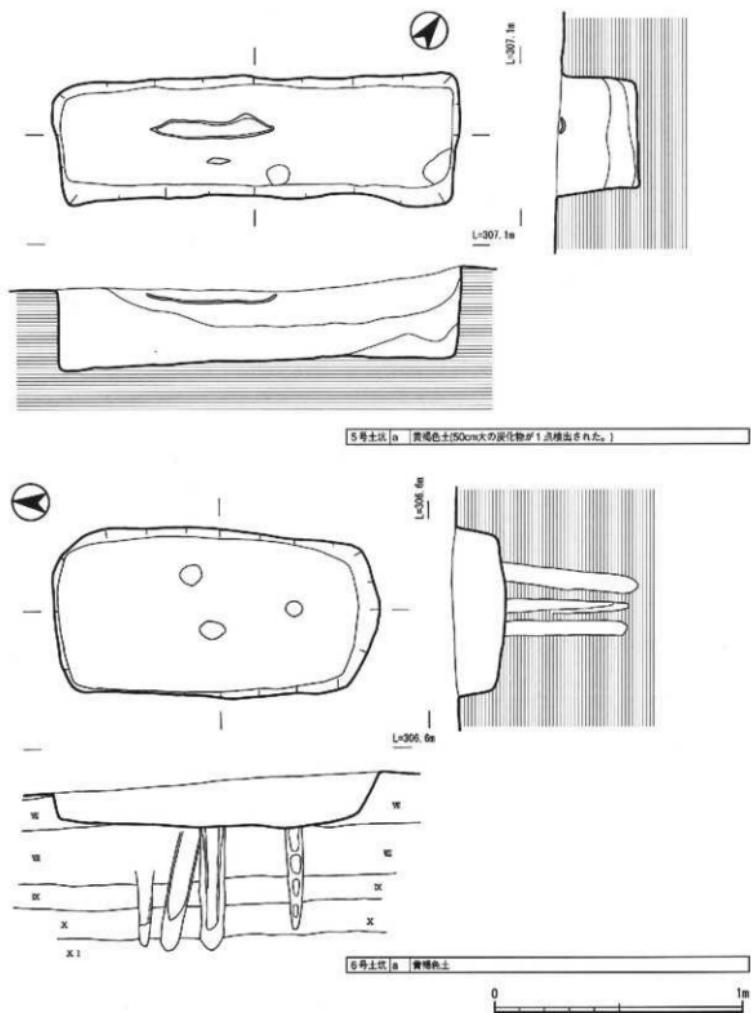
る。

#### (7) 7号土坑

上面プランは円形、壁はすり鉢状にすぼまり、底面はほぼ平坦である。V層まで掘り込まれているが、土坑上部は、後年何らかの作用により削平等を受けたものと思われる。

#### (8) 8号土坑

検出面は縄文時代早期のIX層で検出したが、埋土はIVa層

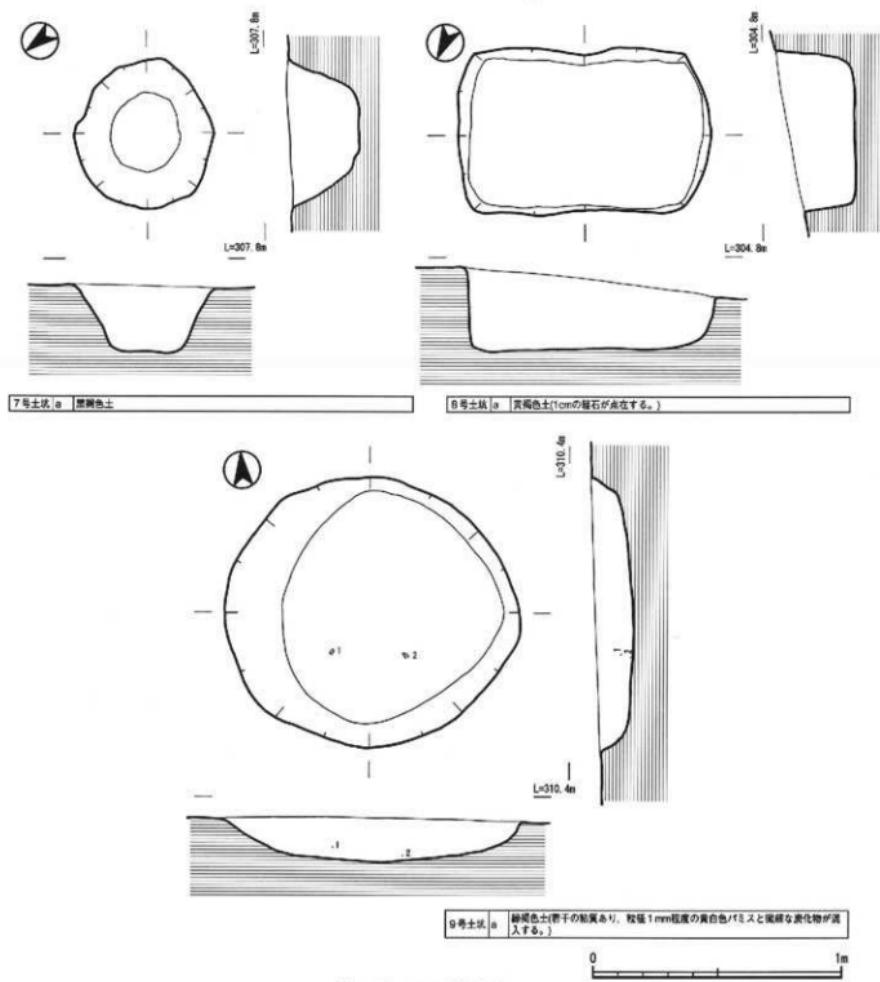


第14図 V層遺構実測図(2)

であるため、遺構の形成時期は衝池軽石火山灰堆積以降と判断した。平面プランは隅丸長方形、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面は緩斜面だが、遺構底部は平坦でほぼ水平である。

#### (9)9号土坑

平面プランは円形で、断面は浅いレンズ状である。床面近くの埋土中より土器片2点が出土したが、形式等は不明である。



第15図 IV層遺構実測図

第4表 繩文時代土坑観察表

探査番号	遺構番号	検出区/層	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
12	1号土坑	F-4/VII	91	56	26
	2号土坑	D-5/X I	162	95	102
13	3号土坑	C-3/Vb	64	59	44
	4号土坑	C-4/Vb	88	85	52

探査番号	遺構番号	検出区/層	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
14	5号土坑	G-3/Vb	131	68	20
	6号土坑	G-2/VII	163	50	33
	7号土坑	E-8/IVb	62	57	27
15	8号土坑	C-6/V	103	65	32
	9号土坑	E-16/Va	120	111	19

### 第3節 碑文時代の遺物

#### 1. 土器

##### 1類土器(第17図 1, 2)

1は、楕円押型が施されている。2はややいびつな底部である。山形押型文が施されている。

##### 2類土器(第17図 3)

3は、手向山式土器である。およそ全体部上半から胴部屈曲部にあたる。胴部屈曲部の残存状況は良好ではないが、明確な屈曲を持つ器形を呈することが想定される。同じく山形押型文を施した後に沈線を施すものである。

##### 3類土器(第17図 4-1～4-4)

4-1, 4-2, 4-3は、太形の押線文を施すことから阿高式系の土器であると考えられる。ただし、押線文を施す以前に貝殻条痕が地文として施されていない点が通常の阿高式土器と異なる点である。これらは同一個体と考えられるが、明確に接合するものではないのであえて別図で示した。これらを復元すると4-4のようになる可能性が高い。

##### 4類土器(第17図 5-1, 5-2)

5は出水式系土器である。口縁部には、並行した2本の沈線によって区画された文様帶の中に、タテ方向の連続した直線文を施す。

##### 5類土器(第18図 6～10)

6～10はおよそ後期後葉～晩期初頭頃に該当する土器であると考えられる。

6は口縁部が直行するもので外に開くものである。口縁部下の外面にヘラもしくは貝殻によるとみられる沈線が施される。納屋型タイプに類似するが、口縁部のみであるので明らかでない。

7, 8は口縁部で、口唇部がおよそ平らに面取りされ、口縁部内面に屈曲がみられる。口唇部施文帶には2条の沈線が巡る。器面調整は外外面ともヘラミガキである。

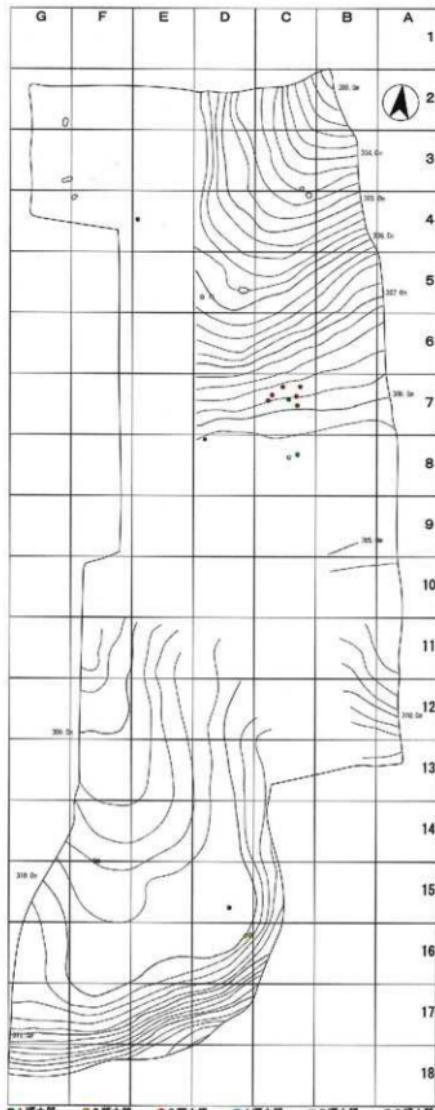
9, 10は胴部で、頭部から胴部にかけて3条の沈線を巡らす。外面の器面調整は、胴部の施文部位を境にして上部はミガキで、下部はナデが施される。内面は板目状工具による条痕を施したのちナデを施す。

10は緩やかにくの字に屈曲する頭部を持ち、胴部外面の屈曲部より上部は丁寧なナデを、胴部外面の屈曲部より下部は丁寧な上下方向のミガキを施す。内面は板目状工具による条痕を施したのちナデを施す。

これらのうちで7～10は、中岳II式土器に類似するが、やや古い要素を持つことから、さらに古い時期に該当する可能性がある。

##### 6類土器(第18図 11)

11は頭部から頭部にかけた土器片と思われ、外面に横位のナデを施した後に頭部から口縁部に向けた縦位のミガキが見られ、内面は板目状工具による条痕が見られる。推定復元すると壺形土器が想定され、中岳式土器に



第16図 1類～6類土器出土状況図(S=1/800)



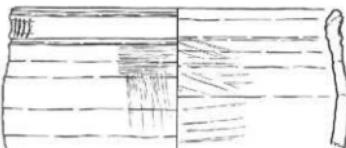
1



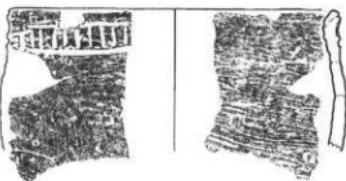
2



3



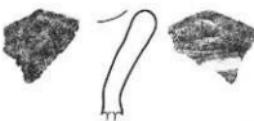
5-1



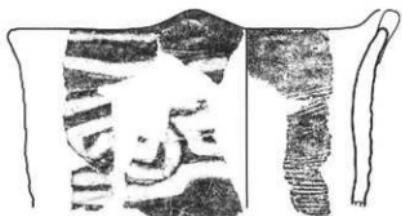
5-2



4-1



4-2



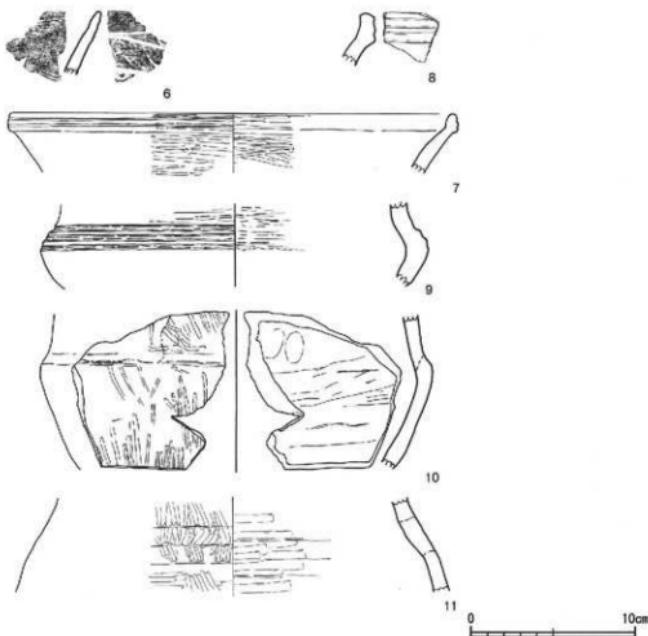
4-4



4-3



第17図 1類～4類土器実測図



第18図 5類～6類土器実測図

第5表 1類～6類土器観察表

備考	調整(外)	調整(内)	色調	焼成	器厚(cm)	底径(cm)	口徑(cm)	報告番号 (出土年分/層)	胎土	地番	頂上番号 (出土年分/層)
17 1 3896(D-15/Ⅳ) 砂粒・角閃石 - (3.9) - - 不良 5YR4/6 (赤褐色) - - 沈聖文 -											
2 90(E-4/Ⅳ) 赤色砂・石英・長石 - (4.0) (14.0) - 不良 10YR6/4 (濃い黄褐色) - - 沈聖文 -											
3 3903(D-16/Ⅳ) 石英・角閃石 - (4.7) - - 不良 10YR6/3 (濃い黄褐色) - - 沈聖文 沈銀 -											
4-1 145(C-7/Ⅲ) 角閃石 (21.4) (11.0) - - 良好 7.5YR6/4 (濃い黄褐色) - - 凹様 - 阿高式土器											
4-2 148(C-7/Ⅲ) - - - - - - - - - -											
4-3 151(C-7/Ⅲ) - - - - - - - - - -											
4-4 152(C-7/Ⅲ) - - - - - - - - - -											
4-5 160(C-7/Ⅲ) - - - - - - - - - -											
4-6 一層(+) - - - - - - - - - -											
5-1 5-2 143(C-8/Ⅲ) 石英・長石・輝石細粒多く含む 19.5 (8.7) - - 不良 10YR6/4 (濃い黄褐色) 沈銀 沈銀 出水式土器											
18 6 144(C-8/Ⅲ) - - - - - - 不良 7.5YR6/3 (褐色) - - 沈銀 -											
7 223(D-5/Ⅲ) 塗銀 26.9 (3.3) - - 良好 7.5YR6/3 (濃い黄褐色) ミガキ ミガキ -											
8 220(D-5/Ⅲ) - - (3.2) - - - - 丁寧なナデ 丁寧なナデ -											
9 一層(+) 長石・石英・角閃石 19.5 (5.1) - - 不良 5YR5/6 (明赤褐色) ミガキ ミガキ -											
10 3473(D-15/Ma) 石英・赤色粒多い 21.8 (10.0) - - 不良 7.5YR6/6 (褐) ナデ・ケズリ・無押さえ ミガキ -											
11 3479(D-15/Ma) 石英・長石・角閃石・砂粒・赤色粒が多い 21.2 (6.0) - - 良好 7.5YR6/4 (濃い黄褐色) ミコヘラナデ タテミガキ -											

付随するものとして掲載したが、縄文時代晚期終末時期の可能性もある。

#### 7 A類土器(第20・21図 12~32)

肩部が曲線をもつて屈曲し、短い口縁部をもつタイプを主体とする。口縁部径が肩部最大幅よりも幅広くなる資料はなく「黒川式土器」に属する。肩部の稜線の鋭いタイプもみられるが口縁部径が肩部最大幅よりも大きくなる資料はなく「入佐式土器」は認められない。色調は黒色あるいは灰色が多いが、わずかに茶褐色もみられる。法量は口径が10~14cmの小型と、20~24cmの中型、30~40cmの大型がみられる。内外面には丁寧な横方向のヘラ研磨が施されている。以下では個別の説明を行う。

12は長い口縁部と強く張る肩部をもつ。13~16は短い口縁部である。口縁部は玉縁状を呈する。13は口縁部外面の沈線が形骸化している。14は外面が部分的に橙色を呈している。口縁部内外面に沈線がみられる。15は肩部最大径と内面肩部上端に棱をもつ。口縁部外面の沈線は形骸化している。16は口縁部内外面に沈線がみられる。

17は肩部最大幅に鋭い稜線をもち、そこから口縁部にかけて「く」の字に外反する。口径は肩部最大幅とはほぼ同じである。器面の研磨痕は他の資料程の光沢をもたない。口縁部外面に沈線を施し、内面は段を形成している。18は肩部下半である。肩部最大幅の部分には鋭い後線を認める。肩部下半まで器厚はほとんど変わらない。23は口縁部である。外反しながら長く立ちあがり口縁端部は玉縁状を呈する。内面が沈線状、外面が段状を呈する。色調はオリーブ黒を呈する。

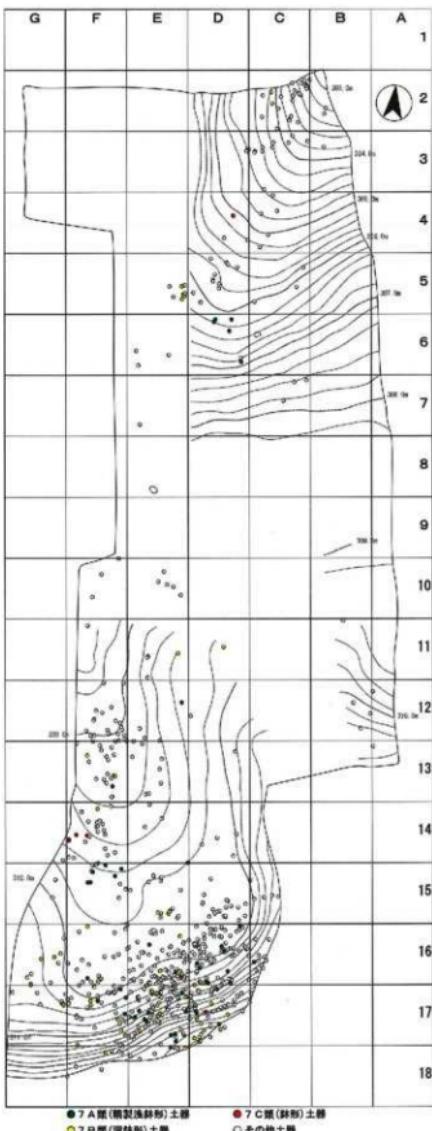
20は口縁部片で穿孔が認められ、両面から穿たれている。調整は内外面ナデである。

21、22は形態が類似する。口縁端部は上方に立ち上がり気味である。口縁部は肩部から「く」の字状に屈曲する。21は浅黄色を呈する。研磨は内外面にみられるが、光沢は認められない。口縁部は玉縁状を呈し、外面には痕跡的な沈線、内面には段がみられ、外面の器面の凹凸が目立つ。22は口縁部外面に明瞭な沈線を認め、内面には段が認められる。口縁端部の接合痕が断面で観察される。

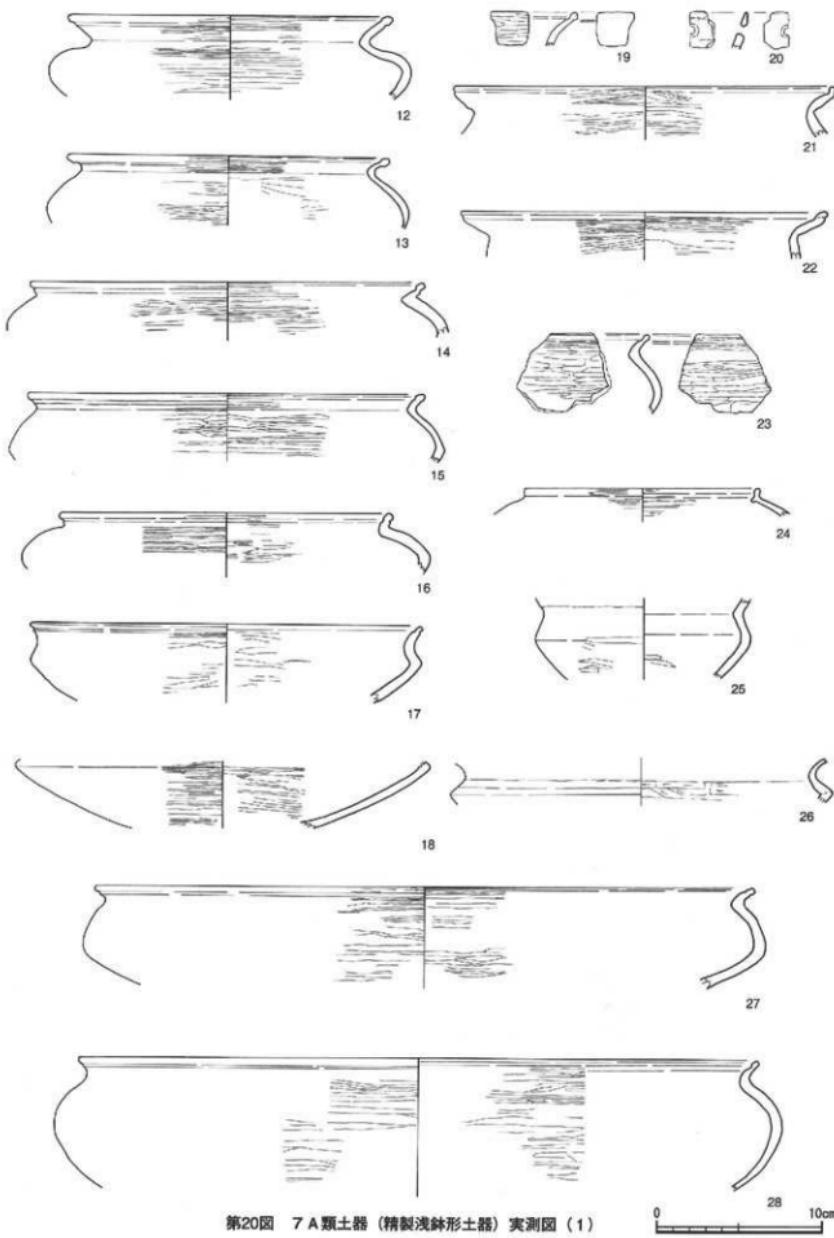
23は内面の肩部から口縁部にかけて稜が観察される。24は短い口縁部をもち口縁部と肩部の境はナデが不十分で粘土が水平に突出している。器壁が薄く外面は赤褐色を呈する。口縁部内面に沈線を施すが、外面にはみられない。24、25は小型である。砂粒を多く含み、器面のミガキも荒い。外面の肩部と口縁部の屈曲部ではナデによってわずかな段を形成している。

26は肩部最大幅部分が鋭い稜を呈し、そこから上位は「く」の字状に大きく外反する。器面はナデでミガキは認められない。

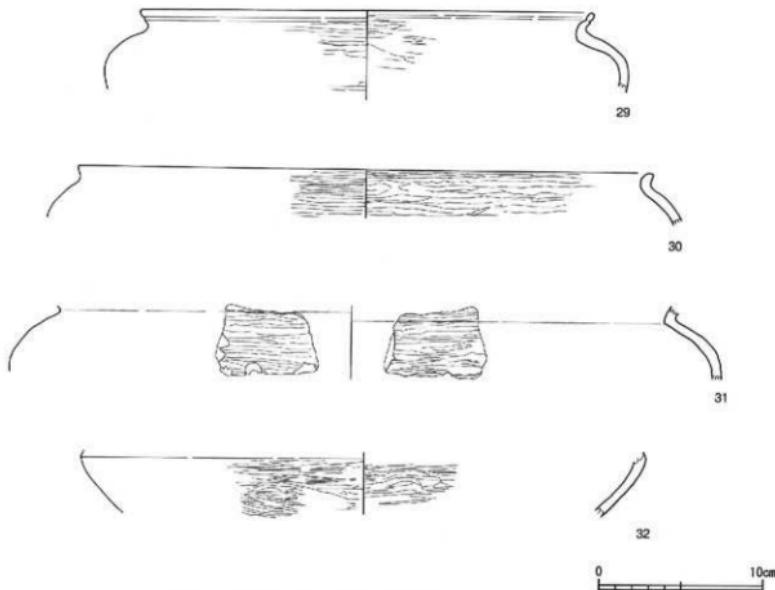
27~32は大型である。口縁部はすべて短い。27は灰黄褐色を呈する。口縁部内外面に沈線を施す。28は外面に丁寧なミガキがみられる。口縁部外面に沈線、口縁部内



第19図 7類土器出土状況図(S=1/800)



第20図 7A類土器（精製浅鉢形土器）実測図（1）



第21図 7A類土器（精製浅鉢形土器）実測図（2）

面には幅広の浅い沈線を認める。色調はにぶい黄色から灰白色を呈する。断面観察から器壁表面側1mm弱の厚みで微粒の上をかぶせていているようである。焼成による剥離等は見られないほど密着していることから、化粧土的な効果を期待した制作行為の結果ではないかと考えられる。29は口縁部外面に沈線、口縁部内面には幅広の浅い沈線を認める。30は胸部上端から短い口縁部を形成する。口縁部内外には沈線が認められない。外面は一部褐色を呈していることが断面から観察される。31は胸部上位である。胸部最大幅付近で外面からの穿孔が観察される。32は胸部下位である。内外面ともに丁寧なミガキがみられる。胸部最大幅部分は後がつよく、外面の色調はにぶい黄色を呈する。

#### 7B類土器(第22・23図 33~52)

頸部と胸部の屈曲部が近接し、肩に段を有するものがみられる。外面には、板目状工具によるとみられるヨコ方向の条痕を施すものと、ヘラミガキを施すものとがある。内面は、ヘラミガキ、ナデなどで器面調整が行われる。およよ器形は、口縁部が外湾し、肩は「く」の字状になっている。

43~45は、頸部屈曲部にリボン状の突起が貼り付けられるものである。内面は丁寧なナデが施される。外面にはススが付着し、丁寧なナデが施されるものと表面の剥落が激しいものがある。

46は、口縁部下に断面が台形に近い形状の突帯を1条貼り

付けるものである。全体的に調整は精緻ではないが、突帯の上面については丁寧なナデが施される。

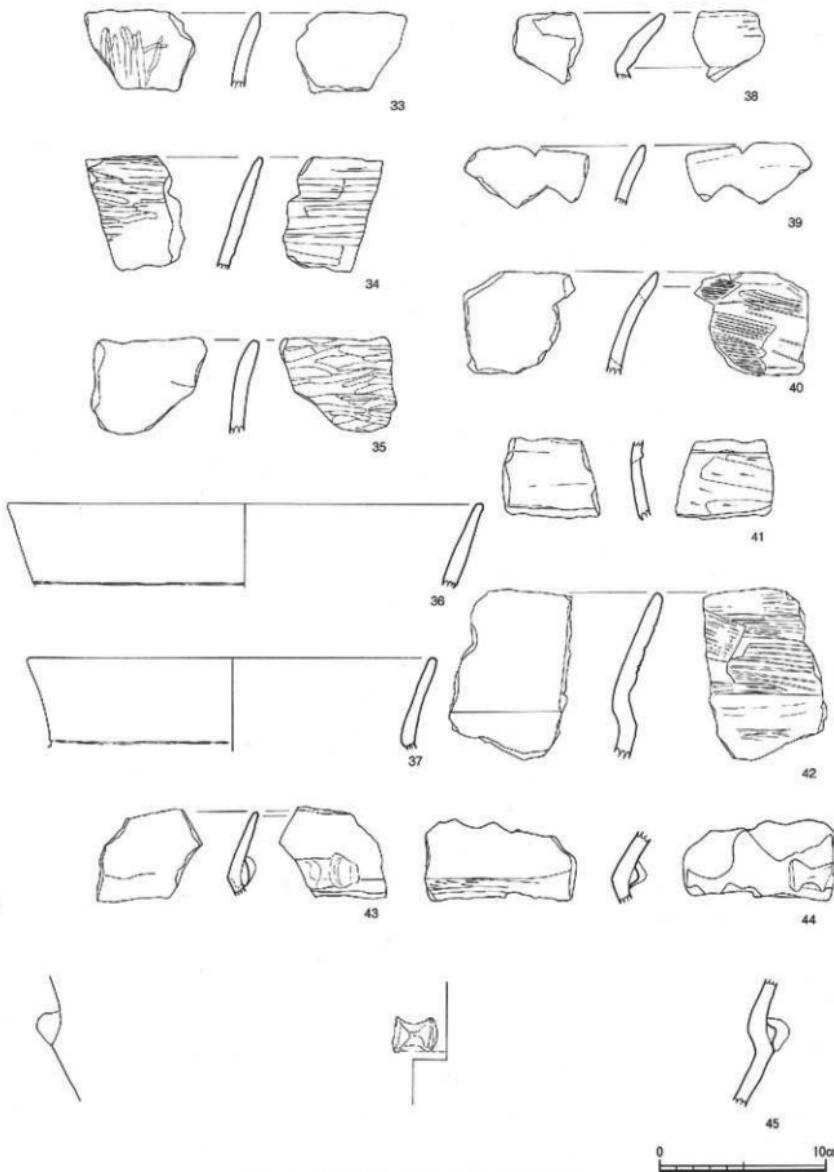
#### 7C類土器(第23・24図 60~64)

ボール状に立ち上がる唇形のもので、底の形状は明確ではないが、丸底の可能性が高いと考えられる。調整は外面が板目状工具による条痕、ナデを施し、内面には板目状工具による条痕の上をヘラミガキしている。

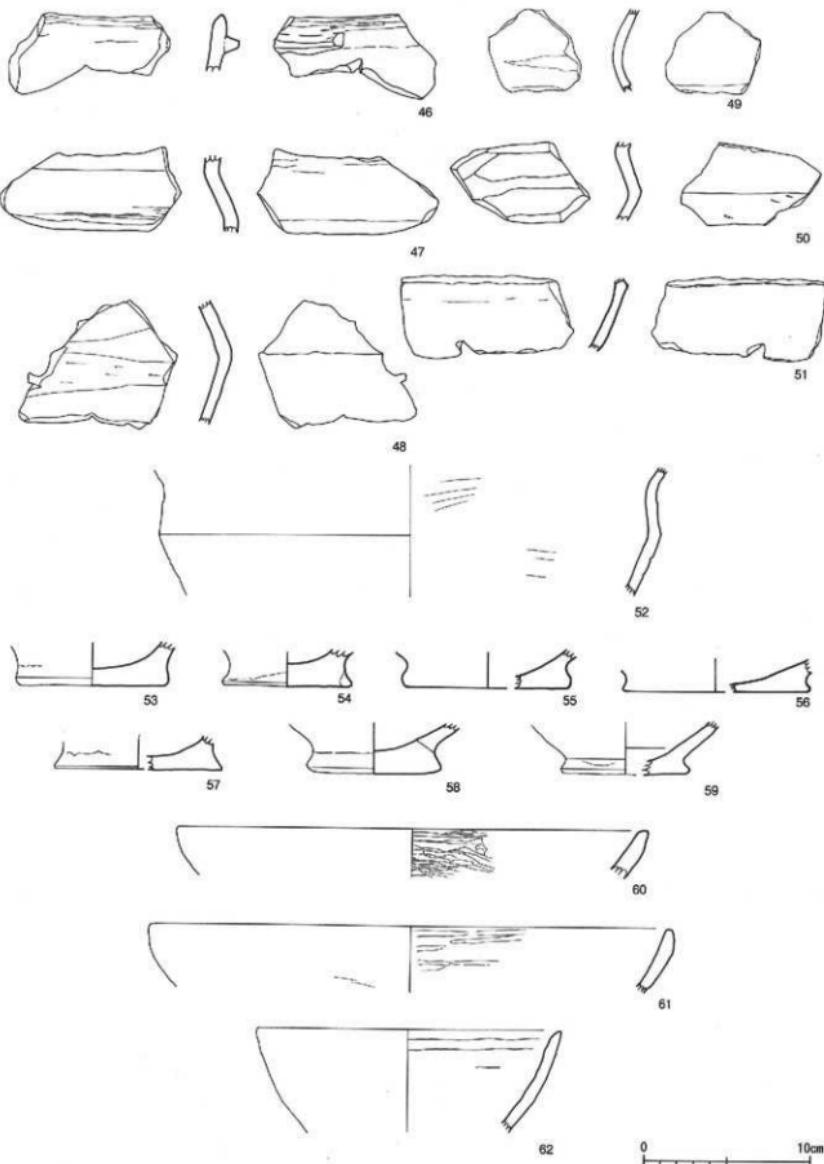
#### 底部(第23図 53~59)

晩期土器の底部を一括した。

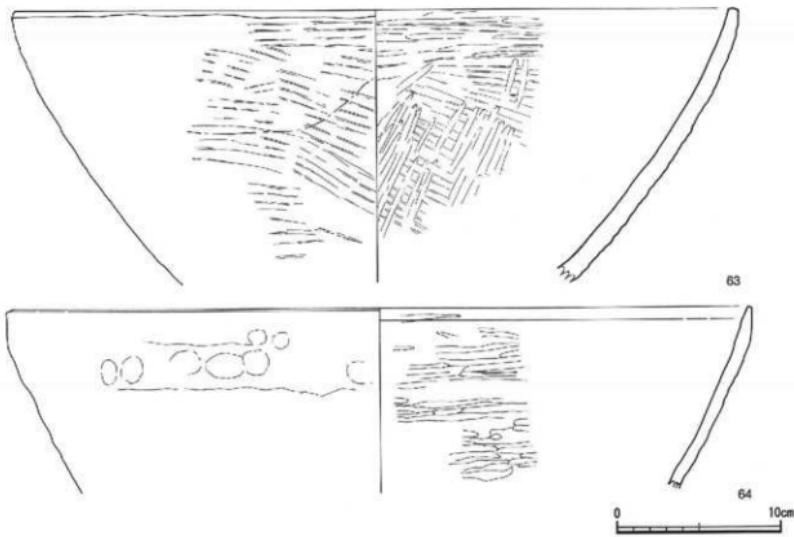
53~59は平底で、いずれも張り出し状の厚底となっている。



第22図 7B類土器(深鉗形土器)実測図(1)



第23図 7B類土器(深鉢形土器) (2) · 7C類土器(鉢形土器) 実測図 (1)



第24図 7C類土器(鉢形土器)実測図(2)

第6表 7類土器観察表(1)

標印番号	種別番号	出土上場号(出土区/層)	胎土	口徑(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
20	12	1120E-12/M <sub>1</sub>	黄石	19.4	(5.1)	-	-	良好	2.5Y1/4 (にじい青)	ミガキ	ミガキ	-
13	27	2736E-15/M <sub>1</sub> 3634E-16/M <sub>1</sub>	種織	19.2	(4.2)	-	-	良好	10YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
14	2929	D-17/M <sub>1</sub>	黄石	23.8	(3.4)	-	-	不良	10YR3/2 (黒褐色)	ミガキ	ミガキ	-
15	156	6/V	黄石, 石英	24.0	(4.2)	-	-	良好	2.5Y3/1 (黒褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	209	6/V										
	211	6/V										
16	2439	E-17/M <sub>1</sub>	黄石	20.0	(3.7)	-	-	良好	6Y4/1 (灰)	ミガキ	ミガキ	-
	2922	D-17/M <sub>1</sub>										
17	2763	F-15/M <sub>1</sub>	黄石, 角閃石	23.6	(4.8)	-	-	良好	2.5Y4/2 (褐色灰)	ミガキ	ミガキ	-
	3469	E-15/M <sub>1</sub>										
18	213D	6/V	黄石	(25.2)	(4.1)	-	-	良好	10YR2/1 (灰)	ミガキ	ミガキ	-
	214D	6/V										
19	3002	D-17/M <sub>1</sub>	粘土	-	(2.0)	-	-	良好	2.5Y7/2 (灰褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	2310F	13/V <sub>1</sub>										
20	2310F	13/V <sub>1</sub>		-	(2.2)	-	-	-	10YR17/1 (灰)	ハケ横丁字な字 字	ハケ横丁字な字 字	口縁部丸く切り落とす 1mm
21	2360E	17/M <sub>1</sub>	黄石, 石英	23.0	(3.0)	-	-	不良	2.6Y7/3 (淡青)	ミガキ	ミガキ	-
22	2526E	16/M <sub>1</sub>	黄石	22.0	(2.9)	-	-	良好	10YR7/4 (にじい青緑)	ミガキ	ミガキ	-
23	3462	F-15/M <sub>1</sub>	粘土, 黄石	-	(4.0)	-	-	良好	5Y3/1 (オリーブ灰)	ミガキ	ミガキ	-
	3674	E-15/M <sub>1</sub>										
24	2914	D-16/V <sub>1</sub>	黄石	14.0	(1.8)	-	-	不良	5Y94/6 (赤褐色)	ミガキ	ミガキ	-
25	3127	(D-17/V <sub>1</sub> )	黄石, 石英	(12.8)	(5.0)	-	-	良好	10YR7/3 (にじい青緑)	ミガキ	ナデ	-
26	3313	F-17/M <sub>1</sub>	黄石, 石英	(22.4)	(2.9)	-	-	不良	7.5Y7/3 (にじい青)	ナデ	ナデ	-
27	3292	F-17/M <sub>1</sub>	粘土	40.0	(3.5)	-	-	良好	10YR4/2 (灰青褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	3310	F-17/M <sub>1</sub>										
	3356	E-17/M <sub>1</sub>										
	2542	E-16/M <sub>1</sub>										
	3344	E-17/M <sub>1</sub>										
	2545	D-16/M <sub>1</sub>										
	2550	D-17/M <sub>1</sub>										
	2949	D-17/M <sub>1</sub>										
	2959	D-17/M <sub>1</sub>										
	3104	D-16/M <sub>1</sub>										

第7表 7類土器觀察表(2)

標(回) 番号	昭告 番号	以上番号 (出土区・層)	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	基厚 (cm)	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
20	28	2369E-17/V(a) 2269E-17/V(a)	標識、長石	41.0	8.1	-	-	良好	10YR7/3 (にぶい青)	ミガキ	ミガキ	-
21	29	234E-17/V(a) 237E-17/V(a)	長石	27.6	(5.0)	-	-	不良	2.5YR6/2 (灰青色)	ミガキ	ミガキ	-
30	31	319E-15/V(a) 361F-17/V(a) 372F-15/V(a)	長石	34.6	(3.0)	-	-	不良	10YR7.1/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
31	32	306G-15/V(a)	長石	(36.6)	(4.5)	-	-	良好	7.5YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
32	33	2359E-17/V(a) 2437E-17/V(a)	長石、石英	(34.0)	(4.0)	-	-	良好	2.5YR6/3 (にぶい青)	ミガキ	ミガキ	-
22	33	2353E-16/V(a)	長石、石英	-	(4.6)	-	-	不良	7.5YR4/4 (褐色)	ケズリ後ナデ	ナデ	-
34	35	3350E-17/V(a) 3638E-17/V(a)	角閃石	(6.8)	(7.9)	-	-	良好	10YR4/2 (灰青褐色)	ミガキ	柔軟	-
35	36	3709(5-16/V(a)	長石	-	(5.8)	-	-	良好	2.5YR2/1 (黒)	ナデ	ミガキ	-
36	37	3666F-16/V(a)	長石、石英	28.8	(5.2)	-	-	不良	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	ナデ	-
37	38	3380E-17/V(a) 3656E-17/V(a)	長石、石英	24.8	(5.8)	-	-	良好	10YR4/2 (灰青褐色)	ナデ	粗いナデ	-
38	39	2302F-14/V(a)	長石	-	(4.3)	-	-	不良	10YR7/3 (にぶい青)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
39	40	2459(D-17/V(a) 3246E-17/V(a)	長石、石英	-	(3.8)	-	-	良好	10YR3/2 (灰青色)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
40	41	-(-/-)	青色粒、長石、 角閃石	-	(6.3)	-	-	不良	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	ミガキ	柔軟	-
41	42	1439C-2/V(a)	長石、石英、角 閃石	-	(4.8)	-	-	良好	5YR5/6 (黒)	ケズリ	ミガキ	-
42	43	82E-5/V(a) 85E-5/V(a) 245E-5/N上)	砂粒、長石	-	(10.2)	-	-	不良	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	ナデ	ナデ、柔軟	-
43	44	3624F-17/V(a)	長石、角閃石	-	(5.3)	-	-	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	ナデ	-
44	45	3333F-18/V(a) 3348E-17/V(a)	長石	-	(4.0)	-	-	良好	7.5YR6/6 (黒)	ナデ	柔軟	-
45	46	2021E-12/V(a) 2813E-15/V(a) 2822E-15/V(a) 3207E-15/V(a)	長石、石英、角 閃石	44.0	(7.7)	-	-	不良	10YR5/3 (にぶい黄褐色)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
23	47	2462D-17/V(a) 2544E-16/V(a)	長石、石英、角 閃石	-	(4.6)	-	-	良好	5YR3/2 (暗褐色)	ケズリ	ミガキ	実際上面丁寧なナデ
47	48	2354E-17/V(a)	石英、角閃石	-	(4.6)	-	-	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
48	49	3649G-17/V(a) 3659G-17/V(a)	長石、石英	-	(7.6)	-	-	良好	2.5YR2/1 (黒)	ケズリ	ナデ	-
49	50	3639F-17/V(a)	長石、石英	-	(5.0)	-	-	良好	2.5YR5/2 (暗褐色)	ナデ	粗いナデ	-
50	51	3384F-18/V(a)	砂粒、角閃石	-	(4.9)	-	-	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	ミガキ後ナデ	-
51	52	2919(D-17/V(a) 2994D-17/V(a)	長石、石英、角 閃石	-	(4.4)	-	-	良好	10YR4/1 (黒)	ナデ	丁寧なナデ	-
52	53	2604C-16/V(a)	長石、角閃石	(31.0)	(5.1)	-	-	不良	5YR5/6 (暗褐色)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
53	54	2389E-17/V(a) 2393E-17/V(a) 2395E-17/V(a) 3269E-17/V(a) 3283E-17/V(a)	青色粒、長石、 長石、角閃石	-	(2.7)	8.6	-	不良	5YR5/6 (暗)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
54	55	2456D-17/V(a)	石英、砂粒	-	(2.1)	7.6	-	不良	2.5Y5/6 (明褐色)	ミガキ	ミガキ	-
55	56	2471D-17/V(a) 2989D-17/V(a)	長石、石英	-	(2.5)	10.0	-	不良	5YR4/9 (明褐色)	ナデ	ナデ	-
56	57	1071D-11/V(a) 2985D-17/V(a)	長石、石英	-	(2.0)	11.0	-	不良	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	柔軟	-
57	58	1551(F-13/V(a) 1981(E-11/V(a)	石英	-	(2.1)	10.0	-	不良	2.5Y5/6 (明褐色)	ナデ	ミガキ	-
58	59	2451(D-17/V(a)	砂粒	-	(2.2)	8.0	-	不良	5YR5/6 (明褐色)	ナデ	ケズリ	-
59	60	3407F-17/V(a) 3413F-17/V(a)	砂粒	-	(3.2)	7.4	-	不良	5YR5/6 (明褐色)	ナデ	ケズリ	-
60	61	1542D-4/V(N)	長石、石英	28.6	(3.0)	-	-	不良	7.5Y2/1 (黒)	ミガキ	ナデ	口跡スス付着
61	62	2480E-16/V(a)	石英	32.0	(3.8)	-	-	不良	7.5YR5/6 (明褐色)	ミガキ	ナデ	-
62	63	2467(D-17/V(a)	長石	18.4	(6.4)	-	-	不良	5YR5/6 (明褐色)	ナデ	ナデ	-
24	63	2350E-18/V(a)	長石、石英	43.6	(17.0)	-	-	不良	10YR7/6 (明褐色)	ケズリ後ナデ	柔軟	-
64	65	3499F-14/V(a) 3499F-14/V(a) 3632F-14/V(a) 3601F-14/V(a)	砂粒	45.0	(11.4)	-	-	不良	10YR7/6 (明褐色)	ミガキ	ナデ、粗雑さえ	-

## 2. 石器

### 石器（第26図 65~77）

13点の石器を掲載した。全て打製石器で、65はⅣ層、外は全てⅣ層出土の石器で、石材は黒曜石、チャート、頁岩、玉髓を使用する。

基部調整法によって凹基・平基の2種に分けることができる。

凹基は11点で、えぐりの深いものと浅いものに大別できるが、浅いものが多い。66~74のえぐりは浅く丸みをおびており、67は一部に自然面を残すものの、どれも丁寧な二次加工を施す。73、74は長さの割に幅の狭い長二等辺三角形を呈するが、先端部はやや鈍角となる。76、77は深いえぐりをもち、脚部が細い。いずれも調整は細かく丁寧である。

65、75は平基の石器で、65は主要剥離面を残さない丁寧な調整を施すが、75は自然面、主要剥離面を残し、調整も粗く未製品の可能性もある。

### 微細剥離痕片（第26図 79、80）

79は玉髓製、81はチャート製で、いずれも縁辺部を中心使用痕と思われる微細な痕跡がみられる。

### 二次加工剥片（第26図 78、81 第28図 93）

78、81、93は二次的な調整痕が認められる加工品として抽出した。78は菱形の断面形を呈しており、加工の状態から複形石器の可能性もある。81は黒曜石製で、正面下端、および裏面側縁部に調整が明瞭にみられる。93は頁岩製で、正面が主要剥離面の可能性もあるが、作図の関係上表示している。裏面の両側縁に平坦な二次加工が認められ、先端部は直線的となり、ヘラ状石器、あるいは楔形石器の機能も認められる。

### 石核（第26図 82、83）

82はチャート製、83は黒曜石製の石核で、83は頻繁に打面転移を繰り返す。

### 打製石斧（第27図 84、85）

84、85は扁平な頁岩の素材剥片を使用した打製石斧であり、Ⅳ層から出土している。

形状は、84は上部の一部を欠損する。中央部がやや厚く、縁辺部にいくほど薄くなっている。85は全体的に薄く、扁平である。両者とも扁平な素材を活かし素材の周縁部を加工して使用しており、研磨した痕は確認することができない。

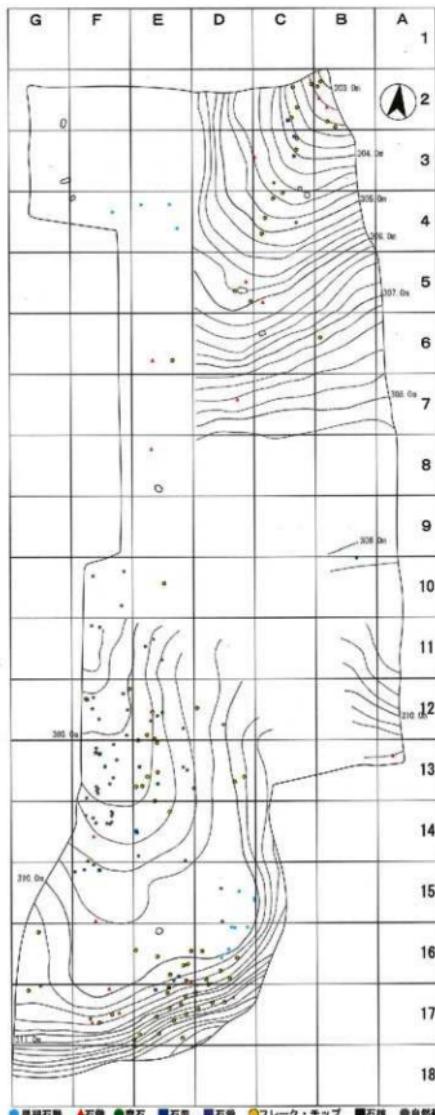
### 磨石、敲石、石皿類

本遺跡から、出土した磨石、敲石、石皿類のうち、磨石・敲石3点、敲石1点、磨石1点、凹石1点、石皿1点を資料化した。石材には、輝石安山岩、砂岩が使用されている。

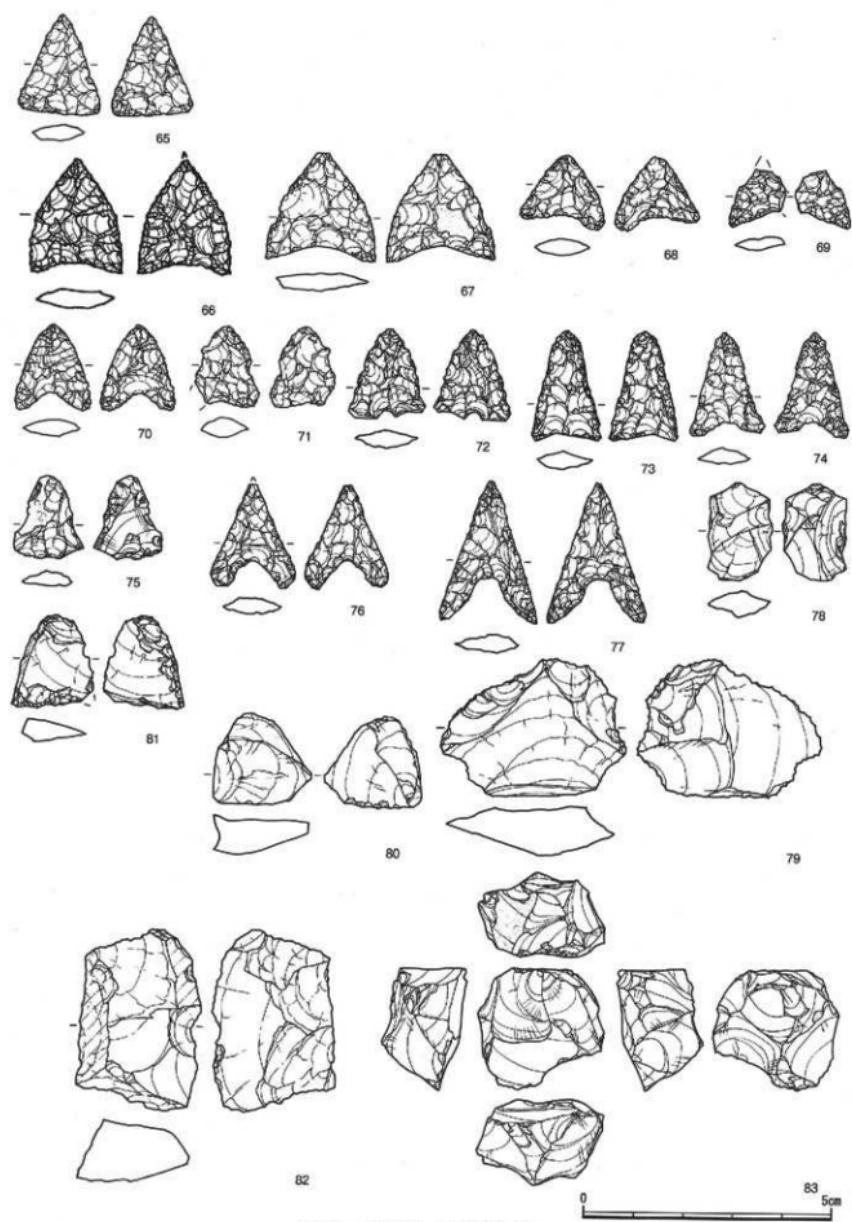
86、87がⅣ層出土で他はすべてⅣ層である。

### 凹石(第27図 86)

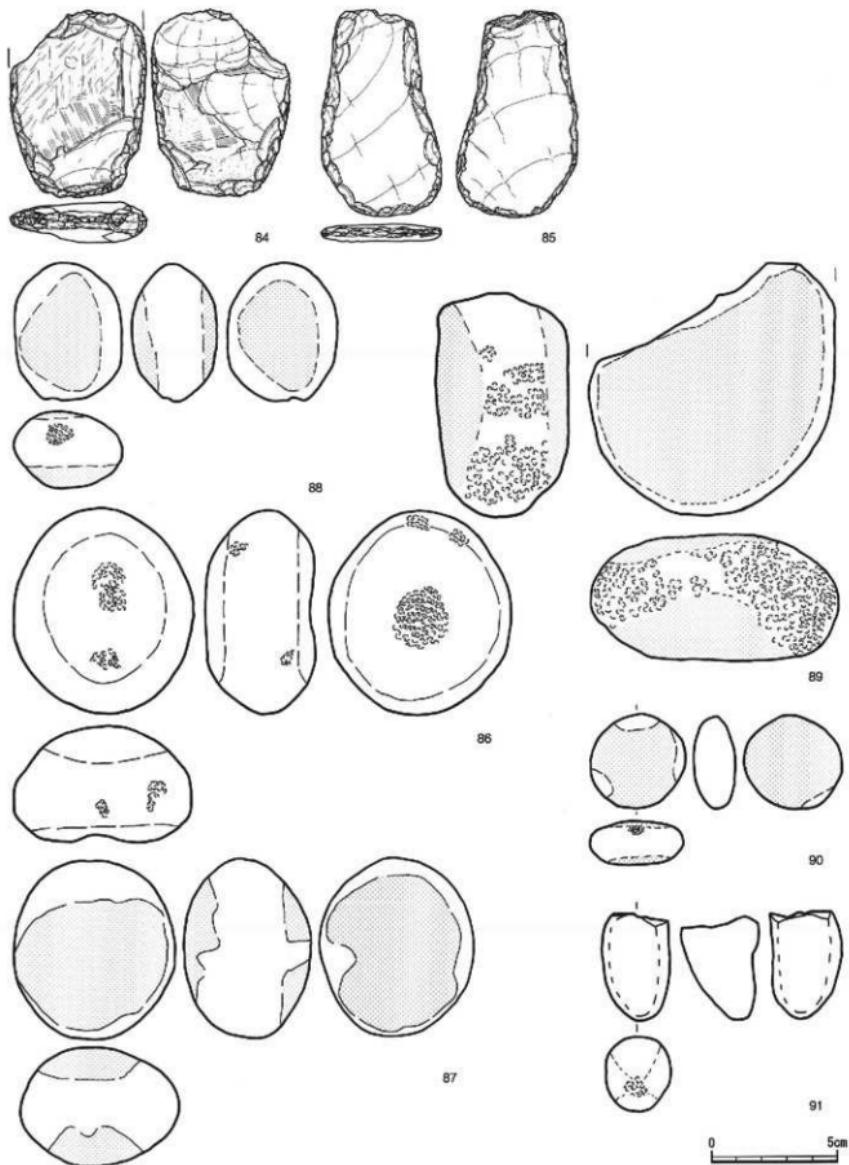
86は、円錐を使用した凹石である。表面中央部、縁辺部、側面部に敲打痕がみられ、表面中央部がやや円形にくぼんでいるのが確認できる。この資料は、表面が赤



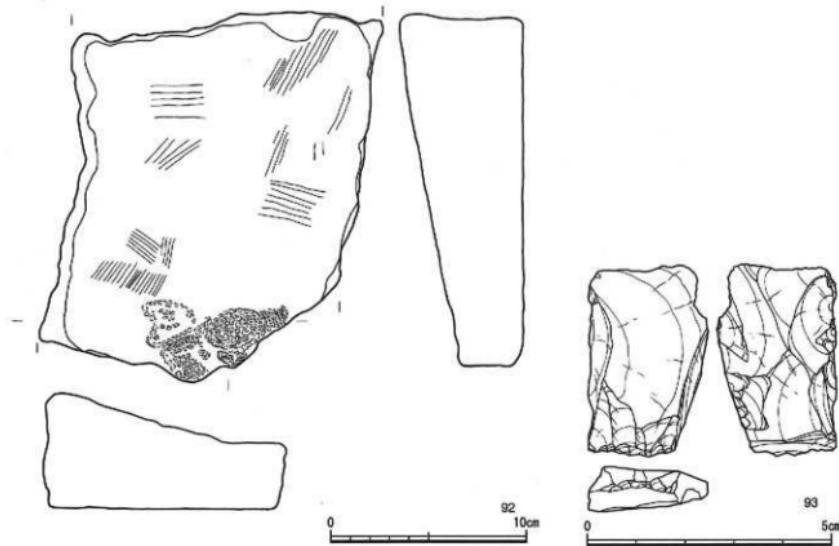
第25図 桶文時代出土石器分布図(S=1/800)



第26図 縄文時代 石器実測図(1)



第27図 桶文時代 石器実測図(2)



第28図 縄文時代 石器実測図(3)

化しており、被熱により、赤化したのではないかと考えられる。

#### 磨石(第27図 87)

87は、円盤を使用した磨石で、断面形は梢円を呈する。表面全般に磨面が形成されているのが確認でき、表面及び側面部には敲打面は確認できない。

#### 磨石・敲石類(第27図 88~90)

円、亜円盤を使用し、磨面および敲打面が形成される石器である。88、90は円盤を使用し、表面に磨面が作られ、側面部には部分的に敲打面が形成されている石器である。88は下方部に敲打面が發達しているのが確認でき、90は表面が全般的に磨面になっているのが確認できる。

89は、前述した磨石・敲石類よりもやや大型の円盤を使用した磨石・敲石で、途中で破損しており、断面形は梢円を呈する。表面全般に磨面が形成されているのが確認でき、側面部には、多くの敲打面を確認することができる。特に、右下側面部に、敲打痕が集中しているのを確認することができ、この部分を頻繁に使用していたのではないかと考えることができる。

#### 敲石(第27図 91)

91は、柱状の縄を使用した石器である。途中で破損しているため形状は指状になっている。平面形は梢円を呈してい

る。先端部に敲打痕を確認することができる。磨面は確認できない。

#### 石皿(第28図 92)

92は、大型の扁平盤を使用した石皿である。破損しているが3分の2以上は残存していると思われる。縁の傾斜面を利用して、使用された痕跡がみられる。下方部に敲打痕が集中しているのを確認することができる。

第8表 桜文時代 石器観察表

機器番号	報告番号	頂上番号 (出土区/層)	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
26	65	3900(F-16/Va)	石斧	玉髓	20.9	16.0	3.5	0.87	-
	66	2550(S-Vf)	石斧	o b	24.0	19.0	4.0	1.45	-
	67	3307(F-17/Va)	石斧	頁岩	22.0	22.0	3.1	1.18	-
	68	1430(B-2/Va)	石斧	頁岩	14.7	16.7	3.3	0.61	-
	69	1428(B-2/Va)	石斧	o b	(12.0)	(11.3)	(2.1)	(0.27)	-
	70	1517(D-3/Va)	石斧	チヤート	17.3	15.3	3.9	0.65	-
	71	2477(E-16/Va)	石斧	チヤート	(16.7)	(13.4)	(3.9)	(0.70)	-
	72	3618(F-17/Va)	石斧	o b	18.7	16.0	3.9	0.73	-
	73	3433(F-15/Va)	石斧	チヤート	22.7	14.0	4.3	0.91	-
	74	3417(F-17/Va)	石斧	チヤート	22.0	15.3	3.5	0.66	-
	75	1419(B-2/Va)	石斧	o b	16.7	14.7	1.2	0.50	-
	76	1324(A-13/Va)	石鏃	頁岩	(21.3)	17.3	3.9	(0.63)	-
	77	3534(F-14/Va)	石鏃	チヤート	28.7	20.0	3.1	0.94	-
	78	3380(F-17/Va)	二次加工削片	チヤート	20.0	13.3	4.2	1.18	-
	79	3376(F-18/Va)	二次加工削片	玉髓	25.0	37.3	9.0	8.12	-
	80	3359(E-17/Va)	二次加工削片	チヤート	18.0	19.3	7.7	2.60	-
	81	-種(E-11/X)	二次加工削片	o b	19.3	(16.0)	(3.2)	(1.08)	-
	82	3342(E-17/Va)	石鏃	チヤート	36.7	26.0	11.6	10.31	-
	83	2404(E-17/Va)	石鏃	o b	24.7	26.0	13.5	9.35	-
	84	1486(C-3/Va)	石斧	頁岩	(77.0)	54.0	(15.0)	(72.36)	-
	85	1475(C-3/Va)	石斧	頁岩	83.0	50.0	6.0	38.13	-
	86	3914(D-15/Vt)	刮石	砂岩	83.5	75.0	45.0	340.0	-
	87	3913(D-15/Vt)	磨石	砂岩	72.5	64.5	49.0	300.0	-
	88	1344(B-10/Va)	磨石/敲石	骨石/山岩	54.0	44.0	32.0	105.0	-
	89	9640(E-12/Va)	磨石/敲石	骨石/山岩	(90.0)	(97.0)	(52.0)	(740.0)	-
	90	78(E-6/N)	磨石/敲石	骨石/山岩	40.0	38.0	18.0	40.0	-
	91	2406(E-17/Va)	敲石	骨石/山岩	(45.0)	(27.0)	(30.0)	(45.0)	-
28	92	2754(E-14/Va)	石油	骨石/山岩	(178.0)	(146.5)	(59.0)	(3110.0)	-
	93	3722(G-16/Va)	二次加工削片	頁岩	38.7	24.7	6.4	7.90	算出

## 第V章 古代の調査

### 第1節 調査の方法と概要

古代の調査は、10m四方のグリッドを設定し、Ⅲ、Ⅳ層を中心に全面発掘調査を行った。古代の遺構はⅣa、Ⅳb層で検出し、遺物は且層下部からⅣa層上面で大半が出土する傾向を確認している。

遺構は掘立柱建物跡、ピット（柱痕を含む）、焼土跡、土坑、火葬墓（容器埋納遺構）を検出している。掘立柱建物跡は調査区南側の丘陵平坦部で4棟、土坑は南側の丘陵を中心に10基、焼土は4基検出した。焼土の1基は掘立柱建物跡に付随する可能性が高い。また、建物跡と認定できないピット（柱痕）を多数検出したが、本報告では検出状況を平面図で記録するにとめた。

### 第2節 古代の遺構

#### 1. 掘立柱建物跡

E・F-13~15区の狭いエリアより4棟検出した。建物周辺は平坦面をなし、道路内では安定した地形である。

2間×3間が3棟、2間×2間が1棟である。規格性の認められる柱痕から判断したもので、上屋構造は復元できない。床面積は最小8.40m<sup>2</sup>、最大25.58m<sup>2</sup>で均一性がない。葉間平均は334.38cm、桁行平均は475.25cmである。柱痕の平面形は梢円形もしくは円形、断面は矩形状、底面は平坦もしくは丸味を帯びる。平面の長径平均は27.63cm、短径平均は22.95cm、深さの平均は43.35cmである。掘立柱建物跡を中心としたエリアでは、土器・食器・食料具を中心に赤彩・黒色土器や須恵器、さらに焼塗壺の小片等が多数出土した。調査区F-12~14区のエリアでの遺物出土の空白域は、現代の耕作による搅乱によるものである。

##### ① 1号掘立柱建物跡（第30図）

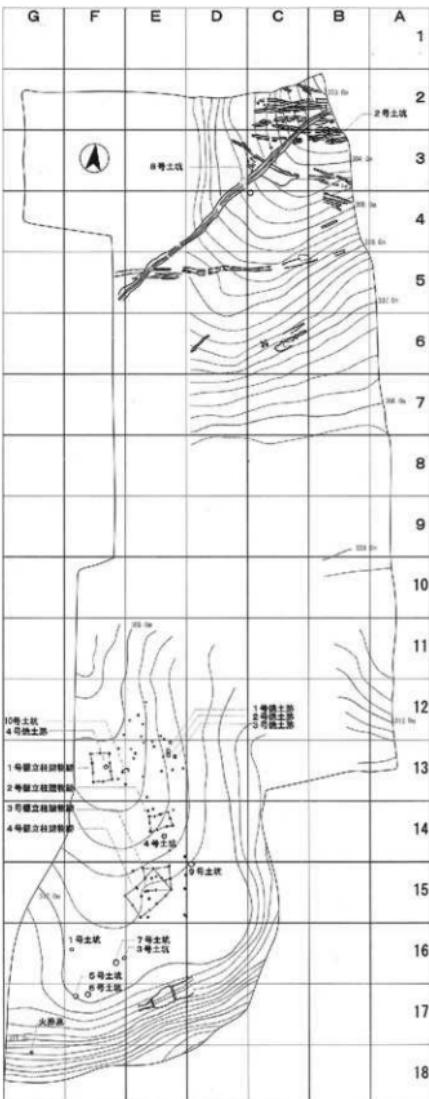
F-13区、Ⅳb層上面で検出し、主軸を南北、柱並びが4棟中最も整っている。ピットの深さの平均は4棟中で最も浅く、24.5cmである。ピットの平面形は梢円形が多く、断面は矩形状を基本とするが丸味をなすものもある。身舎中央からややずれた位置で4号焼土を検出した。

##### <4号焼土>

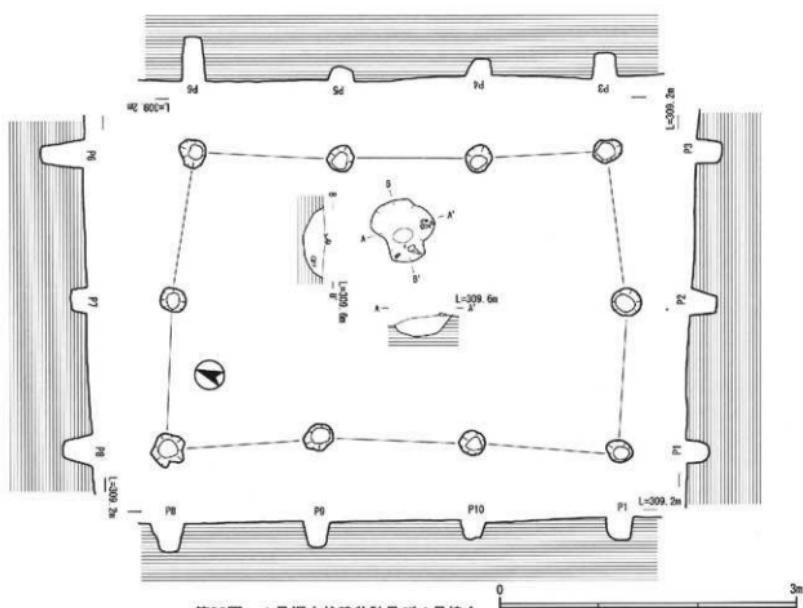
建物跡とは検出面が異なるが、埋土に差異はなく敷設遺構と判断した。平面形は変則的な梢円形、断面はレンズ状。残存状況は被熱によって生じた白桃色の灰とⅣa層の明褐色土が混ざった状態である。

##### ② 2号掘立柱建物跡（第31図）

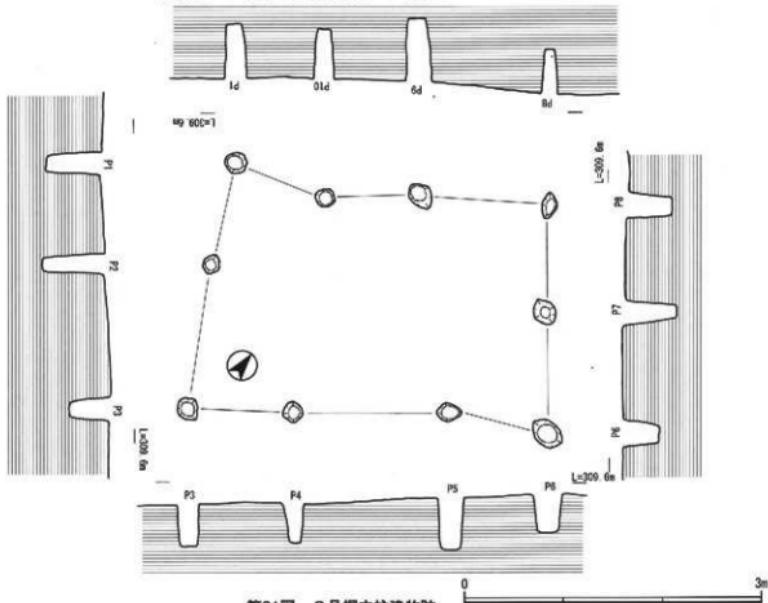
E-14区、Ⅳb層上面で検出し、主軸を東西にとる。4棟中最も床面積が小さく(8.40m<sup>2</sup>)、柱並びは不揃いである。ピットは平面が梢円形で、断面が矩形状になる。南側に4号土坑が隣接する。



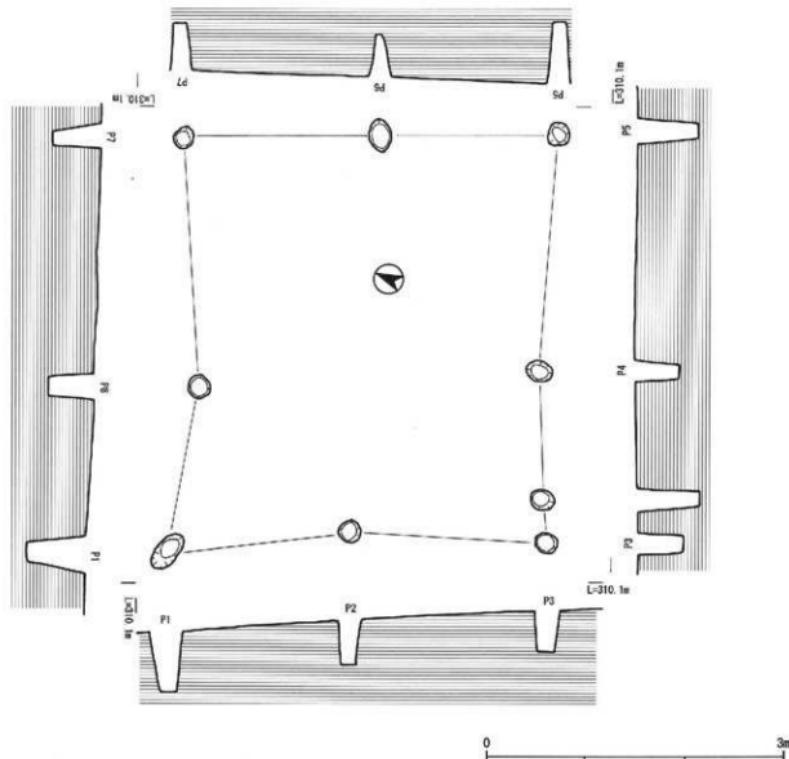
第29図 古代遺構配置図(S=1/800)



第30図 1号掘立柱建物跡及び4号焼土



第31図 2号掘立柱建物跡



第32図 3号掘立柱建物跡

③ 3号掘立柱建物跡（第32図）

E-15区、IVb層上面で検出し、主軸を東西、柱並びはほぼ直線的で4号掘立柱建物跡と切り合い、ピット2本を共有する。ピットは平面が橢円形で断面は矩形状。検出面とピットの埋土の相違は明確ではないため断定は困難であるが、主軸を基準とした場合、より南北に近い軸をとる4号掘立柱建物跡が先行していた可能性がある。西側約1mに内黒土師器の高台付亘が1点出土したピットがある。

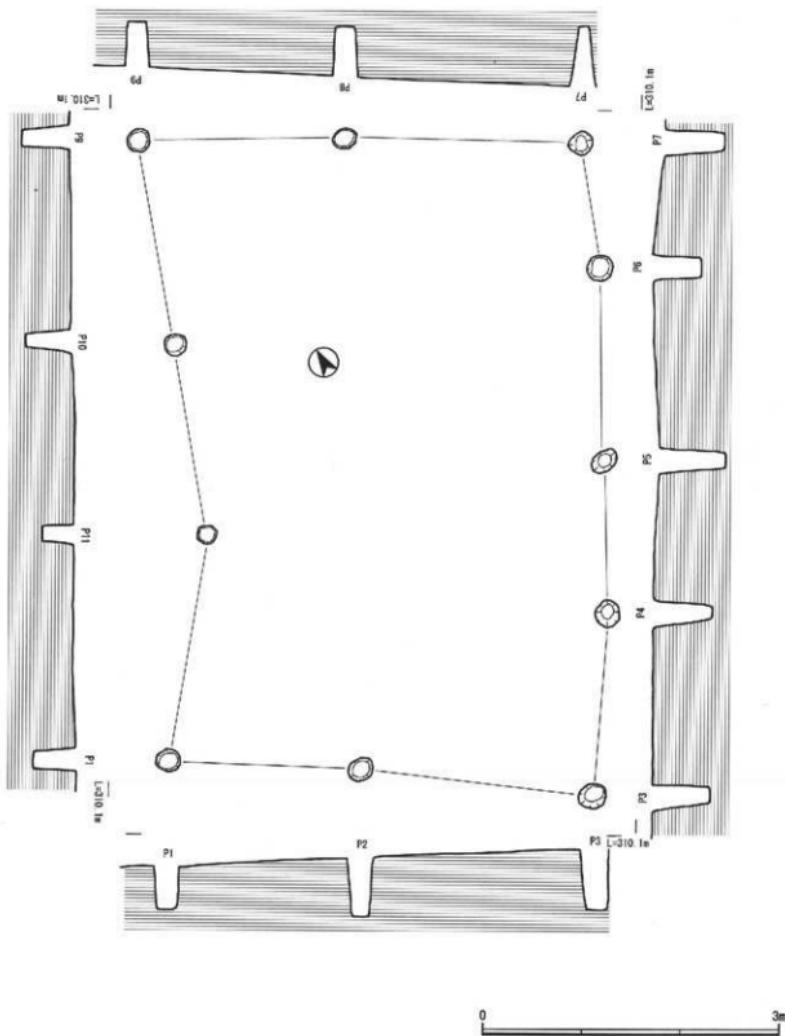
④ 4号掘立柱建物跡（第33図）

4棟中最大の床面積である(28.58m<sup>2</sup>)。E-15区、IVb層上面で検出し、主軸は北東、柱並びは概ね直線的である。ピット

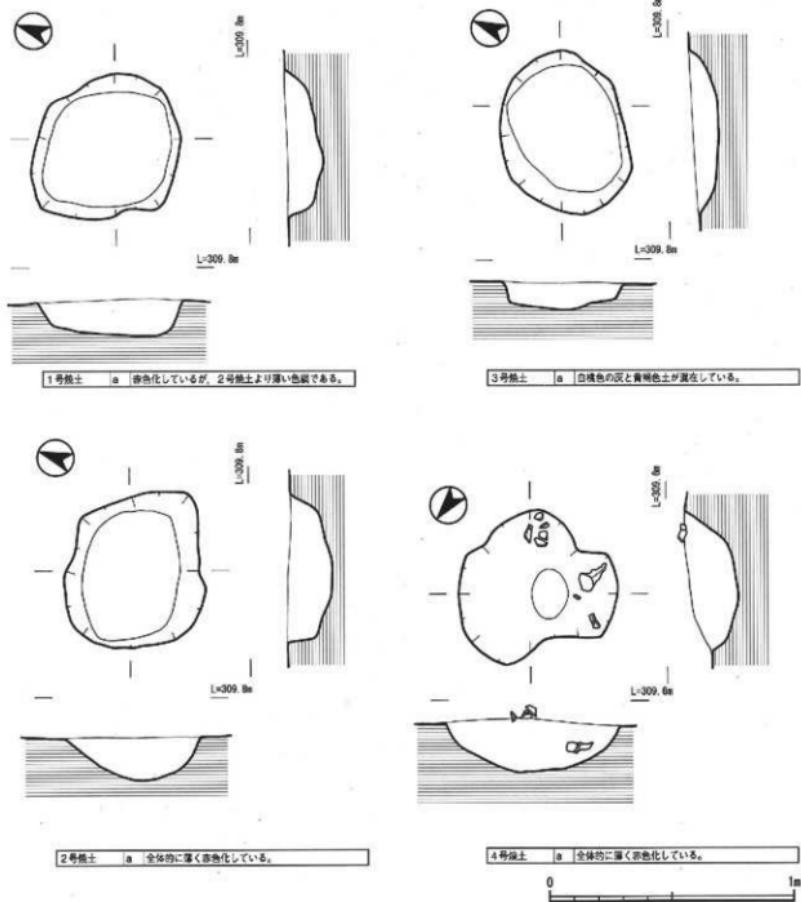
の平面形は橢円形もしくは円形、断面は矩形状で底面は平坦である。東側で3号掘立柱建物跡と切り合い接触する。ピットの平面形状は、橢円形と円形がほぼ同数で、内2基が3号掘立柱建物跡と共通する。なお、3号と4号建物のピットの構造上明確な差異は指摘できない。

2. 焼土（第34図）

E・F-13区で4基検出し、1号と2号掘立柱建物跡の中間に位置する。4号焼土は1号掘立柱建物跡に付随すると判断したが、他の3基はL字状に並び、長径が60cm前後の円形もしくは橢円形で、被熱深度20cmを超えるものは無い。



第33図 4号据立柱建物跡



第34図 1,2,3,4号焼土

#### ① 1号焼土

E-13区、IVa層上面で検出した。直径約60cmの円形状で被熱により土層が薄く赤化し、また赤化した軽石の小片も含んでいる。隣接して2号焼土を検出し、並列した可能性も想定できる。

#### ② 2号焼土

E-13区、IVa層上面で検出し、1号焼土と形状が類似する。全体的に薄く赤化し、上部には黒色化した炭化物を10個

程度含んでいた。

#### ③ 3号焼土

E-13区、IVa層上面で、1号焼土より約70cm東側で検出した。土層が被熱により薄く赤化し、同じく赤化した軽石の小片を含んでいる。

#### 3. 土坑（第35~37図）

Ⅲ層下面からIVa層上面で、10基検出した。検出エリアは調査区北端部と南部の2地点に分けられる。両地点とも緩や

第9表 据立柱建物跡観察表

1号据立柱建物跡(第3回)

2周	裏開柱間 (cm)	裏開間 (cm)	3周	外行柱間 (cm)	外行間 (cm)	主軸方位	Pit No.	深さ (cm)	直径 (cm)	幅員 (cm)	Pit 掘り方	土壌色調	床面積 (m <sup>2</sup> )	備 考
P8-P7	160	316	P8-P9	128	438		1	24	26	21	傾内	暗茶褐色土		
P7-P6	156		P9-P10	142			2	26	30	30	円	暗茶褐色土		
P1-P2	154	306	P10-P1	166			3	27	27	23	傾内	暗茶褐色土		
P2-P3	152		P3-P4	170			4	17	27	23	傾内	暗茶褐色土		
			P4-P5	156	476		5	15	25	24	方形	暗茶褐色土		
			P5-P6	146		N21° W	6	44	29	27	傾内	暗茶褐色土		
							7	17	25	24	方形	暗茶褐色土	15.04	東側に1号土坑が隣接する
							8	30	35	30	傾内	暗茶褐色土		
							9	27	31	25	傾内	暗茶褐色土		
							10	18	26	26	円	暗茶褐色土		
								24.5	28.2	25.3		暗茶褐色土		
	155.6	311		152.3	457	平均								

2号据立柱建物跡(第3回)

2周	裏開柱間 (cm)	裏開間 (cm)	3周	外行柱間 (cm)	外行間 (cm)	主軸方位	Pit No.	深さ (cm)	直径 (cm)	幅員 (cm)	Pit 掘り方	土壌色調	床面積 (m <sup>2</sup> )	備 考
P8-P7	110	236	P8-P9	135			1	53	23	23	円	暗茶褐色土		
P7-P6	126		P9-P10	95	306		2	61	22	17	傾内	暗茶褐色土		
P1-P2	108	258	P10-P1	106			3	32	37	23	傾内	暗茶褐色土		
P2-P3	150		P3-P4	106			4	39	25	21	傾内	暗茶褐色土		
			P4-P5	150	370	N57° E	5	51	26	21	傾内	暗茶褐色土		
			P5-P6	104			6	35	36	25	傾内	暗茶褐色土		
							7	50	29	23	傾内	暗茶褐色土	8.40	南側に4号土坑が隣接する
							8	45	26	17	傾内	暗茶褐色土		
							9	65	30	22	傾内	暗茶褐色土		
							10	51	21	20	円	暗茶褐色土		
	123.5	247		117.7	336	平均		48.2	26.3	20.8				

3号据立柱建物跡(第3回)

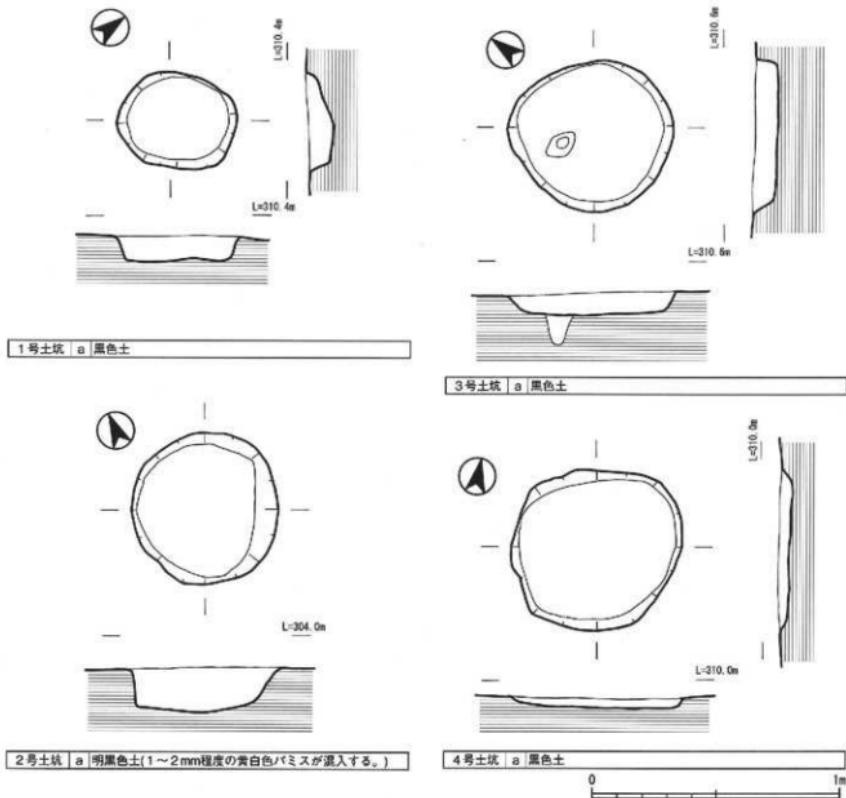
2周	裏開柱間 (cm)	裏開間 (cm)	2周	外行柱間 (cm)	外行間 (cm)	主軸方位	Pit No.	深さ (cm)	直径 (cm)	幅員 (cm)	Pit 掘り方	土壌色調	床面積 (m <sup>2</sup> )	備 考
P7-P6	199	384	P7-P8	260			1	60	44	23	傾内	暗茶褐色土		
P6-P5	185		P8-P1	173	433		2	45	24	22	円	暗茶褐色土		
P1-P2	182	380	P3-P4	173			3	42	24	21	傾内	暗茶褐色土		
P2-P3	198		P4-P5	248			4	45	28	22	傾内	暗茶褐色土		
						N79° E	5	62	26	25	傾内	暗茶褐色土		
							6	45	37	23	傾内	暗茶褐色土		
							7	48	26	20	傾内	暗茶褐色土	16.34	4号据立柱建物跡と切り合 い、ピット2基共通する
	191	382		213.5	427	平均		49.3	29.4	22.4				

4号据立柱建物跡(第3回)

2周	裏開柱間 (cm)	裏開間 (cm)	4周?	外行柱間 (cm)	外行間 (cm)	主軸方位	Pit No.	深さ (cm)	直径 (cm)	幅員 (cm)	Pit 掘り方	土壌色調	床面積 (m <sup>2</sup> )	備 考
P9-P8	210	450	P9-P10	213			1	43	26	23	円	暗茶褐色土		
P8-P7	240		P10-P11	198	646		2	59	29	24	傾内	暗茶褐色土		
P1-P2	195	434	P11-P1	235			3	58	30	26	傾内	暗茶褐色土		
P2-P3	239		P3-P4	184			4	49	28	25	傾内	暗茶褐色土		
			P4-P5	153			5	67	31	20	傾内	暗茶褐色土		
			P5-P6	197	712	N33° E	6	50	28	27	円	暗茶褐色土	28.56	3号据立柱建物跡と切り合 い、ピット2基共通する
			P6-P7	178			7	62	26	25	円	暗茶褐色土		
	221	442		194	679	平均	8	53	27	22	傾内	暗茶褐色土		
							9	47	26	23	円	暗茶褐色土		
							10	45	24	22	円	暗茶褐色土		
							11	32	21	20	円	暗茶褐色土		
								51.4	26.6	23.3				

第10表 焼土観察表

地図	遺構番号	検出位置	最大幅 (cm)	高さ (cm)	埋没度 (cm)	地成深度 (cm)	備 考
34	1号焼土	E-13'W/a	59	58	14		2号と繋いで近く、形状等も類似している。
	2号焼土	E-13'W/a	63	95	18		赤更しした小さな鉱石が併存する
	3号焼土	E-13'W/a	66	48	10		赤更しした小さな鉱石が併存する
	4号焼土	F-13'W/a	65	58	20	S B 1内側出、鉱石、土器片が併存する	
	手 烧		63.3	54.8	15.5		



第35図 1,2,3,4号土坑

かな傾斜地で、8基は南部にあり、掘立柱建物跡4棟の検出エリアに隣接している。埴土は主としてⅢ層黒色土で、色調等は図版に併載した。形状はⅠ基を除いて、平面が円形もしくは梢円形で、長径の平均が79.2cm、短径の平均が66.8cmである。掘り込みは浅く4~27cmで、平均では16.7cmとなる。

#### ①1号土坑

F-16区、Ⅳa層上面で検出し、平面形は梢円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。土坑中、最小径である。

#### ②2号土坑

B-3区、Ⅲ層で検出し、同層で検出した古道の硬化面掘削後に検出した。平面形は円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが掘り込み深度は浅い。調査区の最北端に位置する。

#### ③3号土坑

E・F-16区、Ⅳa層上面で検出し、平面形は円形で壁はほぼ垂直に立ち上がるが掘り込み深度は浅い。床はほぼ平坦に仕上げている。

#### ④4号土坑

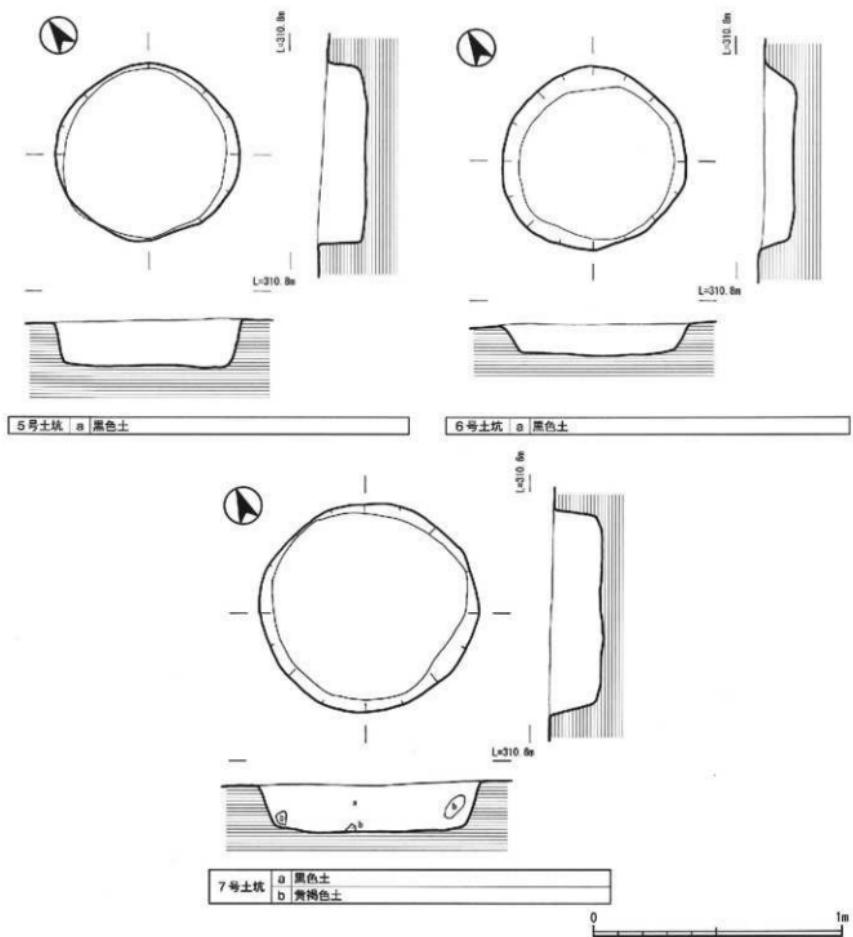
E-14区、Ⅳa層上面で検出した。平面形は梢円形で壁はほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み深度は全土坑中最も浅い。床面は平坦で、2号掘立柱建物跡の南側に隣接している。

#### ⑤5号土坑

F-17区、Ⅳa層上面で検出し、平面形は円形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

#### ⑥6号土坑

F-17区、Ⅳa層上面で検出し、平面形は円形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第36図 5,6,7号土坑

直に立ち上がる。4号土坑と似かよった構造である。

⑦7号土坑

F-16区、IVa層上面で検出し、平面形は円形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、Ⅲ層の黒色土を主体に一部IVa層がブロック状に混入している。

⑧8号土坑

C-3・4区、IVa層上面で検出した。平面形は楕円形で壁はほぼ垂直に立ち上がり、掘り込みは最大約30cmでIVb層ま

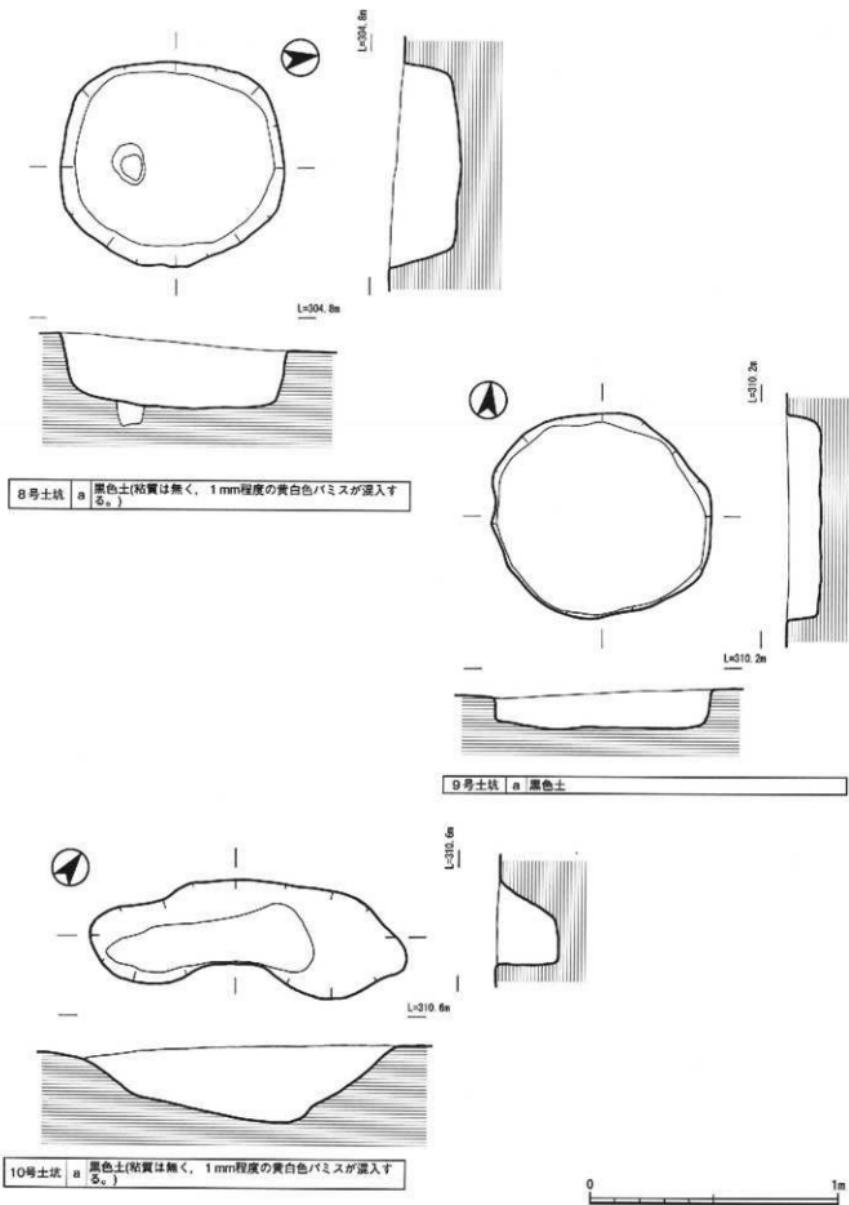
で達している。

⑨9号土坑

D-15区、IVa層上面で検出した。平面形はほぼ円形で、壁は垂直に立ち上がるが掘り込み深度は約12cmと浅く、床面は平坦である。

⑩10号土坑

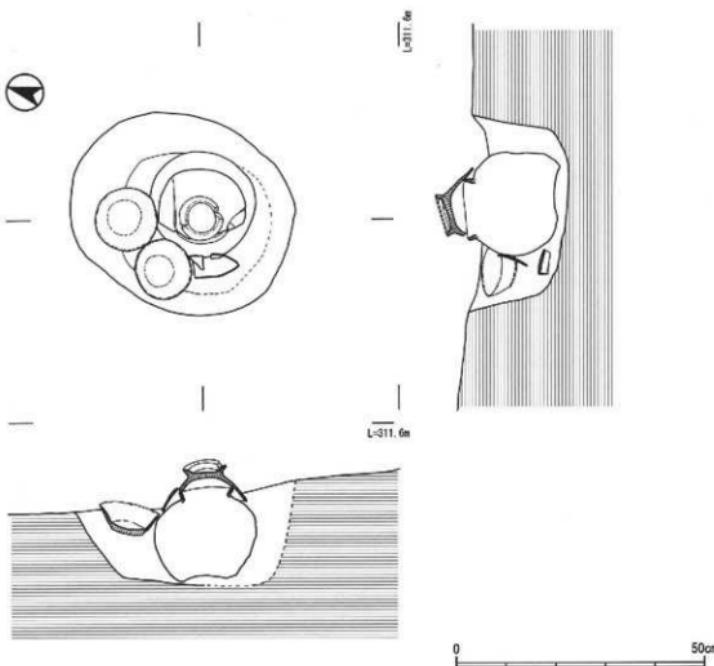
E・F-13区、IVa層で検出した。平面形は変則的な縦長の楕円形で、断面の長軸方向はレンズ状に掘り込みが見られ、



第37図 8,9,10号土坑

第11表 土坑観察表

井戸番号	遺構番号	検出区/層	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
35	1号土坑	F-16/IVa上	49	40	11
	2号土坑	B-3/Ⅲ	63	60	19
	3号土坑	E-F-16/IVa上	67	62	9
	4号土坑	E-F-14/IVa上	69	67	4
36	5号土坑	F-17/IVa上	75	73	18
	6号土坑	F-17/IVa上	76	75	12
	7号土坑	F-16/IVa上	89	85	20
37	8号土坑	C-3·4/IVa上	91	84	27
	9号土坑	D-15/IVa上	89	88	17
	10号土坑	E-F-13/IVa上	124	34	30
平均			79.2	66.8	16.7



第38図 須恵器埋納遺構

短軸方向は一部垂直に立ち上がる壁が見られる。

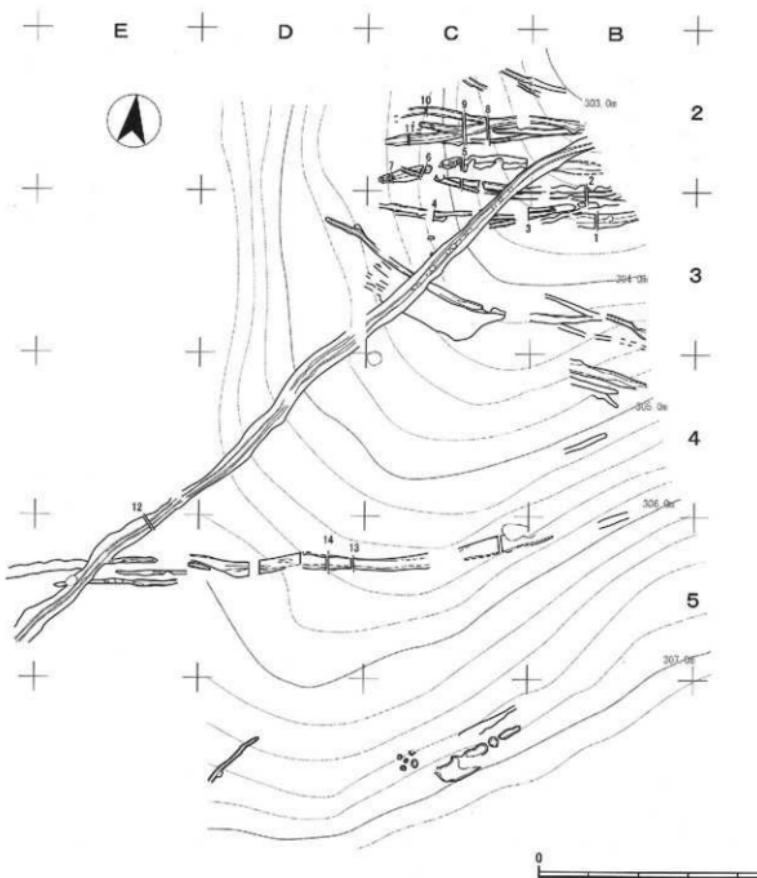
#### 4. 須恵器埋納遺構(第38図)

G-18区、北向きの傾斜地のIVa層中で検出し、深さ20cmの堅穴状の土坑に埋納されていた。土坑内には須恵器の壺が埋納され、土坑の底面には別個体の須恵器の小破片を伴っていた。壺の口はやや大型の土師器碗で蓋がされており、他に

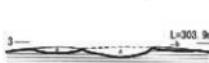
2点の土師器壺が共伴していた。須恵器壺内には覆土が流入し、骨片が認められていた。

#### 5. 古道跡(第39~42図)

調査区北側と南側で多数の古道跡を検出した。「古道跡」とは、硬化面を有し、筋状もしくは円形の凹面をある程度連続的に形成するものとした。また、硬化面は有しなくとも、



a 緑灰色硬質土。bより暗色でやや軟質。  
b 暗灰色硬質土。白色粒が少し混入し、鉄分集中による縦状の赤色化がわずかに見られる。



a 灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。  
b 灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化は見られないが、周辺土より硬化している。



a 灰茶褐色硬質土。底部に御池バミスを多く含む。  
b 灰茶褐色硬質土。御池バミスを多く含む。  
c 暗灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。  
d 灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。  
e 暗灰色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。他と比較してやや軟質。



a 灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。



第39図 古道路跡検出状況図(1)

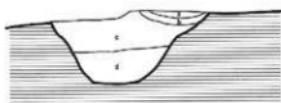
5—



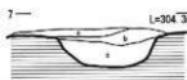
- a 明黄褐色硬質土。御池火山灰を主体とする硬化面で、御池1次バミスが混入する。  
 b 灰褐色硬質土。粒径1~2mm程の白色粒を多量に混入する。鉄分集中による赤色化が縦状に見られる。  
 c 灰茶褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。  
 d 鉄分集中による赤色化がわずかに見られるが、cより濃い。  
 e 明褐色硬質土。凹面中に御池火山灰がやや混じった状態。底部に鉄分集中による赤色化が見られる。

6—

L=304.3m



- a 黄褐色硬質土。御池火山灰を主体とする硬面。やや軟質。  
 b 灰褐色硬質土。白色粒を混入し、底部に鉄分集中による赤色化が見られる。  
 c 黄褐色硬質土。粒径1~2mm程の御池バミスを多く混入し、鉄分集中による赤色化が縦状に見られる。  
 d 球状褐色硬質土。粒径1mm程の白色粒を多く混入する。鉄分集中による赤色化が縦状に見られ、非常に硬化している。



- a 灰褐色硬質土。非常に硬質で鉄分集中による赤色化が縦状に見られる。  
 b 灰褐色硬質土。非常に硬質で鉄分集中による赤色化が縦状に見られる。下部に御池バミスと砂粒を多く含む。  
 c 球状褐色硬質土。粒径2mm程の白色粒を多く含む硬質土。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。

8—

L=303.9m



- a 明茶褐色硬質土。御池火山灰2次と目層土が混じたような土で、白色粒がわずかに混入する。鉄分集中による赤色化が縦状に見られる。  
 b 球状褐色硬質土。白色粒が少量混入する。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。  
 c 陸灰褐色硬質土。粒径2mm程の黄白色バミスを若干混入する。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。



- a 黒色土。Ⅲ層土の浸入土。  
 b 灰褐色硬質土。非常に硬質で砂粒を含む。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。

9—

L=303.9m



- a 暗黄褐色硬質土。御池火山灰2次を主体とし、Ⅲ層土と混じりあった土。鉄分集中による赤色化が見られる。  
 b 白色粒が混入する。鉄分集中による赤色化が見られる。  
 c 球状褐色土。御池火山灰2次の浸入土。  
 d 灰褐色土。

11—

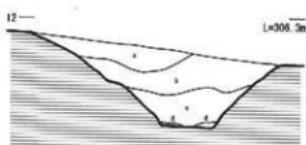
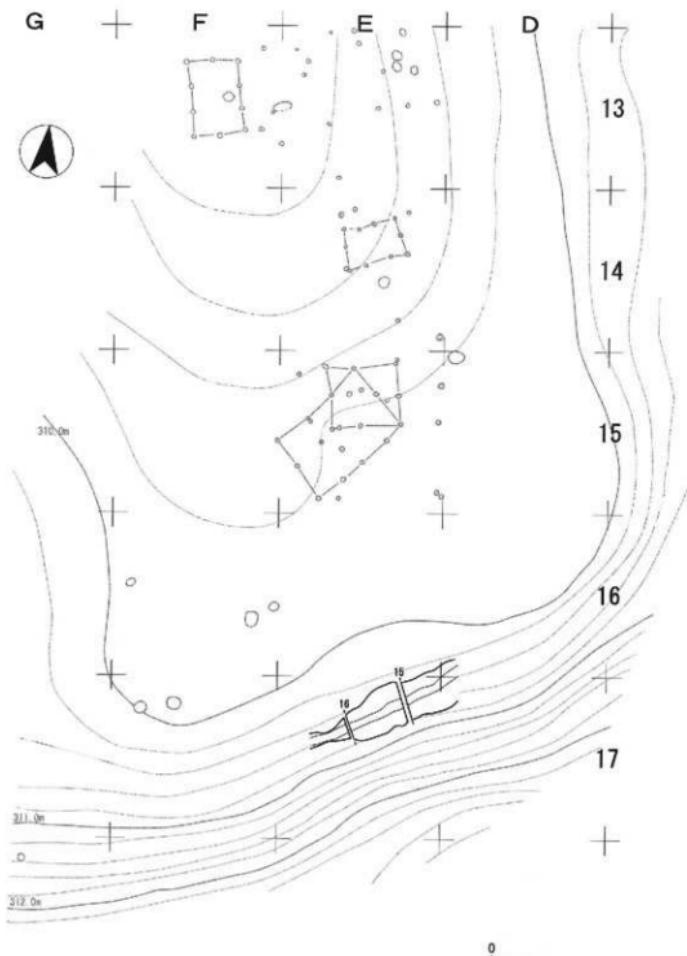
L=304.2m



- a 黒色土。Ⅲ層土の浸入土。  
 b 灰褐色硬質土。Cと比較しやや軟質であるが硬化している。粒径1mm程の御池バミスがかなり混入している。  
 c 球状褐色硬質土。粒径2mm程の白色粒がわずかに混入する。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。



第40図 古道跡検出状況図(2)

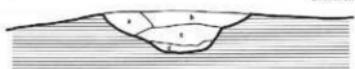


- a 黒褐色土。やや軟質で粘性はあまりない。粒径1mm程の黄白色バニスが混入。
- b 黒褐色土。aよりも黒味が強いが、黄白色バニスの混入は少ない。
- c 明褐色土。軟質で砂質が多い。粒径1~5mmの黄白色バニスが多く混入している。
- d 灰褐色土。粘性はほとんどなく、粒径1mm程の白色粒を含む。上部が赤褐色化し、非常に硬化している。



第41図 古道跡検出状況図(3)

L=905.8m



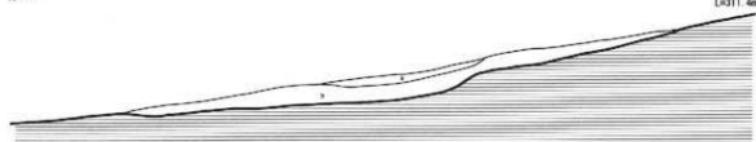
- a 茶褐色土。粘質はなく粒径1mm程の黄白色バミスが少し混入する。
- b 茶褐色土。aと類似した土色であるが、粒径1mmの黄白色バミスがかなり混入し、非常に硬化している。一部に赤色化も見られる。
- c 離灰褐色土。粘質はなく、粒径1~3mm程の黄白色バミスを混入し、鉄分集中による筋状の赤色化が見られる。
- d 離灰褐色土。Ⅲ~Ⅳ層の遷移層の土色で、一部に赤色化が見られ、粒径2mm程の黄白色バミスを混入する。硬化は弱い。

L=905.8m



- a 離灰褐色土。粘質はほとんどなく、粒径1mm程の黄白色バミスを混入し、硬化している。
- b 離灰褐色土。粘質はほとんどなく、粒径1mm程の黄白色バミスを混入し、鉄分集中による筋状の赤色化が見られる。非常に硬化している。

L=311.4m



- a 黄白色軽石。文明ボラ。
- b 黒色土。Ⅲ層の流入土。

L=311.4m



- a 黄白色軽石。文明ボラ。
- b 黒色土。Ⅲ層の流入土。
- c 黄褐色土。Ⅳ層の流入土。



第42図 古道跡検出状況図(4)

周辺土壤と異なる色調、質感等を有し、筋状に形成されたものも古道路とした。

発掘調査時には既に削平された部分もあるが、Ⅲ層～Ⅳ層より古道跡を検出しておる、いずれもⅡ層の文明ボラ(1471年頃の桜島噴出物)下位であり、遺構の周辺や埋土中から土器片が出土していることから、概ね古代～中世の時期の遺構と考えられる。

調査区北側の2～3区付近で検出した古道跡は、いずれも複雑に切り合ったり重なり合ったりして東西方向に形成され、埋土観察からはⅣ層(御池火山灰)に比定されるバミスと鉄分集中による茶褐色を呈した筋目模様の葉理(ラミナ)が多數入る。それらを北東～南西方向に斜めに切る古道跡は直線で40m強を割り、一部の底部に円形凹面(波板状凹凸面)を形成する。

調査区南側の17区付近でも、北東～南西方向に延びる古道跡1条を検出した。山頂に向かって傾斜がきつくなる斜面で等高線に沿うように形成され、その先に存在する齒骨器埋納遺構との関連性が想定できる。

### 第3節 古代の遺物

IVa層を主体に出土している。確認できる遺物は、土師器（壺、碗、鉢、壺）、須恵器（壺、皿、蓋、壺、蓋）、赤彩・黒色土器（壺、碗、皿、鉢）、墨書き・刻書き土器、焼塙窓、紡錘車、鐵製品である。

#### 1. 土師器壺・碗(第44図)

平底を壺、高台壺を碗とする。

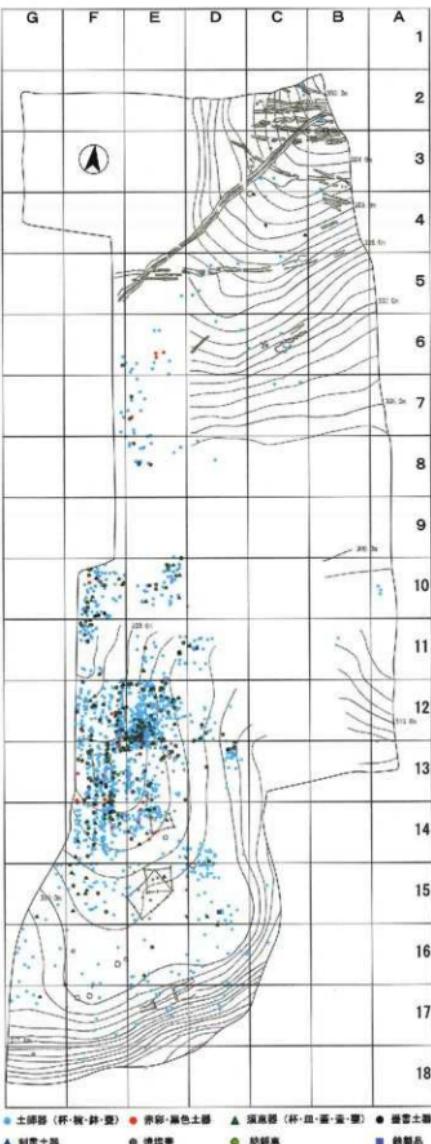
1~29は土師器壺である。底部は突出のない平底でいわゆる充実高台はみられない。わずかに底部の突出するものはあるが少數である(24, 25)。器高は4cm前後が多く5cm前後の深手のものは認められない。以上から形態差の比較的少ない状況が指摘できる。

口径は10~14cmの中に集約されるが、11~12cmが多い。色調は浅黄橙色と橙色がみられ、大部分が浅黄橙色である。形態は箱形を呈するものと体部傾斜の強いもののが認められるが、法量、製作技法で差異がみられないことから時期的な差はないものと考える。

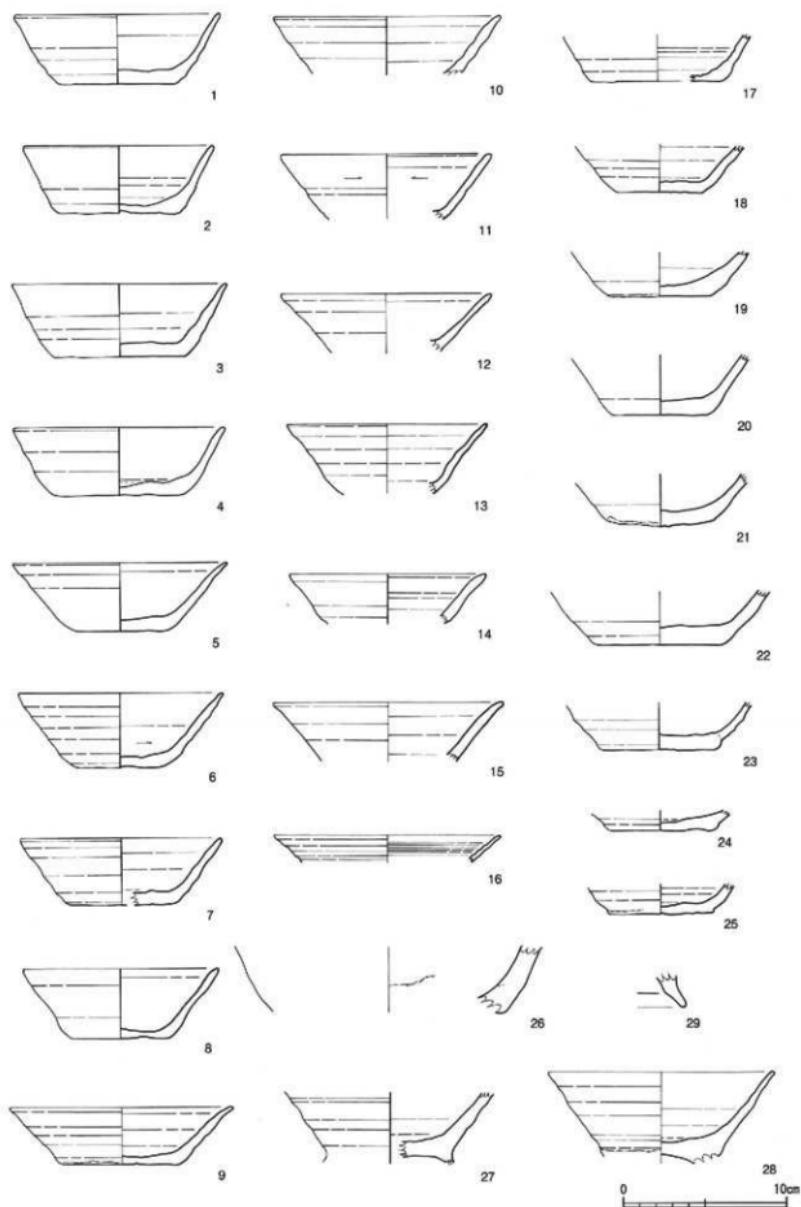
1~4は箱形を呈し、体部外面下端の未調整はみられない。1は橙色を呈し砂礫を多く含み、見込みには静止状態でのナデ、底部外面にはヘラ切りが消し切れず残される。2は内外面は丁寧なナデ。底部の断面は焼成不良により還元色を呈す。4はやや厚手で、底部外面に板状の圧痕があり、見込みには強い指ナデがみられる。5は脆弱な器面である。6は橙色を呈し、体部の外面で右方向への砂粒の動きが観察され、凹凸のナデは均等に口縁部まで施される。7は体部外面の一部が剥離するが、丁寧なナデを施し、体部外面から底部は部分的に黒化している。8は橙色を呈し、器表面に砂粒の抜けた孔がみられる。底部外面には右回りのヘラ切り痕が観察される。9は体部の傾斜が強く、体部内外面に凹凸のあるナデを施す。

10~16は体部から口縁部である。11は砂粒を多く含み、外面は右方向、内面は左方向に砂粒の動きが観察される。12の器壁は薄く、硬質である。13は砂粒を多く含み、器面は精緻である。16は器壁が薄く、体部内外面に凹凸のあるナデがみられる。

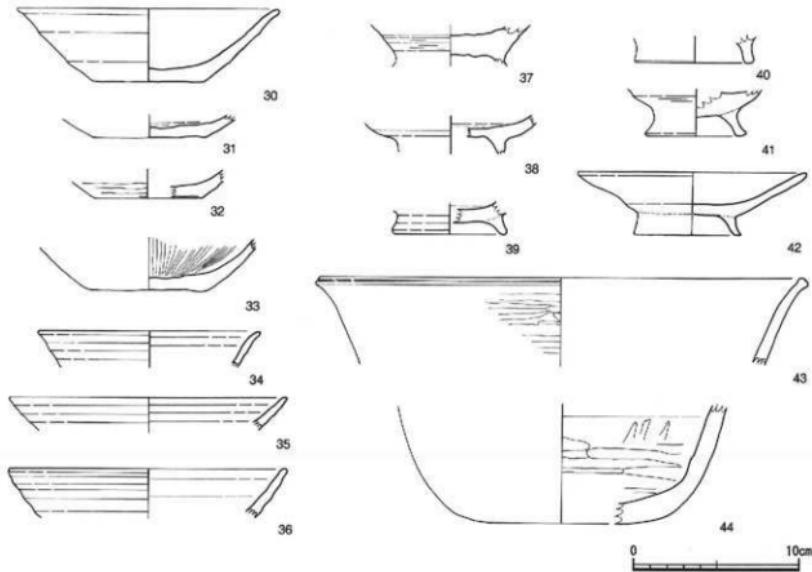
17~25は底部で、17~23は平底、24, 25が突出気味の底部である。18, 23は体部の一部に炭化物が付着しているが、断面にも認められることから廃棄後の付着と判断する。18, 19は体部外面下端に未調整部分がみられる。21は硬質で、体部外面下端に未調整部分が残り、ヘラ切り時の粘土がみ出される。22は大型で、底部外面は丁寧なナデでヘラ切り痕を完全に消し、見込みには静止状態でのナデを密に施す。23は体部外面下端から丁寧なナデがみられ、底部と体部の接合線は断面で観察でき、内面の底部と体部の境には強いナデを認める。24は体部外面下端に沈積状の強いナデがみられ、見込みの中央は強い指押さえによりその部分の器壁は薄い。25は橙色で、全体的に丁寧なナデによってヘラ切り痕は消され、胎土に白色の細沙を多く含む。



第43図 古代遺物出土状況図(S=1/800)



第44図 土師器坏・塊



第45図 赤彩・黒色土器

26は残存状態から器種の断定はできないが、大型鉢の可能性が高い。色調は浅黄褐色を呈し、内面にはハケ状の痕跡がみられ、器面が一部黒化しているが、接合ラインで分かれるため破損後の付着と判断する。

27～29は椀で、27、28は高台を欠損する。27は外面にナデによる強い凹凸が、見込みには不整方向のナデが密にみられ、体部外面下端には高台の接合線が観察される。27は白色味の浅黄褐色を呈する。29は高台で、内面に変化点がある。

### 2. 赤彩・黒色土器(第45図)

赤彩土器は圓化した2点(30、31)で、黒色土器は全て内黒である。器種は平底と高台付があり、他に鉢が2点確認できる。

30は赤彩土器で、口径が15.8cmと大きく、全面にミガキがあり、体部立ち上がりが若干曲線的である。31も赤彩土器で、剥離が著しいが全面に赤色を呈し、底部外面にまでミガキが認められる。

32、33は平底である。32は外面に横方向のミガキを施し、体部と底部の境界部分が高台状に若干突出し、底部外面を含め全面にミガキが施されている。33は内面に放射状のミガキを施し、外側は底部外面にまでミガキが認められ、底部外面は部分的に黒化している。

34～36は口縁部で、34の口縁部は外反する。35、36は同じ厚さで端部に至り、外面にナアやケズリを認める。

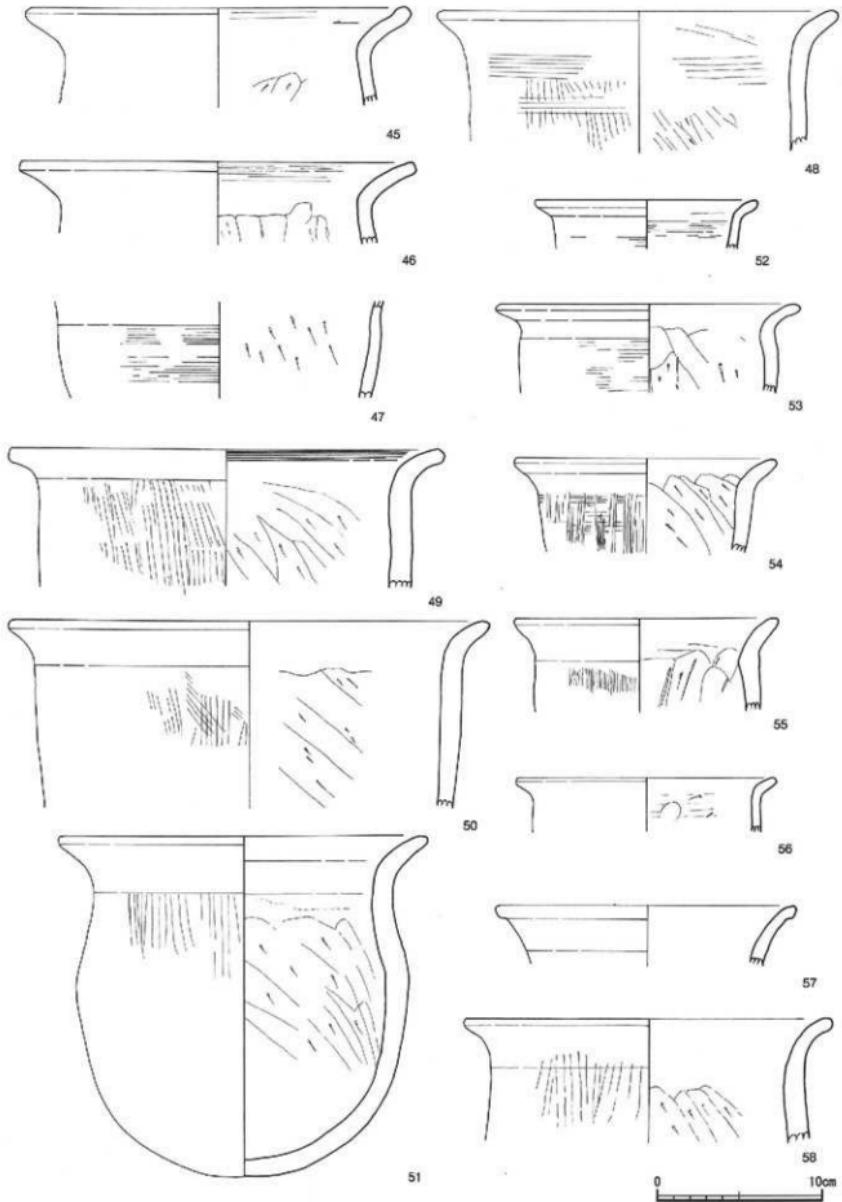
37～41は椀で、37、38は口縁部を欠損する。37は外面にケズリがみられる。38は橙色を呈し硬質で、内面は剥離のため判然としないが外面には丁寧なナデが施されている。39は外反する高台で端部を丸く納める。40、41は端部を平坦にし、41は外面にケズリを認める。42は高台付皿で、高台底部に回転ナデがみられる。

43の外面は横方向にミガキが主体で、口縁端部は平坦で若干肥厚し外反気味である。44は鉢の底部から体部で、底部から丸味をなし体部に至る。外面は剥離のため調整が判然としないがミガキは確認され、内面は横方向のミガキを施し、黒化処理しているが色調はやや薄く黄灰色を呈する。

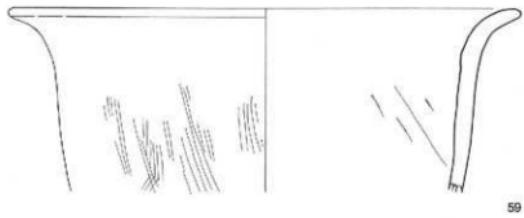
### 3. 土師器甕(第46～49図)

出土遺物の中で最も出土量が多い。本遺跡の土師器甕の特徴、傾向は、①調整技法として外面が縦ハケで浅黄褐色から褐色の色調を呈するものと、②外面がナデ調整のみで褐色を呈するものに大別される。また、全体的に器盤が厚く、口縁部の短いものが一般的である。高台遺跡で多くみられた砂粒を多く含み横ハケを胴部外面に施すタイプは少量である(47)。また、鉢は確認できない。法量は20cmを境に大型と小型の2種に分類され、小型は外面にハケを施すものが多い。

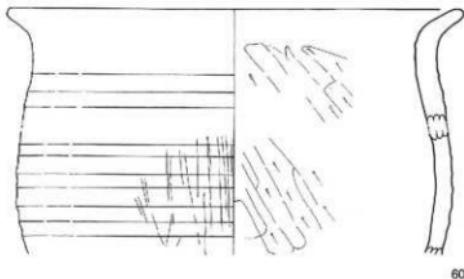
45、46は口縁部の長いタイプに区分できる。45は口縁部外面に2段のナデを認め、くびれ部が内外面共に黒化している。46の口縁端部は面をなし、胴部外面の器面は粗く、口縁部内面にハケがみられる。47は砂粒を多く含み、胴部外面に



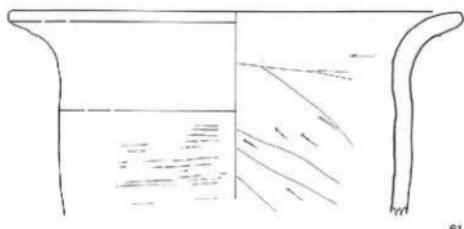
第46図 土器器表(1)



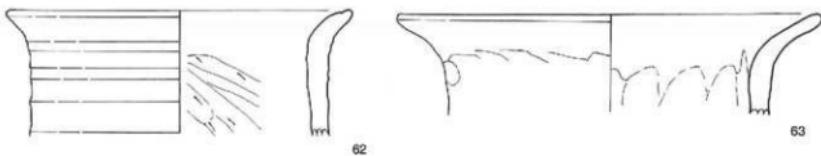
59



60

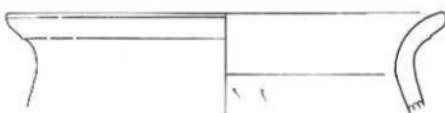


61



62

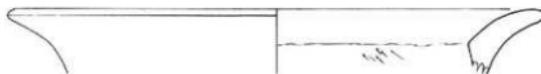
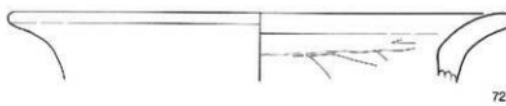
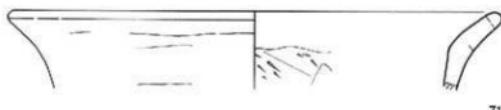
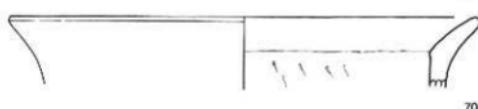
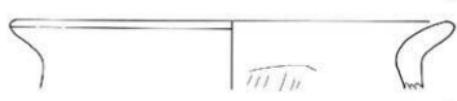
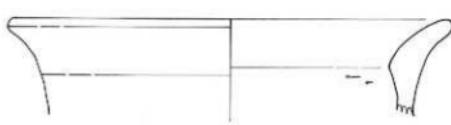
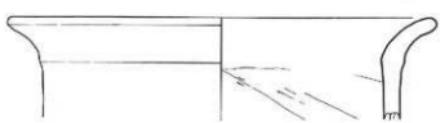
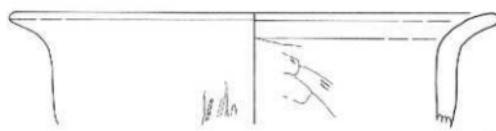
63



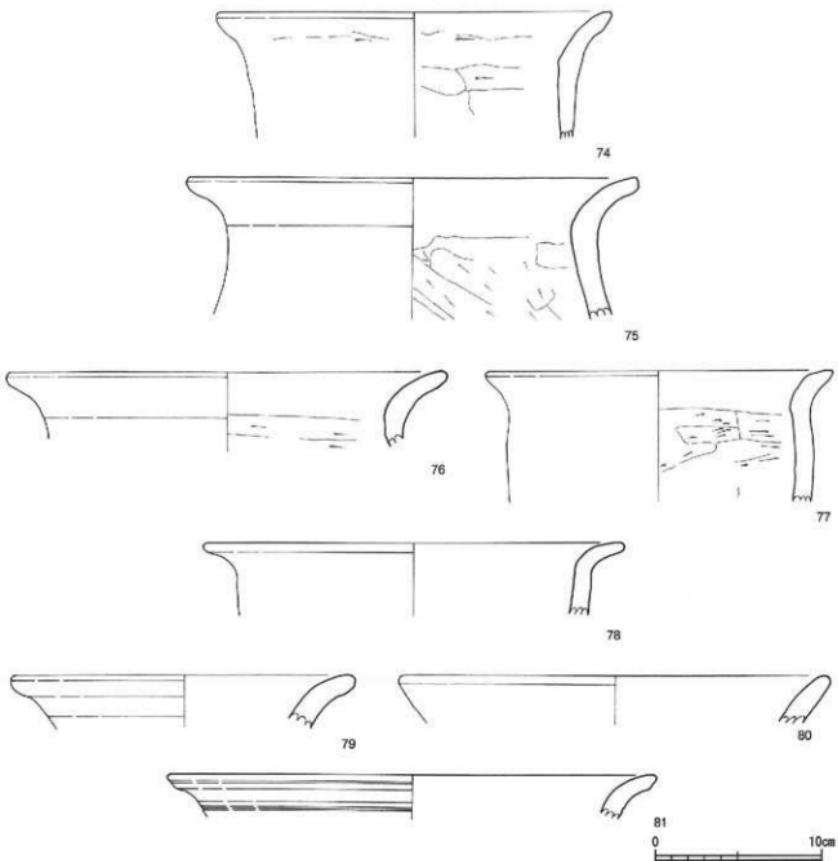
64



第47図 土器器(2)



第48図 土器器型(3)



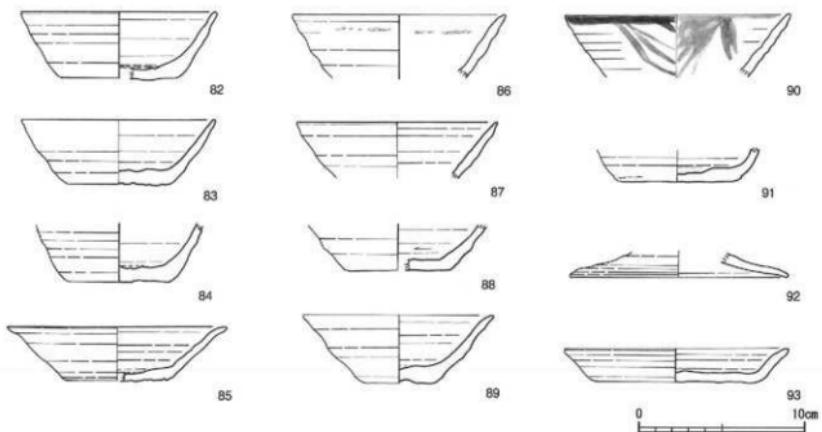
第49図 土師器變(4)

は回転台を用いた横ハケが観察できる。48~51, 54, 55, 58は胴部外面に縦ハケを主体とする。48は縦ハケ後に部分的に回転の横ハケを認め、ハケ間は3~4mmと幅広い。49は外面に煮炊きによると思われる黒化がみられ、ハケ間は幅広い。50は浅黄褐色を呈し、胴部外面には不整方向にハケが施され、胴部中位から下位には煤の付着がみられる。復元観察からは、長めの口線部と若干蘿らみ気味の胴部に特徴があり、胴着大綱部分から下位には煤が付着し、外面のハケ調整は胴部上位までみられる。焼成はやや不十分と判断する。58は外面に焼成時と思われる黒化がみられ、器壁は胴部から口線部に向い細くなる。内面のケズリは比較的低い部分にみられる。

52~57は小型の壺である。

52は胎土に赤色粒を多く含み、器面の剥離は著しく、胴部内面に横ハケを認める。54は胴部外面に回転の横ハケを施した後、部分的に縦ハケを施している。56の胎土は砂粒を多く含み、胴部内面に横ハケが観察される。57は胴部から口線部にかけ縦やかに外反し、口線部外面は玉縁状を呈している。

59は浅黄褐色を呈し、外面は縦ハケで、胴部下端付近がわずかに黒化し、煮炊きによる痕跡と推測される。60は外面に凹凸の強い横ナデを施した後、部分的に縦ハケを施す。61は胴部中位から下位まで横ハケを施し、その後ナデにより部分的に消される。特に、口線部内面ではナデによって砂塵が左方向に移動していることを観察できる。



第50図 須恵器環・皿・蓋

62以降は、ナデ調整が主体で、62の外面の凹凸は強いナデにより、内面のケズリは幅狭く深く施している。63は板ナデによる工具痕が胴部外面の上端にみられ、角閃石を多く含む胎土を用いている。64は内面のケズリ上端を水平に描えているが、稜を形成するには至らない。67は胴部上端付近まで横ナデを施し、下位は縦ナデで、内面ケズリの上端はほぼ水平に描え、器面は若干光沢をもち堅質である。68は内面ケズリの上端を描え、明瞭な後線を形成し、胎土に角閃石を多く含む。69は胴部に強い屈曲と短い口縁部を形成し、器壁は口縁部に向かい細くなる。70、71は内面ケズリの上端を描え、明らかな後線を形成し、外面のナデは沈線状を呈し粗い。73は外面に白色粉が付着している。

74~77は内面ケズリの上端を水平に削り、上端を水平に仕上げ、線織は強く屈曲するものと後継のみられないものがある。74は外面の胴部から口縁部への屈曲部に接合線がナデきれずに残り、断面でも観察される。75は胴部上端まで横ナデ、下位は不整の縦ナデがみられる。内面ケズリは上端を水平に削るものと斜め方向の削りもあるが、上端は水平に描えている。77の胴部は若干膨らみ、下位までナデが確認できる。78は胴部内面のケズリは残存部では認められない。81は口縁端部に斜め方向の面を持ち、須恵器甕との関わりが想起される。

#### 4. 須恵器環・皿・蓋(第50図)

須恵器食器具は全て平底である。標準的な須恵器の色調のもの、酸化焰焼成のもの、火拂が外面にみられるもの等様々なタイプが認められる。器種は甕が大多数を占め(82~91)、皿(93)、蓋(92)が1点ずつみられる。

甕は形態的に土師器甕と大差なく、口径10~14cm、器高は4cm前後である。89は器高5cm前後の深手に属すが、少

数である。

82~84は灰色の色調を中心とする標準的な須恵器の色調で、3点とも体部外面下端から丁寧なナデが施される。82は見込みのナデが右回りに観察され、83は底部外面の調整が不十分でヘラ切り痕が明瞭に残り、84は見込みに渦巻き状のナデを右回りに認める。

85~91は酸化焰焼成を主体とする。85は内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄褐色で色調が異なる。見込みの中央は強く押えて凹み、底部外面はヘラ切り痕を一部残し、見込みの一部分に炭化物の付着を認める。86は体部外面に強いナデを施し、体部内外面の一部が還元している。87は灰黄色を呈す。88は底部外面から体部にかけて丁寧にナデを施し、ヘラ切り痕やヘラ切りによる粘土のはみ出しは完全にナデ消されている。89は底部外面のナデは不十分で、見込みは静止状態でナデを施し、体部外面下端にはわずかに未調整部分を認める。90は火拂で、器面は硬質である。91は軟質で、体部外面下端はヘラ切り時の粘土のはみ出しを認める。

92の体部内面は不整方向にナデが施され脚部の可能性もあるが、蓋と判断した。外面は丁寧な回転ナデが施される。93は底部から体部にかけて丸味をもって立ちあがり、その後、外反する。胎土は白色粒を多く含み粗く、底部外面には右回りのヘラ切り痕が観察される。

#### 5. 須恵器皿・蓋(第51~52図)

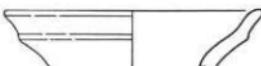
土師器甕に比べると出土量は著しく減少し、小破片のため全体の形態の復元は困難である。

94~97は須恵器甕である。

口縁部の94~96は二重口縁を呈し、94は器面が釉により光沢を持つ。96は酸化焰焼成により土師質で、口縁端部は斜め方向に面を持つ。95は口縁端部に幅の広い斜め方向の面を持つ。



94



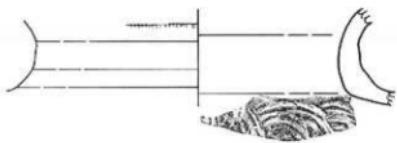
96



95



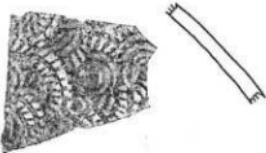
97



98



99



100



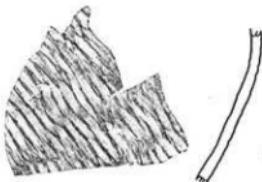
101



102



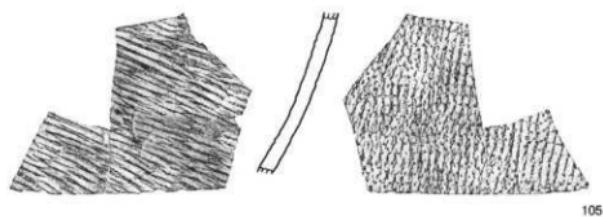
103



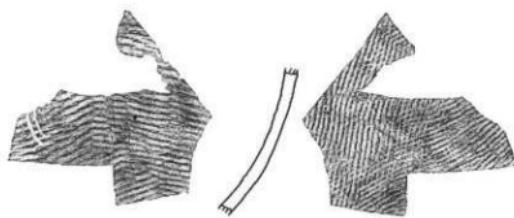
104



第51図 須恵器壺・甌



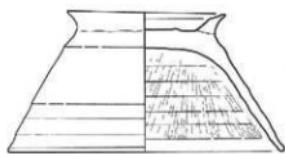
105



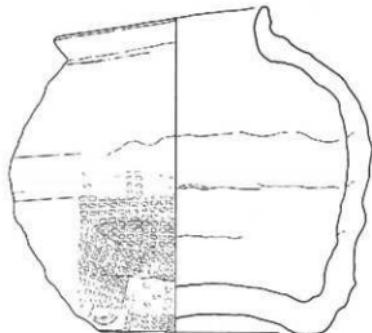
106



第52図 須恵器甕



107



108



109



110



第53図 火葬墓間違遺物

ち、口縁端部は強いナデにより大きく渦曲している。97は底部で、底部外面に黄緑色の釉がみられ、内面の胴部と底部の境は強くナデられる。

98~104は須恵器甕である。

98は口縁端部を欠損し、胴部から口縁部にかけて傾斜変換点が外面に2ヶ所みられる。外面は釉の付着によって光沢を保ち、内面の当具痕は右から左に認められる。100, 101の外面は格子タキ。内面の当具痕が特徴的で、同心円の四柱目に放射状の痕跡が残される。同様の当具は、蹄場遺跡でも確認された。102, 103は胴部中位で、外面調整は102が格子タキ、103が平行タキを施す。104~106は胴部下半で、104は外面のタキを不整方向に施す。105は硬質で外面にはぶい赤褐色を呈している。

#### 6. 火葬墓岡進遺物(第53図)

##### ○ 蔵骨器

口縁部が短く直立する短頸壺(薬壺型)の系譜をもつ。全体的にいびつな形態で成形・調整も粗く、器面には凹凸が目立つ。調整は胴部外面下位に格子タキ。胴部最大幅から上位は回転ナデが施され、ナデによって一部格子タキが削されている。格子タキは上から下、右から左にかけて施され下端にいたる。回転ナデは右上がりであるが、口縁部や肩部の最大幅も右上がりになっており、回転ナデを施した後の胴部外面下端の押圧によって斜め方向になったものと思われる。内面は当具やタキの痕跡は認められず凹凸が頗著で粘土粒がナデ消されずに残っている。底部は平底で若干上底であ

る。焼成は金属音を発する程硬質で、明赤褐色を呈する。外面の1/3に釉薬が付着している。

##### ○ 壺(土師器壺)

やや大型の壺である。外面と内面の一部は剥落がつよい。内面は放射状にミガキがみられる。高台は壺部がナデられ、面を呈する。墨書きは確認できなかった。

##### ○ 供獻土器(土師器壺)

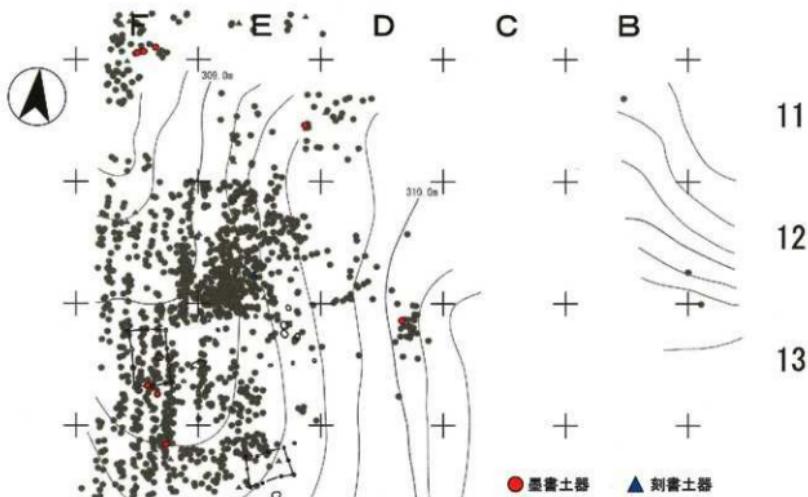
2点は形態や調整技法で類似している。109は体部外面に凹みのつよいナデがみられ、体部下端から上に1cmにかけては回転ナデのみられない部分が目立ち、外見は突出気味の底部を呈する。底部外面もナデが不十分で、ざらついた感じである。110も体部外面下端に回転ナデのみられない部分が目立ち、底部外面も粗い。色調は両者ともに浅黄橙色を呈する。なお、墨書きは確認できなかった。

##### ○ 須恵器壺片

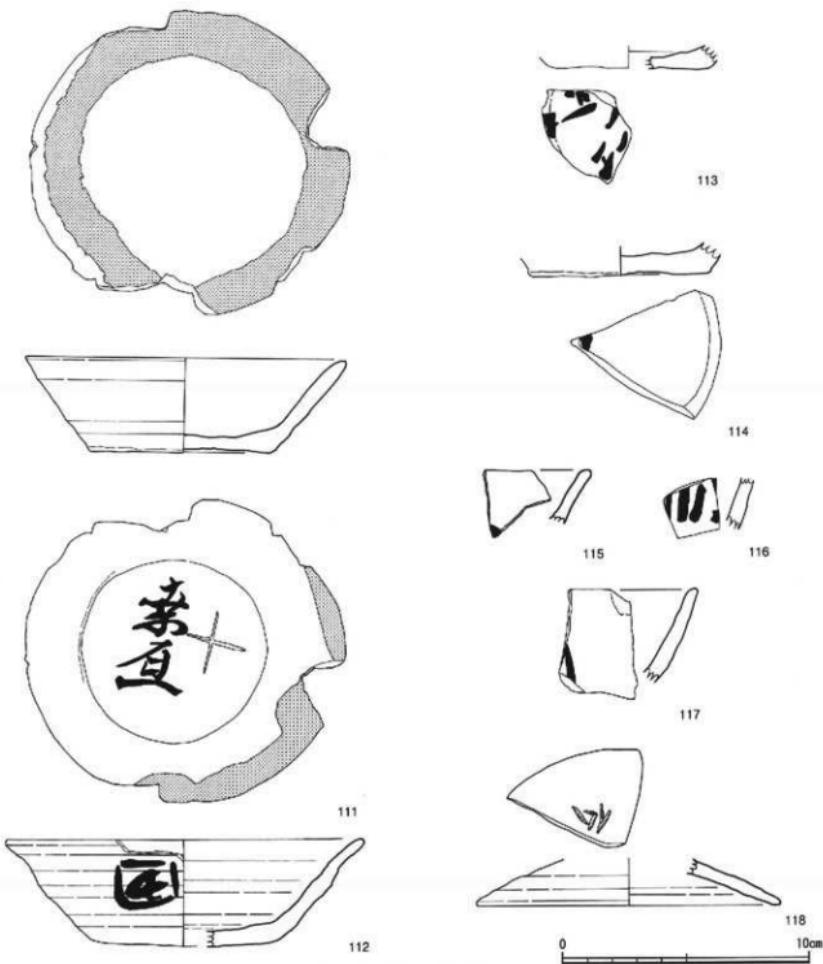
最大で1片2.5cm、最小で0.5cm程の須恵器片が16片出土している。大多数に外面に平行タキ。内面にナデがみられ、3点が接合した。接合しなかった資料も含めてすべて同一個体である可能性が高い。調整技法からは本来壺であった可能性が推測される。なお、この遺物は包含層の須恵器片とは接合しなかった。ただ、類似しているものはいくつかみられ、G-17区で3点、E-14区とF-15区からそれぞれ1点ずつ出土している。

#### 7. 墨書き・刻書き土器(第55図)

墨書き土器7点、刻書き土器1点の8点が出土し、器種は全て



第54図 墨書き・刻書き土器出土状況図 (S=1/400)



第55図 墨書・刻書土器

土師器坏である。

○「桑原」

111の底部外面に「桑原」の墨書が確認できる。「原」は姶良町小瀬戸遺跡や伊集院町西原遺跡で知られるが、「小」を「一」で表現するのは本遺跡のみで、書き慣れた筆跡とも推測される。なお、墨書の右隣に「十」字状の線刻もみられる。

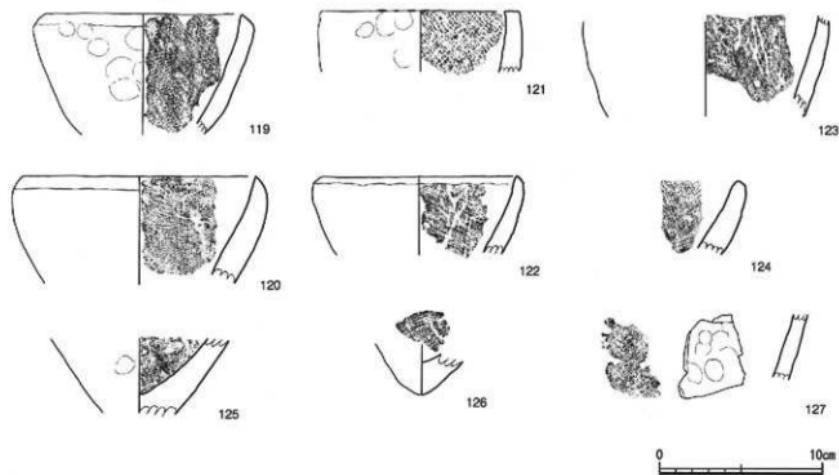
○「田」?

112の体部外面に逆位に書かれ、文字や器形では九義岡遺

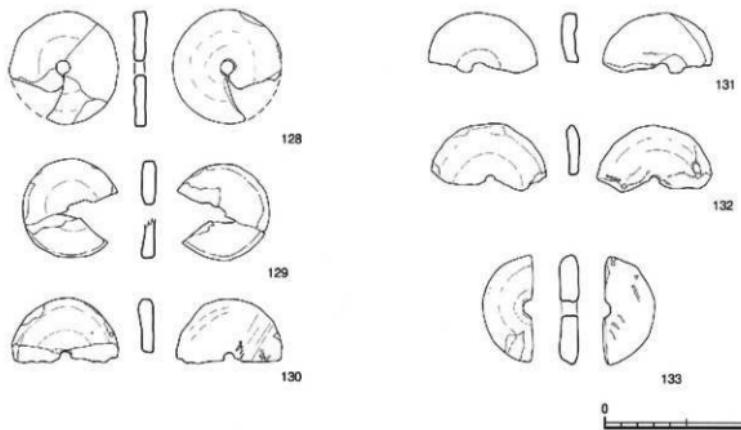
跡に類似品が知られる。「田」字墨書土器は県内では九義岡遺跡と串木野市椿城跡で発見され、姶良町小倉畠遺跡から「田人」、武ABC遺跡からは「八田」が報告されている。

○「仏」

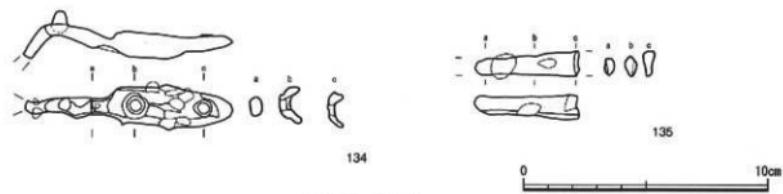
118の須恵器蓋の天井部に逆位で刻書されている。刻書による粘土の盛り上がりは確認できないが、刻み面は断面の色調と異なり器面と共通することから焼成前の刻書と判断される。なお、刻み面の「V」字状の断面はどの面も片面が滑らか



第56図 燒塙壺



第57図 紡錘車



第58図 鐵製品

で片面が荒れていることから、ある程度の乾燥が進んだ後に刻画をしたと推測される。

#### その他

113, 114は底部外面に墨書きがみられ、その他は胴部外面にみられるが、判読はできていない。

#### 8. 焼壙壺(第56図)

復元口径は12~15cmが想定され、外面は指押さえ、内面に布痕が確認できる。

119は外面が部分的に銀化し、釉の付着も認められる。120は器壁が厚く、口縁端から丸味をもって体部に至り、端部に面は認められない。121は口縁端部に明確な面を認め、口縁端部内面は若干内側に延びる。122は脆弱で摩耗が目立ち、口縁端部に面は形成しない。123も摩耗が著しく、布痕は僅かに残される。124は硬質で砂粒が多く含み、口縁端部は面をなす。125は底部付近で、端部は欠損する。126は底部先端で、内面に布痕を認める。

#### 9. 紡錐壺(第57図)

土師器壺からの販用で片面は中央が窪み、片面は水平もしくはへら切り痕が観察される。以下では前者を表面、後者を裏面と呼ぶ。

128は周縁部を丁寧に整形し、全面に細線状の網状痕を認めるが、へら切りやナテの痕跡をかろうじて残す。129は赤色粒を多く含み、へら切り痕は完全に消している。130は表面が大きく凹み、裏面は一部銀化している。132, 133は周縁部の整形が不揃いで、特に132は体部の打ち欠き面を明瞭に

残している。

#### 10. 鉄製品(第58図)

本遺跡から2点の鉄製品が出土した。134の形状は、「くの字」に屈曲しており、屈曲した部分から張り出した部分は棒状になって、棒状になっている部分から欠損している。また、後部にいくほど梢円形状になり最後部にいくほどすばまつていく形状を成している。この資料はその形状から、何かの「引き手金具」として使用されたのではないかと考える。残存部分は最大長が84mm、最大幅が18mm、最大厚は5mmであり、穿孔径は、それぞれ4~5mmである。鋸が至る所に付着しており、腐食がやや激しいが、使用時の形状を残していると思われる。棒状のものと接続する金具とみられ、釘による接続が考えられる2か所の穴があり、後部内側の形状は、内側に湾曲している。後部は、もう一枚の鉄を伸ばしてたたいて接合している接合法(鍛接)がみられ、所々黒ずんだ炭状のものは、接合する際に使用した木炭ではないかと考えられる。135の形状は上部は直線的で上下両端とも細くなっているため刀子と判断した。先端部分は欠損し、詳細は不明である。鉄錆が付着し、やや腐食は激しいものの使用時の原型を留めていると思われる。この資料はその形状から、刀子の刃部の一端ではないかと思われる。

第12表 土師器壺・焼窯観察表

種類番号	種類番号	取上番号 (出土地名・層)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	調整				備考	
									(底面へら切り)	内面	外側	見込み ナデ	未調査	
44	1	2678(E-14/Va) 2659(E-14/Va) -(-/-)	12.6	4.3	7.0	砂粒多い	-	7.SYR7/6 (青)	残存	ナデ	不明	○	X	-
	2	1002(E-12/Va) 1019(E-12/Va)	11.6	4.2	7.6	褐色	-	10YR8/6 (黄赤)	ナデではば消滅	ナデ	X	X	-	
	3	100(E-6/V) 54(E-7/V)	13.2	4.5	8.0	赤色(砂粒 の抜けた 孔あり)	-	7.SYR8/6 (淡黄赤)	ナデではば消滅	不明	不明	X	-	
4	350(E-13/Va) 484(E-12/Va) 797(E-12/Va) 2668(E-14/Va)	13.0	4.2	7.8	褐色	-	2.5YR8/4 (赤褐)	ナデではば消滅 有り	ナデ、終止ナデ 有り	ナデ	○	X	板状の压痕 あり	
	5	2788(E-14/Va) 2789(E-14/Va)	13.2	4.2	5.6	褐色	-	7.SYR8/6 (淡黄赤)	左斜り	不明	不明	○	X	-
5	2399(E-17/Va) 2515(E-16/Va)	12.6	4.6	5.2	赤色(砂 粒の抜け た孔あり)	-	SYR7/6 (青)	残存	ナデ	ナデ	○	○	-	
	7	913(E-13/Va)	12.4	4.2	6.6	褐色	-	2.5Y7/3 (淡)	残存	ナデ	ナデ	X	-	
8	3183(E-14/Va) 3184(E-14/Va)	12.0	4.3	6.0	褐色(砂粒 の抜けた 孔あり)	-	SYR7/6 (青)	右側に残る、右 斜り	ナデ	ナデ	不明	X	-	
	9	24(E-8/M上)	13.6	3.5	7.0	褐色	-	7.SYR8/6 (淡黄赤)	ナデではば消滅	ナデ	ナデ	○	X	-
10	2212(F-14/Va)	14.0	(3.6)	-	褐色	良好	-	7.SYR7/6 (青)	-	ナデ	ナデ	-	-	-
	11	181(E-6/V)	12.8	(4.0)	-	砂粒多い	-	10YR7/4 (C-J-1-青赤)	-	ナデ、右斜り	ナデ	不明	不明	-
12	3446(F-15/Va) 3486(F-15/Va) -(-/-)	12.8	(3.6)	-	褐色	-	SYR7/6 (青)	-	ナデ	ナデ	不明	X	-	
	13	885(E-12/Va)	12.5	(4.3)	-	褐色	良好	10YR6/4 (C-J-1-青赤)	-	ミガキ	ナデ	-	-	-
14	2167(F-13/Va)	12.0	(3.0)	-	褐色	良好	7.SYR7/6 (青)	-	ナデ	ナデ	-	-	-	

第13表 赤彩・黒色土器観察表

件番 番号	報告番号	東北番号 (出土区/層)	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	調査				備考
									底部ヘラ切り	内面	外側	裏込み ナデ	
44	15	3680(G-17/Va)	14.0	(3.6)	-	輪底	良好	7.5YR7/6 (暗)	-	ナデ	ナデ	-	-
16	1011(B-12/Va)	13.8	(1.7)	-	輪底	良好	10YR8/4 (浅黄)	-	ナデ	ナデ	-	-	
17	1402(F-16/Va)	(11.4)	(2.6)	8.0	輪底	-	10YR8/4 (浅黄)	ナデで消滅	ナデ	ナデ	×	×	
18	3691(E-12/Va) 741(E-13/Va上) 1263(E-13/Va)	(10.2)	(2.7)	5.4	輪底	-	7.5YR7/6 (暗)	残存	ナデ	不明	×	-	
19	3380(F-17/Va) 3393(F-17/Va)	(10.8)	(2.7)	6.4	輪底	-	7.5YR7/6 (暗)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	不明	×	
20	2798(D-14/Va)	(10.8)	(3.7)	5.8	輪底	-	10YR8/4 (浅黄)	ナデで消滅	ナデ	ナデ	不明	×	
21	-	(10.4)	(3.2)	6.6	輪底	-	10YR7/6 (浅黄)	残存	ナデ	ナデ、未調査	不明	×	
22	2631(D-15/Va)	(13.2)	(3.2)	7.6	輪底	-	7.5YR7/6 (暗)	ナデで消滅	ナデ	ナデ	○	×	
23	273(F-13/Va)	(11.4)	(2.7)	7.0	輪底	-	10YR8/4 (浅黄)	ナデではぼ消滅	不明	ナデ	不明	×	
24	2118(F-4/Va)	(8.4)	(1.8)	6.4	輪底	-	10YR7/6 (浅黄)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	×	○	
25	3880(F-10/Va)	(8.6)	(1.7)	6.4	輪底	-	5YR7/6 (暗)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	×	-	
26	900(E-12/Va) 954(E-12/Va)	(18.6)	(4.0)	-	輪底	-	10YR8/3 (浅黄)	ナデ、錫含量有り	ナデ	ナデ	不明	×	
27	1471(B-12/Va) 1472(B-12/Va)	(12.7)	(4.3)	(7.9)	輪底	良好	10YR8/4 (浅黄)	-	不明	ナデ	-	-	
28	9622(F-16/Va) 3662(G-17/Va)	14.0	(5.6)	(7.0)	輪底	-	7.5YR8/6 (浅黄)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	○	×	
29	3787(F-10/Va)	-	(1.8)	-	輪底	-	10YR8/4 (浅黄)	-	-	-	不明	不明	
45	30	357(F-12/Va) 2057(F-13/Va) 2028(F-14/Va) 2143(F-13/Va) 2206(F-14/Va) 2305(F-13/Va) -	15.8	4.5	6.6	輪底	-	7.5YR7/6 (暗)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
31	1264(E-4/Va)	(10.4)	(1.4)	7.0	輪底	-	2.5YR6/6 (暗)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	ミガキ	×	
32	2674(G-14/Va) 2675(G-14/Va) 2686(G-14/Va) 2709(G-14/Va) 2722(G-14/Va) -	(9.0)	(1.7)	6.6	輪底	良好	7.5YR8/6 (浅黄)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	ミガキ	-	
33	289(F-13/Va) 591(F-12/Va上) 690(E-12/Va) 717(E-13/Va) 1258(E-13/Va) 1775(F-12/Va) 2118(F-14/Va) 2748(F-14/Va)	(13.4)	(3.2)	7.4	輪底	不良	7.5YR8/8 (黄)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	-	-	
34	3881(F-10/Va)	13.4	(2.2)	-	輪底	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	-	ミガキ	ナデ	-	-	
35	-	(7.0)	(2.0)	-	輪底	良好	10YR7/4 (にじみ暗)	-	ミガキ	ナデ	-	-	
36	2172(F-13/Va)	16.8	(3.0)	-	輪底	良好	2.5Y7/4 (暗)	-	ミガキ	ナデ	-	-	
37	2267(F-13/Va)	-	(2.8)	(6.8)	輪底	良好	7.5YR6/4 (にじみ暗)	-	ミガキ	タグリ、中心部まで鉛粒ナデ有り	-	-	
38	3886(F-10/Va)	-	(2.3)	(6.4)	輪底	良好	5YR6/6 (暗)	-	ミガキ	ナデ	-	-	
39	1700(F-12/Va)	-	(1.9)	7.0	輪底	良好	7.5YR7/4 (にじみ暗)	-	ミガキ	ナデ	-	-	
40	530(E-12/Va)	-	(1.7)	7.2	輪底	-	7.5YR7/6 (暗)	不明	ミガキ	ナデ	不明	不明	
41	2272(F-13/Ⅲ) 2273(F-13/Ⅲ)	-	(2.8)	6.2	輪底	不良	10YR8/3 (浅黄)	-	ミガキ	ケズリ	-	-	
42	ピット内(E-15/Va)	14.0	4.0	6.5	良好	輪底	10YR7/4 (にじみ黄)	高台底面鉛粒ナデ有り	ミガキ	ナデ	-	-	
43	6(E-6/V) 8(E-6/V)	29.0	(5.5)	-	輪底	良好	7.5YR7/6 (暗)	-	ミガキ	ミガキ	-	-	
44	9(E-6/V) 386(C-7/V)	(20.0)	(7.4)	9.0	輪底	不良	7.5YR6/6 (暗)	不明	ミガキ	ミガキ	-	-	

第14表 土師器発見調査表(1)

地図番号	報告番号 (出土年/層)	口径 (cm)	高さ (cm)	器厚 (cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
45	2770(D-14/Va) 3161(D-14/Va)	23.4	(6.1)	0.8~0.9	砂粒を含む 粘土	不良	7.5YR6/6 (暗)	ケズリ	ナデ	-
45	3842(F-10/Va)	23.8	(5.1)	0.6~1.2	砂粒含む	良好	10YR7/4 (にぶい黄緑)	ハケ後ナテ	ハケ、ケズリ	-
47	3741(F-11/II) 3746(E-11/Va) 3756(E-11/Va) 3765(E-11/Va)	(20.0)	(5.8)	0.7~0.8	砂粒、石英含む	良好	7.5YR7/6 (暗)	ケズリ	横ハケ	-
48	696(E-12/Va) 1838(E-12/Va) 1841(E-12/Va) 1844(E-12/Va) 3625(F-14/Va)	24.0	(8.0)	0.9~1.1	砂粒	良好	SYR6/8 (暗)	ケズリ	横ハケ、緩ハケ	-
49	369(F-12/Va) 408(F-12/Va) 686(E-12/Va) 933(E-12/Va) (1739)F-12/Va)	26.0	(8.5)	0.8~1.5	砂粒を含む	良好	10YR7/4 (にぶい黄緑)	ケズリ	緩ハケ	-
50	1102(D-11/Va) - (-)	28.4	(11.5)	0.9~1.3	砂粒	良好	10YR8/4 (浅黄緑)	ケズリ	緩ハケ	-
51	360(F-12/Va) 399(F-12/Va) 520(F-12/Va) 568(F-12/Va) 627(E-12/Va上) 647(E-12/Va上) 667(E-12/Va上) 757(E-12/Va) 699(E-12/Va) 717(E-12/Va上) 756(E-13/Va上) 759(F-13/Va) 817(F-12/Va) 910(E-12/Va) 917(E-12/Va) 1103(D-1/Va) 1111(D-1/Va) 1132(F-12/Va) 1145(D-12/Va) 1361(E-12/Va) 3432(F-15/Va) 3439(F-15/Va)	22.0	21.0	0.8~1.4	砂粒を含む	不良	10YR8/4 (浅黄緑)	ケズリ	緩ハケ	-
52	987(E-12/Va) 1321(E-13/Va) 2096(E-14/Va)	13.0	(3.0)	0.6	砂粒、褐色を含む 赤色粒を多く含む	良好	5YR6/4 (にぶい黄)	横ハケ	横ハケ	-
53	38(E-7/Va)	18.0	(5.5)	0.6~1.0	赤色粒を含む	不良	10YR7/6 (明黄緑)	ケズリ	横ハケ	-
54	641(E-6/Va上)	15.6	(5.8)	0.8~1.2	砂粒を含む	良好	5YR6/6 (暗)	ケズリ	横ハケ、緩ハケ	-
55	99(D-6/Va上)	15.6	(5.6)	0.7~1.3	砂粒、褐色を含む	良好	5YR6/6 (暗)	ケズリ	緩ハケ	-
56	1180(D-13/Va)	16.0	(3.2)	0.4~0.5	砂粒含む	良好、黒斑	10YR7/4 (にぶい黄緑)	横ハケ	摩滅	-
57	2255(F-13/Va)	17.8	(3.7)	0.6~0.8	砂粒	良好	10YR6/6 (黄)	ナデ	ナデ	-
58	3671(E-12/Va) 3529(F-12/Va) 2038(F-14/Va)	22.4	(7.5)	0.8~1.3	砂粒含む	良好	10YR4/1 (暗)	ケズリ	緩ハケ	-
47	1891(F-5/Va) 1816(F-12/Va) 1889(F-11/Va) - (-)	30.4	(11.2)	0.9~1.2	砂粒	良好	10YR8/4 (浅黄緑)	ケズリ	緩ハケ	-
90	5276(D-12/Va上) 1163(D-13/Va) 1184(D-13/Va) - (-)	27.2	(15.2)	0.7~1.4	砂粒を含む	良好	7.5YR7/6 (暗)	ケズリ、緩ハケ	ナデ、緩ハケ	-
61	364(F-12/Va) 412(F-12/Va) 500(F-12/Va) 895(E-12/Va) 882(F-12/Va) 1220(E-13/Va) 1322(E-13/Va) 1362(E-13/Va) 2720(E-14/Va) 2906(D-14/Va)	27.6	(11.5)	0.9~1.3	砂粒、褐色を含む	良好	7.5YR6/6 (暗)	ケズリ、口縁部 内面ナテ	横ハケ	-
62	558(E-12/Va) 2791(D-14/Va)	21.0	(7.7)	1.1~1.5	砂粒含む	不良	7.5YR7/6 (暗)	ケズリ	ナデ	-
63	1098(E-12/Va) 1006(E-12/Va) 0320(E-12/Va)	25.4	(6.3)	0.9~1.4	砂粒、石英、角 閃石含む	良好、堅隣	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ケズリ	ナデ	-
64	499(F-12/Va) 433(F-12/Va) 538(E-12/Va上) 720(E-13/Va上) 927(E-12/Va) 1636(F-13/Va) - (-)	26.6	(6.3)	0.8~1.3	砂粒、石英、角 閃石含む	良好	7.5YR7/6 (暗)	ケズリ	-	-

第15表 土師器発掘調査表(2)

検査番号	報告番号	取扱番号	(出土区/層)	口径(cm)	高さ(cm)	板厚(cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
48	65	2228(F-14/Va)		29.2	(6.9)	0.8~1.3	砂粒、角閃石含む G	良好	SYR6/6 (暗)	ケズリ	ケズリ	-
		3505(F-14/Va)	-盛(-)									
66		2096(F-14/Va)		22.6	(5.0)	0.7~1.2	砂粒、石英含む	良好	SYR6/6 (暗)	ケズリ	ナデ	-
		2204(F-14/Va)										
		2330(F-14/Va)	-盛(-)									
67		3126(E-13/Va)		25.6	(6.9)	0.9~1.4	砂粒を含む	良好	SYR5/8 (明赤褐色)	ケズリ後ミガキ	ナデ	-
		3127(E-13/Va)										
		3195(E-13/Va)										
		3296(E-13/Va)										
		3385(E-13/Va)										
		743(E-13/Va上)										
		1318(E-13/Va下)										
		1345(E-13/Va)										
		2568(E-13/Va)										
		2684(E-14/Va)										
		2695(E-14/Va)										
		2709(E-14/Va)										
		2711(E-14/Va)										
		-盛(-)										
68		612(E-12/Va上)		27.0	(5.9)	0.9~1.9	砂粒、角閃石含む G	良好	SYR6/6 (暗)	ケズリ	ナデ	-
		659(E-12/Va)										
		11060(D-12/Va)										
69		179(E-8/V)		27.0	(4.1)	0.9~1.6	赤色粒を含む	良好	7.5YR6/6 (暗)	ケズリ	ナデ	-
70		777(E-12/Va)		28.4	(4.2)	0.8~1.5	砂粒含む	不良	7.5YR6/4 (にじい褐色)	ケズリ	ナデ	-
		781(E-12/Va)										
		1275(E-12/Va)										
71		1574(F-3/Va)		29.4	(4.8)	0.9~1.3	砂粒、石英含む	良好	SYR7/6 (暗)	ケズリ	ナデ	-
		1584(F-3/Va)										
		2215(F-4/Va)										
72		1158(D-13/Va)		30.0	(4.2)	1.0~1.8	砂粒、石英、角 閃石含む	良好	SYR6/6 (暗)	ケズリ、ハケ	ハケ後ナデ	-
73		1004(E-12/Va)		31.8	(4.0)	0.8~1.8	砂粒、石英、角 閃石含む	良好	7.5YR6/6 (暗)	ケズリ	ナデ	-
		2303(E-13/Va)										
49	74	2812(D-15/Va)		24.0	(7.7)	0.8~1.4	砂粒、石英含む	良好	7.5YR6/6 (暗)	ケズリ	ハケ後ナデ	-
		2826(D-15/Va)										
75		3365(E-13/Va)		27.0	(6.9)	1.0~1.8	砂粒を含む	良好	10YR5/4 (にじい褐色)	ケズリ後ミガキ	ナデ	-
		347(E-13/Va)										
		400(F-12/Va)										
		742(E-13/Va上)										
		1270(E-13/Va)										
		1387(F-13/Va)										
		2888(E-14/Va)										
		2700(E-14/Va)										
		2702(E-14/Va)										
		2860(D-14/Va)										
		2864(D-14/Va)										
		2813(D-15/Va)										
		2815(D-15/Va)										
		-盛(-)										
76		567(F-12/Va上)		25.4	(4.6)	1.0~1.5	砂粒、石英含む	不良・堅硬	SYR6/6 (暗)	ケズリ後ミガキ	ミガキ	-
		666(E-12/Va)										
		1783(F-12/Va)										
		-盛(-)										
77		3879(K-10/Va)		21.0	(8.1)	0.8~1.3	砂粒、石英含む	良好	SYR5/5 (明赤褐色)	ケズリ	ナデ	-
78		812(E-12/Va)		25.0	(4.5)	0.7~1.1	砂粒を含む	不良	SYR5/4 (にじい赤褐色)	ナデ	ハケ	-
		913(E-12/Va)										
		1300(E-13/Va)										
		3192(E-14/Va)										
79		3775(F-10/Va)		20.8	(3.2)	1.2~1.4	砂粒、石英含む	良好	7.5YR6/6 (暗)	ナデ	ナデ	-
		3794(F-10/Va)										
		3861(F-10/Va)										
		3862(F-10/Va)										
80		2210(F-14/Va)		25.8	(3.0)	0.7~1.4	砂粒、石英、角 閃石含む	良好	7.5YR6/4 (にじい暗)	ナデ	摩擦	-
		2721(F-14/Va)										
		2735(F-14/Va)										
		2736(F-14/Va)										
81		668(E-12/Va)		29.4	(2.7)	0.9~1.2	砂粒、赤色粒を 含む	良好	7.5YR7/6 (浅黄褐色)	ナデ	横ハケ	-
		1778(F-12/Va)										

第16表 須恵器壺・皿・蓋観察表

標図 番号	報告 番号	取上番号 (出土区/層)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	調整				備考
									底部ヘラ切り	内面	外面	里込み ナデ	
50	82	301(E-13/Na) 342(E-13/Na) 2692(E-14/Na)	11.6	4.1	7.2	粘土	良好	10Y5/1 (灰)	残存	生上りのナデ	ナデ	-	-
83		1907(E-10/Na) 1925(E-10/Na) 1935(E-10/Na) 1963(E-10/Na) 3779(F-11/Na) -1(B-1)	11.6	4.1	6.0	粘土	-	N7/ (灰白)	底盤外縁のナデ 不十分ヘラ切り 底盤存	ナデ	○	-	
84		439(F-12/Na)	(10.0)	(3.5)	6.6	粘土	良好	10Y5/1 (灰)	-	ナデ	ナデ	X	-
85		2645(E-15/Na) 2665(E-14/Na) 2770(E-14/Na)	13.2	3.3	6.0	粘土	-	10YR7/3(に い黄赤)	ナデ無し	ナデ	ナデ	X	内面 SYR7/4 (にい黄)
86		975(E-12/Na) 2068(F-13/Na) 2135(F-14/Na)	12.8	(4.0)	(8.0)	粘土	良好	SY6-2 (灰オリーブ)	-	ナデ	ナデ	-	-
87		3541(F-14/Na)	12.0	(3.5)	(7.4)	粘土	良好	2.5Y7/2 (灰黄)	-	ナデ	ナデ	-	-
88		857(E-12/Na)	(10.6)	(2.6)	6.4	粘土	-	2.5Y7/3 (灰黄)	-	丁寧なナデ	底盤外縁から体 部にかけて丁寧 なナデ	-	-
89		2092(F-14/Na) 2223(F-14/Na) 2676(E-14/Na) -1(B-1)	11.6	4.2	4.8	粘土	不良	2.5Y7/2 (灰黄)	-	ナデ	ナデ	○	-
90		1663(F-13/Na)	13.6	(4.0)	(8.4)	粘土	良好	SY5/2 (灰オリーブ)	-	ナデ	ナデ	-	火照あり
91		2241(F-13/Na)	(9.6)	(2.0)	6.6	粘土	-	10YR8/2 (灰白)	-	ナデ	ナデ	○	-
92		790(E-12/Na)	13.4	(1.6)	-	粘土	良好	7SY5/1 (灰)	-	ナデ	回転ナデ	-	-
93		580(F-12/Na) 621(E-12/Na上) 2101(F-14/Na) -1(B-1)	13.4	2.0	10.0	石英、砂 粒	-	7SYR7/1 (灰白)	残存	ナデ	ナデ	○	-

第17表 須恵器壺・蓋観察表

標図 番号	報告 番号	取上番号 (出土区/層)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)		調整(外)	備考
									調整(内)	調整(外)		
51	94	1660(F-13/Na)	17.4	(3.5)	(12.0)	粘土	不良	2.5Y5/2 (黄灰)	摩滅	ナデ	-	-
95	-	(B-1/N)	-	(4.0)	-	粘土	良好	SY4/2 (灰オリーブ)	ナデ	ナデ	-	-
96	-	(B-1/N)	15.4	(4.0)	(10.0)	粘土	不良	10YR8/4 (にい黄)	ナデ	ナデ	-	-
97		3834(F-10/N)	-	(3.0)	14.6	粘土	良好	2.5Y7/1 (黄灰)	摩滅	ナデ	-	-
98		3442(F-15/a)	(21.0)	(6.0)	-	粘土	不良	SY7/2 (灰白)	同心円タタキ	-	-	-
99		1761(F-12/Na)	-	(5.6)	-	粘土	良好	SY7/2 (灰白)	同心円タタキ	平行タタキ	-	-
100		2517(E-16/II)	-	(6.2)	-	粘土	良好	SY5/1 (灰)	同心円タタキ	格子タタキ	-	-
101		634(E-12/Na上) 1139(D-12/Na)	-	(6.1)	-	粘土	良好	SY5/1 (灰)	同心円タタキ	格子タタキ	-	-
102		1819(F-12/Na)	-	(5.0)	-	粘土	良好	2.5Y6/2 (灰白)	同心円平行タタ	格子タタキ	-	-
103		1656(F-13/Na)	-	(6.2)	-	粘土、谷粒	良好	SY4/1 (灰)	同心円タタキ	平行タタキ	-	-
104		1026(E-12/Na) 1027(E-12/Na) 1046(E-12/Na上) 1056(E-12/Na) 2805(D-14/Na)	-	(9.7)	-	粘土	良好	SY5/1 (灰)	平行タタキ	格子タタキ	-	-
52	105	3806(F-10/Na) 3819(F-10/Na)	-	(9.6)	-	粘土	良好	2.5YR4/3 (にい赤褐色)	平行タタキ	格子タタキ	-	-
106		296(E-13/Na) 644(E-12/Na上) 2102(F-14/Na) 3166(E-14/Na)	-	(8.6)	-	粘土	良好	SGY4/1 (暗灰オリーブ灰)	同心円平行タタ キ	平行タタキ	-	-

第18表 火葬墓関連物観察表

検査番号	報告番号	出土区/層	遺構	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
53	107	遺構内一坑 (G-18/Va)	火葬墓	土瓶器	16.6	8.7	9.6	良好	精緻	7.5YR8/6 (淡黄)	ナデ	遺骨器の產として使用	
	108	遺構内一坑 (G-18/Va)	火葬墓	土瓶器	13.1	19.4	12.0	良好	精緻	2.5YR5/6 (明赤褐色)	-	遺骨器として使用	
	109	遺構内一坑 (G-18/Va)	火葬墓	土瓶器	13.4	4.8	6.4	良好	精緻、赤色粒	10YR8/4 (淡黄)	見込みの跡止ナ	ナデ	供献土器
	110	遺構内一坑 (G-18/Va)	火葬墓	土瓶器	12.6	4.2	5.5	良好	精緻、赤色粒	10YR8/5 (淡黄)	見込みの跡止ナ	ナデ	供献土器

第19表 星雲・刻畫土器観察表

検査番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	方向	文字	備考
55	111	1094(F-11/V)	土瓶器	13.0	4.0	7.5	精緻	良好	5YR7/8 (暗)	ナデ	ナデ直部外側にへう切り痕	-	星	灯明具として使用、裏面に「十」字状の鉛削
		3781(F-10/Va)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		3783(F-10/Va)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		3788(F-10/Va)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		-(-)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	112	2159(F-13/Va)	土瓶器	14.2	4.4	7.5	精緻	良好	7.5YR8/S (深)	ナデ、星込みの跡止ナテ有り	ナデ	星	-	-
		2311(F-13/Va)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	113	1165(F-13/Va)	土瓶器	-	(1.0)	5.8	-	良好	7.5YR6/3 (淡)	-	-	-	-	-
	114	2053(F-14/Va)	土瓶器	-	(1.2)	7.0	精緻	良好	7.5YR7/6 (暗)	ナデ、星込みの跡止ナテ無し	-	-	-	-
	115	3106(F-13/Va)	土瓶器	-	(2.0)	-	精緻	良好	-	-	-	-	-	-
	116	3191(E-14/Va)	素色土器	-	(2.1)	-	精緻	良好	7.5YR6/4 (淡)	-	-	-	-	-
	117	2638(E-15/Va)	土瓶器	-	(3.8)	-	精緻	良好	7.5YR6/4 (淡)	-	-	-	-	-
	118	579(E-12/Va)	須恵器	12.2	(2.0)	-	精緻	良好	5Y7/1 (灰)	ナデ	ナデ	正	仏	-

第20表 焼塙壺観察表

検査番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
56	119	1684(F-13/Va)	12.0	(7.5)	0.8~1.0	砂粒	良好	5YR6/8 (暗)	内面に布條有り
	120	2000(F-13/Va)	14.2	(6.5)	1.1~1.5	砂粒	良好	2.5YR8/6 (暗)	内面に布條有り
	121	-(-)	11.2	(3.7)	0.8~1.2	精緻	良好	7.5YR6/6 (暗)	内面に布條有り
	122	1781(F-12/Va)	12.0	(4.5)	0.7~1.0	砂粒	良好	5YR6/8 (暗)	底部で厚底、内面に布條有り
	123	71(F-8/V)	(15.0)	(5.5)	0.7~1.1	精緻	良好	5YR6/8 (暗)	底部で厚底、内面に一部布條を認める
	124	509(E-12/Va)	-	(4.5)	0.8~1.7	砂粒	良好	2.5YR6/6 (暗)	内面に布條有り
	125	565(E-12/Va)	-	(4.8)	1.0~2.0	砂粒の抜けが多い	良好	2.5YR6/8 (暗)	底部欠損、内面に布條有り
	126	1900(E-8/Va)	-	(3.7)	-	精緻	不良	7.5YR7/3 (淡)	底部欠損、内面に布條有り
	127	3856(F-10/II)	-	(3.8)	1.0~1.2	砂粒	不良	7.5YR6/6 (暗)	内面に布條有り
		3859(F-10/Va)	-	-	-	-	-	-	-

第21表 訪鍾壺観察表

検査番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	径(cm)	器厚(cm)	穿孔径(cm)	胎土	色調	侧面調整	備考	
57	128	1283(F-13/Va)	7.0	0.5~0.8	0.6	精緻	7.5YR8/8 (暗)	○	底部へう切り痕あり	
	1547(F-13/Va)	-	-	-	-	-	-	-	-	
	129	8006(F-12/Va)	6.0	0.6~0.9	(0.5)	精緻	7.5YR7/4 (淡)	○	底部へう切り痕なし	
	8166(F-12/Va)	-	-	-	-	-	-	-	-	
	130	2047(F-13/Va)	6.6	0.6~0.9	0.6	精緻	7.5YR7/4 (淡)	○	底部へう切り痕あり	
	2100(F-14/Va)	7.2	0.8~1.0	1.0	精緻	7.5YR7/6 (暗)	○	底部へう切り痕あり		
	132	454(E-12/Va)	7.2	0.6~0.7	0.6	精緻	7.5YR7/4 (淡)	○	底部へう切り痕あり	
	1912(E-10/Va)	6.6	1.0~1.1	0.8	精緻	10YR8/3 (淡)	○	底部へう切り痕あり		

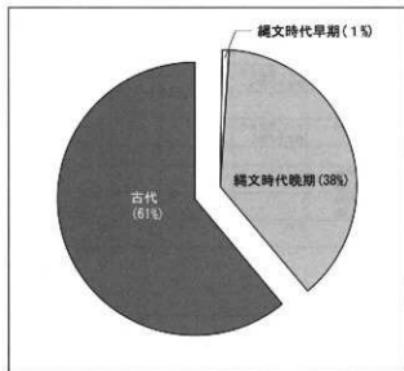
第22表 鉄製品観察表

検査番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
58	134	2870(D-16/Va)	不明	(64)	(16)	(5)	(5.67)	穿孔5mm/4mm
	135	1354(E-13/Va)	刀子	(42)	(10)	(5)	(2.68)	-

## 第V章 発掘調査のまとめ

本遺跡では、縄文時代と古代の遺構・遺物を発見した。出土遺物総数3,914点中縄文時代の遺物は1,184点、古代の遺物は1,877点。小破片のため時期判別ができなかった遺物が853点あった。明確に時期判別ができる遺物3,061点中、縄文時代と古代の出土遺物数の割合を示したのが第59図である。さらに、縄文時代の遺物中、その99.7%が晚期の遺物であり、本遺跡の特徴を示している。

以下、縄文時代と古代の二時期を中心に調査成果を述べ、まとめとする。



第59図 時期別出土遺物の割合

### 1. 縄文時代

縄文時代の調査では、集石遺構1基、土坑9基を検出した。集石遺構はⅤ層上面で検出し縄文時代早期と判断したが、周辺から輪円押型文や山形押型文土器（平向山式土器）が出土している。9基の土坑の内、逆菫木痕を伴う土坑を2基検出したが、時期認定を以下の通り試みた。①2号土坑の検出面はⅩⅠ層で、裡土はⅤ層中心と判断されることから、縄文時代早期以降、②5号土坑は検出面はⅤ層であるが、埋土上部に御池火山灰が堆積することから縄文時代中期以降と判断できる。

縄文時代早期以降、出土遺物の量や検出遺構の種類から、おおむね狩猟対象地か短期的な野営地のような土地利用が想定される。

縄文時代晚期の出土遺物は、上述したように本遺跡の遺物総数の約5分の2を占め、一定期間安定して生活が展開した様相がうかがえる。

出土土器は7個の黒川式土器で、単純に構成される。半粗半精製（No.60）は口縁部に縞の付着が確認でき、調理具として使用したと思われる。貝岩製の打製石斧2点は当該時期の土器とと考えられ、同じく石器は未製品も含めて12点出土

が確認できる。黒曜石製の石鏃は、西北九州産の良質な石材が使用されている。これらも含めてⅣ層出土の石器全体の分布状況は縄文時代晩期土器の分布と重なり、遺跡南側の山頂へと続く斜面を中心に広がっていることが確認できる。以上のことから本遺跡の縄文時代晩期の様相は、遠隔地と広範な交流を有しての一時期の生活拠点としての土地利用がなされたと考える。遺物の集中区が南側斜面を中心に広がりを見せることについて、あえて言及すると、本遺跡調査区範囲外の南東には瘦尾根が存在し、当該時期の生活拠点はこの地点を中心に利用した可能性が考えられよう。

### 2. 古代

古代の調査では、掘立柱建物跡4棟、火葬墓1基、焼土4基、土坑、古道などを検出した。出土した遺物は土器が最も多く、全体の8割を占め、外に焼塙壺、須恵器、黒色土器などが出土した。以下、遺構と遺物、さらには周辺遺跡との関連性から考察し、本遺跡の古代の様相を明らかにしていく。

#### ① 検出遺構と遺物との関連について

本遺跡は標高320mの丘陵北側に広がる緩斜面に立地し、すそ野の平坦地(調査区南側)から隣接。あるいは切り合った状況で4棟の掘立柱建物跡を検出している。その内、1号掘立柱建物跡内からは焼土遺構も共伴して検出し、さらにはその周辺からも計3基の焼土を検出した。焼土遺構の周辺には不規則に並ぶピットを多数検出し、復元には至らなかったが、一部の規則的な配列ピットから複数の掘立柱建物が存在していた可能性もある。また、4棟の掘立柱建物跡検出エリアに隣接した10基の土坑を、調査区北側には古道を多数検出した。

遺物の多くは掘立柱建物跡検出エリアを中心に出土し、遺物の出土状況、および個々の遺物の詳細については各章で述べたとおりである。ここでは、出土遺物と遺構とを関連づけて出土点数が多かった区について述べていく。

#### 土器群

出土した土器の破片数の内訳は、壺が全体の7割を占める。以下、壺、碗、鉢、器種不明の土器となるが、土器壺は、外の器種に比べて法量が大きく破片として出土する量が当然多くなること、さらに他の器種と比べて分類が容易であることなどを考慮すると特異な出土状況ではない。

土器群が特に集中して出土したエリアは、1号・2号掘立柱建物跡とその周辺部に位置するE・F-12~14区で、調査区南側の傾斜面から10数点、北側の古道の周辺では散在する形で出土している。

#### 須恵器

須恵器は総数93点の出土で壺、壺、壺、高壺、皿が見られ、土器群と同様の1・2号掘立柱建物跡の周辺エリアから多く出土している。古道周辺や南側傾斜面にかかる手前の緩斜面にも散在する形で出土している。

### 焼塙壺

土師器甕、須恵器と同様な状況で出土しており、特に1号掘立柱建物跡周辺から多く出土している。

### 赤彩・黒色土器

計32点出土しているが、1号掘立柱内やその周辺、2号掘立柱周辺から集中して出土しており、遺構密度が極めて高いE-6区からも出土している。

### 紡錘車

8点出土した。1号掘立柱建物跡が検出されたF-13区、およびその周辺のE-12区から多く出土している。

### 墨書き土器

1号掘立柱建物跡が検出されたF-13区から2点、F-10区から2点、他は、D-13区に1点、E-11区に1点と散在している。

### 鉄製品

E-13区から1点、D-15区から1点出土している。

各区の遺物の出土状況は第60図のとおりである。この図から全出土遺物点数1877点中、E-12区が406点と圧倒的に多く、次にF-13区が241点、F-12区が208点、F-14区が183点、E-13区が168点となる。

出土した遺物の96パーセントが緩やかに傾斜する平坦部から出土し、先に述べた縄文時代晩期の遺物出土状況と比較した場合、土地を利用する際の決定基準に何らかの差異があるが、さらに、現代の耕作等による削平、搅乱による遺物出土の空白地帯があるが、今回の調査区範囲外の西側にも遺構、遺物が広がりを見せるることは確実で、この辺り一帯を古代の集落跡としてとらえていく必要がある。

なお、焼土遺構の性格を明らかにする上で鍛冶関連遺構を念頭に置いた調査が重要であるが、本調査区内からは鉄鋤や籠の羽口、鍛造剥片等の遺物は出土していない。

### (2) 周辺遺跡との関連について

本遺跡から出土した須恵器の甕(No.100、No.101)は、外面が格子タキで内面は特殊な当て具(同心円の四枚目に放射状の痕跡が残されるもの)を使用している。この種の甕は、本遺跡から南側の丘陵を越えた羅場遺跡でも確認されている。羅場遺跡はその出土遺物に本遺跡との共通点が多いことから、両遺跡間の比較によって時期的な位置付けを試みる。

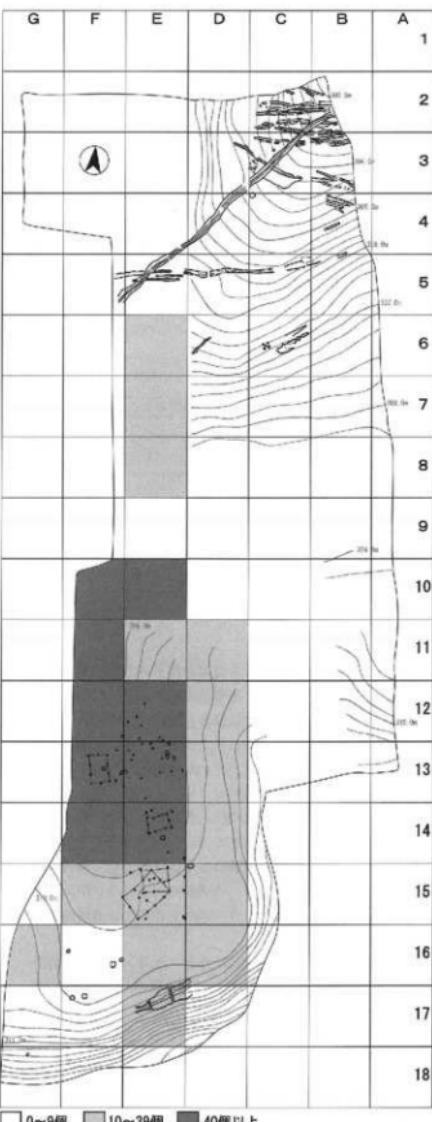
### 遺物の比較

ここでは、土師器甕、土師器壺について比較を試みる。

比較の視点は土師甕は器厚、壺は口径・底形・器高を完形品のみで比較する。なお、「高築遺跡」「羅場遺跡」の発掘調査報告書に記載してある編年を参照するため、高築遺跡も扱うこととする。

第23表の器厚平均は、最小厚平均と最大厚平均との平均値であり、第24表の数値も平均値である。

本遺跡の土師器甕は、全体的に器壁が厚く、口縁部が



第60図 各エリアの遺物出土状況

短い器形が多い。壺の厚みは高縁遺跡とほぼ同じで踊場遺跡はこの中で最も厚い。

环の特徴としては、充実高台の認められない平底で、器高は4cm前後が多く5cm前後の深手のものは確認できず、形態差の少ないものがほとんどである。対象の二遺跡と比較してみると、形状は、両遺跡の环に類似しており、高縁遺跡より小型で、踊場遺跡よりはやや大きくなる。踊場遺跡で確認された底部が張り出す环はごく少数であるが、高縁遺跡で確認された砂粒を多く含む环が本遺跡からも出土している。

以上、本遺跡の土師器壺と环は両遺跡に属するもので、高縁遺跡の土師器壺、土師器杯の編年案に照らした場合、高縁遺跡の9世紀前半～後半と踊場遺跡の9世紀後半～10世紀初頭の間をつなぐ9世紀中～9世紀後半頃までの時期に入るものと考えられる。

第23表 土師器「壺」器厚の比較

項目	最小値(mm)	最大値(mm)	基準平均(mm)
高縁遺跡	8.3	12.3	10.3
踊場遺跡	9.4	14.5	12.0
財部町・尾遺跡	8.0	13.0	10.4

第24表 土師器「环」の比較

項目	口径(mm)	巻高(mm)	底径(mm)	口径-底径(mm)
踊場遺跡	12.3	4.3	6.5	5.8
高縁遺跡	13.1	4.5	6.4	6.7
財部町・尾遺跡	12.7	4.2	6.7	6.0

### 古道

本遺跡の調査区北側からは多数の古道を検出したが、その多くは東西に向かうもので、掘立柱建物跡などの一群の遺構との直接的な関連性を見出すには至らない。しかし、これらの古道を北東～南西方向に切る古道が1条、外にも調査区南側の斜面から藏骨器が埋納されていた火葬墓へつながると思われる古道を1条、さらに削平によって一部しか残存していないのが数条の類似した古道を検出した。これら古道はいずれも二つの山頂に挟まれた谷筋の方向を向き、その方角には踊場遺跡が立地する。踊場遺跡からも山腹に沿った東西に延びる古道を6条検出しており、本遺跡の古道とつながる可能性がある。最近まで同じルートで山腹を迫る生活道路が現存していた。

また、本遺跡からは、底部に「桑原」と書いた墨書き土器や「仏」とヘラ書きした刻畫土器が出土したが、数が希少であるためその性格を断定することはできないが、周辺遺跡からも墨書き土器が出土していることから考えて、文字を読み書きできる人々が少なかった時代に、識字層（官人）がこの周辺に存在していたと想定したい。さらに、藏骨器と供獻土器が埋納された火葬墓を検出したが、本遺跡が位置している財部町では、「十文字黒田B遺跡」からも藏骨器が出土し、8世紀台のものと考えられている。財部町は、古代「日向国諸郡郡」に属しており、旧諸郡郡内を見渡すと16か所もの場所から「藏骨器」が出土している。このことは、この地方が早く

から火葬という埋葬形態を伴う仏教文化の影響を受けていることを示唆しており、隣接する踊場遺跡の7号掘立柱建物跡の中から出土した宗教的、祭祀的性格の強い墨書き土器とも関連性を見出すことができる。

本遺跡と踊場遺跡をつなぐ古道の存在は、小高い丘陵地を中心として仏教文化を取り入れながら構成された当時の集落の様相を考える上での重要な示唆となる。

（蔵骨器、火葬墓についての詳細は、本報告書「付録・鹿児島県内の藏骨器について」を参照されたい）

### 参考文献

「九重岡遺跡・踊場遺跡・高縁遺跡」「鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書」(71)2004

「財部町郷土史」財部町郷土史編纂委員会 1997



第61図 本遺跡と踊場遺跡との地理的関係

付編

# 財部城ヶ尾遺跡出土の藏骨器内焼骨について

峰 和治

(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)

## 1.はじめに

東九州自動車道建設に伴う平成11年度の発掘調査で、鹿児島県曾於郡財部町南保所在の城ヶ尾遺跡から有蓋藏骨器1組が出土した。器内に焼骨の遺存が確認されたため、鹿児島県立埋蔵文化財センターから筆者に依頼された。以下に所見の概要を報告する。なお、この藏骨器の身部は椭円形の短頭蓋で、土師器椀が口縁に蓋をしたままの直立状態で検出された。すぐ脇には、2点の土師器壺が供試されていた。土師器の形態から、所属年代は9世紀後葉から10世紀とみられている。

## 2. 烧骨の取り出し、重量、同定部位

出土した藏骨器は現地で土師器碗の蓋部をはずし、焼骨を入れた身部だけを筆者の研究室に移送した。器内の焼骨は、任意の深さ(2~3cm)まで層状のブロックとして取り出していくため、最終的には5層に区分された。これはあくまで便宜的、人為的な層区分であり、藏骨器の中で各破片がどのレベルに位置していたかを知る大まかな目安となるものである。各層の焼骨の配置は、上方からの写真撮影とメモによる記録にとどめた。

藏骨器内には土砂が流入していたため、整理の手始めとして、取り出した内容物を層毎に2mmメッシュの籠にかけた。籠に残った残渣から骨片だけを丹念に拾い出し、重量を計測したところ610gであった。灰や砂とともに籠の底を通過した細片や骨粉も少なからずあるが、「砂」と骨との完全な分別が困難なことから、610gを本例の焼骨重量とする。

焼骨の大半は細断片となっていて、部位の同定ができるものはごく少量に限られた。しかし、重複する部分はなく、1個体の人体とみなして差し支えない。器内からは、骨と流入土砂以外のものは検出されなかった。

各層の概略は次の通りである。なお、口縁が傾斜しているので、器高が最も小さくなる位置を深さの基点とした。

1層：口縁から深さ5~8cmの範囲

最上層で、茶褐色のカフカの流入土に黒色の炭化物が混在。焼骨は土中に浮いた状態のごく少量の破片のみ。部位の特定ができるものはない。骨重量1g。

2層：口縁から8~10cmの範囲

上層の骨が露出し始める。細片の中には、少量の頭蓋冠片と体骨片の厚い被覆片が含まれる。41g。

3層：口縁から10~12cmの範囲

頭蓋冠片が比較的多い。細片だけが側頭骨、頭頂骨、下頭骨などの骨種類が区別できる。溝の破片7点が含まれる。体骨もほとんどが細片である。189g。

4層：口縁から12~14cmの範囲

全身の焼骨破片が万遍なく含まれる。3点の歯片がある。169g。

5層：口縁から14~17cm(器底)の範囲

最下層であり、全身の焼骨破片が万遍なく含まれる。11点の歯片が含まれる。5層の中では量的に最も多く、210g。

頭蓋では後頭骨、側頭骨、前頭骨、上顎骨および下顎骨が、各骨の特徴的な形態を示す部位によって確認された。そのほか、頭蓋冠の内板と外板が分離した破片が多数ある。歯はすべてエナメル質が剥離しており、歯根の象牙質を主体とした破片21点が識別された。歯蓋とみなした骨片の総量は90gで、全体の約1/7である。体幹・体肢骨の部位判定は、細断化によってほとんどできなかった。

## 3. 烧骨の性状

一般に火葬骨は、受けた熱によって変色、収縮、変形、亀裂、細断化などの変化を生じる。城ヶ尾例にも焼骨特有の鱗状亀裂や顯著な反りと歪みを呈する破片が含まれていた。細断化が顕著で、最も長の体肢骨破片でも41mmしかなかった。筆者が過去に経験した同量以上の火葬骨と比較すると、同定可能な部位が極めて少なかった。

骨表面の色調は暗灰色、白色、茶褐色、黒色と多様であり、火の周り具合の不均一さを示していた。頭蓋冠の破片には、白色のものと生焼けの茶褐色の破片とが混在し、同じ頭部でも部位によって火の受け方が異なることが推測された。歯のエナメル質も完全に剥離しており、全体的にはよく焼けていると言えるであろう。

## 4. 性・年齢

性別判定の決め手となる部位は特に残っていないが、頭蓋冠や大脳骨体・脛骨体の緻密質の厚みは男性的な印象が強い。脳頭蓋の結合部の破片が数点遺存し、内・外板とも瘻合箇所は見られない。歯根片はすべて永久歯で、根管や根尖孔は狭い。従って、成人とは言えるが、それ以上の詳細な年齢区分までは判定できない。

## 5. 城ヶ尾火葬骨の特徴と考察

城ヶ尾遺跡出土の藏骨器内焼骨は成人男性のものと推定された。骨は比較的よく焼成されていたが、重量は610gと少なめであった。比較資料として、鹿児島・宮崎両県から出土している藏骨器内から検出された焼骨のうち、基本情報が報告されている例を表1に示す。1個体分としては日置郡金峰町白櫻野古代火葬窓(宮下、2000)の1650gが最重量である。ほかに1000gを超える焼骨が奄美大島笠利町の宇宿貝塚(峰・小片、1997)、肝属郡吾平町の川北古石塔群(松下、1984)、都城市横尾原遺跡(峰・他、1992)で報告されている。今回の城ヶ尾例はそれらの半分足らずの量しかない。同定された部位に特別な偏りはないが、体格の違いを考慮して

も、今回の遺存量は全身の焼骨がくまなく納められたものとは考えにくい。

容器の中からごく少量しか焼骨が見つからない事例は過去にも報告されている。納骨量が少ない場合、いくつかの可能性が考えられる。①残りは他所に分骨した、②火葬の現場に意図的に相当量を残した（主要な骨だけを拾った）、③火葬場所に非意図的に取り残した（拾骨を丹念に行わなかった）、④改葬や供養を契機として集骨や散骨が行われた、⑤藏骨器の大きさや形状による都合で入れる骨量が制限された、⑥後世の容器破損や流出によって四散した、などである。城ヶ尾例では、全身の1/2程度の骨量が含まれているとみられる。また、容器の上部にはある程度の空間的余裕があった。火葬の火葬地がどこであったのかという点も、確定されていない。従て、上記のどの可能性も否定はできない。いくつかの要因が組み合わさっている可能性もあるろう。

今回、層状のブロックとして内容物の取り出しを行ったのは、骨の部位と器内における位置に何らかの関連が認められないか、検索することを念頭に置いていたからである。改葬した骨を壺に納める際に頭蓋を最上部に置く南西諸島の例や、輪椎骨を舟形として最後に骨壺に入れる仏教的な作法なども広く知られている。城ヶ尾例では、2~5層に頭蓋と体肢骨の破片が混在しており、上層に頭蓋や椎骨が集中するというようなことはなかった。このような所見から、納骨する前の段階で全身各部の骨（量的には全身の約半分）が一括収容されていた、との見方ができる。

これまで、藏骨器（竹筒）や埋納遺構に関する研究は少なからず行われてきたが、その内容物である焼骨についてはほとんど関心が払われてこなかった。火葬骨は元の形態をほとんど保っていない場合が多く、形質人類学的には興味を引きにくい存在であったと言える。しかし近年、火葬に関する有益な情報を取り出せる資料として、その価値が見直されつつある。性・年齢・体格といった遺骨の主の個人データだけ

でなく、火葬の方法や納める骨の量、納骨に当たっての作法や順序など、当時の葬送儀礼の一端を知る材料ともなりうる。また焼骨以外に、被葬者の身につけていた装身具が焼け残って混在している場合もある（都城市横尾原遺跡1号墓骨器内の弁など）。藏骨器が発見された場合、通常は内容物を一括して取り出してしまることが多いが、上記のような視点に立って、丹念な記録を取りながら器内から焼骨を取り出すことで、新たな知見がもたらされる可能性も低くはないと考える。

#### [文献]

松下孝幸：鹿児島県大隅半島出土の火葬骨、鹿児島考古18:163-169 (1984)

峰和治・小片丘彦：笠利町宇宿貝塚出土の藏骨器内焼骨について、笠利町文化財報告書23:15-30(1997)

峰和治・小片丘彦・竹中正巳：都城市横尾原遺跡出土の火葬人骨、「西原第2号遺跡・他」、都城市文化財調査報告書16:149-152(1992)

峰和治・竹中正巳：宮崎市追内遺跡出土の骨壺内焼骨について、宮崎県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書59:229-236 (2002)

宮下貴浩：白壁野古代火葬墓と製鉄遺物、鹿児島考古34:83-100 (2000)

【註】焼骨の所見は竹中正巳による】

小片丘彦：川内市御領下町越ノ里出土藏骨器内火葬骨、川内市歴史資料館年報[昭和62年度]5-6 (1988)

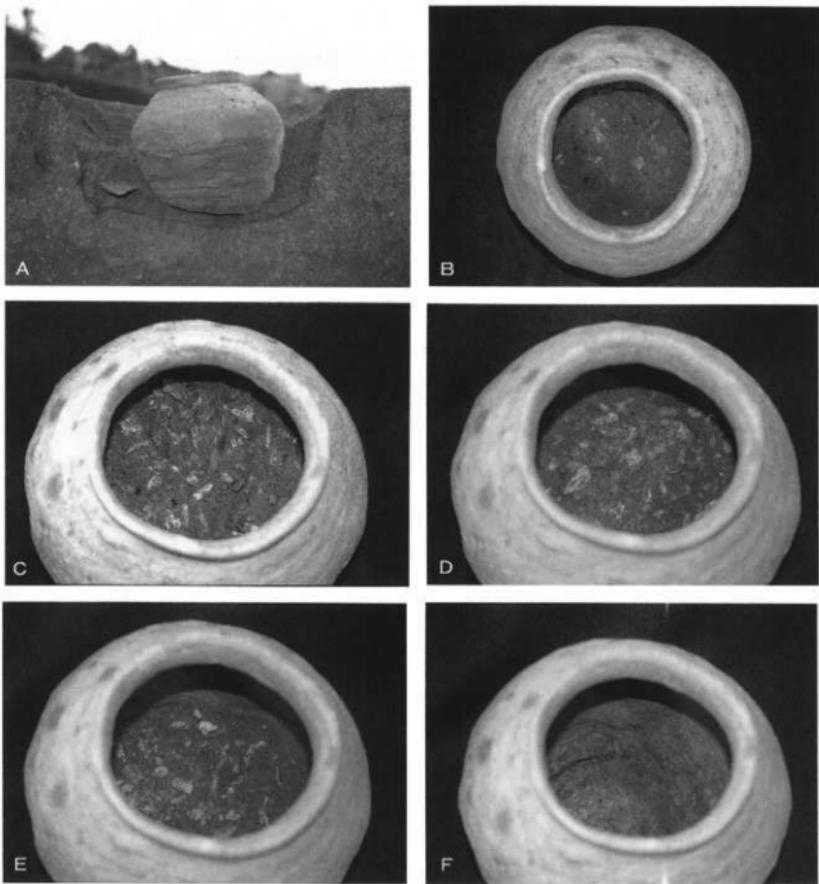
小片丘彦・峰和治・竹中正巳：円場城跡出土の藏骨器内火葬骨について、「谷山弓場城跡(上巻)」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書11:160 (1992)

表1 鹿児島県および宮崎県出土の主な藏骨器内焼骨

遺跡名等	所在地	容器	時代／年代	性・年齢	重量(g)	報告者(年)
財部城跡	皆於郡財部町	埴輪壺	9世紀後葉～10世紀	男・成人	610	本報告
黒田由跡	皆於郡黒田町	土器類	?	?	570	松下(1984)
小平遺跡	皆於郡小平町	土器類	平安	?	110	松下(1984)
川北吉石塚群	肝属郡吉野町	成川式壺	?	男・熟年	1150	松下(1984)
轟ノ里火葬墓	川内市	土器類	?	男・成人	870	小片(1986)
愛野第1例	姶良郡愛野町	土器類	平安?	?	290	未報告資料
西野第2例	姶良郡西野町	土器類	?	?	780	未報告資料
谷山弓場城跡	鹿児島市	土器類	平安～藤原	?	?	25
白樺町火葬墓	日置郡白樺町	土器類	6世紀後半～9世紀初期	?	1650	宮下(2000)
守宿貝塚	大島郡笠利町	陶質土器	10世紀	男・壮・熟年	1380	峰和治(1997)
横尾原遺跡1号	都城市	土器類	?	男・熟年	1110	峰和治(1992)
横尾原遺跡2号	都城市	土器類	?	?	630	峰和治(1992)
泊内遺跡	宮崎市	古窯灰瓶	13世紀後半	男・熟年	463	峰和治(2002)

註：土壇だけで容器を伴わない焼骨の事例は除いた。

図版1 藏骨器内焼骨



A:出土状況。蓋部をはずして身部だけを側面から見る。  
B:内容物の取り出し前。口縁内に1層の上面が見える。  
C:2層の上面。 D:3層の上面。 E:5層の上面。  
F:取り出し後。

図版2 藏骨器内焼骨



各層の焼骨一括写真。3～5層では写真的右寄りに体肢骨(a)と頭蓋(b)の主要な破片がまとめられている。

図版3 藏骨器内焼骨



A



B

C

A : 頭蓋破片    B : 歯の破片    C : 体肢骨破片

# 鹿児島県内の藏骨器について

はじめに

鹿児島県の古代(8世紀~10世紀)の藏骨器(骨蔵器)は、約60ヶ所で収集発見が報告されている。しかし、その多くは農作業中や土砂採取時の不時発見によるもので、埋納形態や詳細な出土状況の復元できるものは10例にも満たない。また、発掘調査による出土は、わずか4例(鹿児島市谷山弓場跡、財部町財部城跡、川内市都原遺跡、東市来町向裕城跡)である。したがって、本遺跡出土藏骨器は貴重な資料と言える。そこで、本遺跡藏骨器の歴史的位置付けを試みたい。

## 1. 本県藏骨器研究の経緯

本県の藏骨器に関する研究は藤森栄一によるものを嚆矢として、新東晃一、池畠耕一、中村耕治、上田耕等のものがある。

藤森は「南薩阿多発見の須恵器藏骨器」として、阿多(山上橋ノ丘)遺跡の藏骨器を取り上げ、県内の資料が広く知られるきっかけとなった。ただし、この後、藏中破後の数年間は、県内の藏骨器についての研究はみられない状態が続いた。

1953年、吉田町宮之浦牧で、芋穴を掘る際に土坑内に納められた須恵器藏骨器が発見された。銅金は重慶重二、東才二と併行し、さらに河口貞基が内側面を行い、壇構内での埋納状況が確認できた最も古い事例である。その際藏骨器に伴い、墨書きされた土師器が発見されている。その後、河口貞基は不時発見による吉松町般若寺(1972年)、国分市第一工業大学道路、鹿児島市舞学校遺跡等の調査を行っている。

1956年、右部正志氏は「古代学研究」誌上において「大隅半島の骨蔵器」で、翁ヶ迫遺跡と星敷寺遺跡出土の藏骨器を大隅半島初見例として取り上げている。これは同志社大学の大隅町八合原遺跡調査時に南之郷中学校保管資料を図化したもので、これ以後藏骨器が注目されるきっかけとなった。1957年刊行の『末吉郡土史』中では上述の2例に加え、荒神免遺跡の藏骨器が紹介されている。

1960年の安井良三「日本における古代火葬墓の分類 -歴史考古学的研究序論-」、寺師見国・三島格の「薩摩人口伊佐郡における藏骨器」及び「錫及びタカラガイ副葬の藏骨器について」が相次いで発表された。前者は藏骨器の型式学的な変遷資料として、後者は事例紹介として資料を取り扱っている。

1970年上村俊雄は、高山西田遺跡発見の藏骨器の資料紹介を行い、1972年に田之浦藏骨器について報告している。また、1985年に阿多発見の須恵器製二重口縁蓋の資料紹介を行っている。

1973年白木原和美は、南島に分布する類須恵器について考察し、喜界町小野津八幡神社の資料の特徴性を指摘した。その後、池畠は、古代の藏骨器として取り上げている。

1976年、不時発見の川内市高城町黒原の藏骨器と大隅町島居段の藏骨器が報告された。その後、1983年と1984年

に「大隅地区埋蔵文化財分布調査報告書概報」、1992年谷山弓場城跡、1988年越ノ巣火葬墓等の報告書・年報中に調査報告、資料紹介が行われている。

1976年新東は「隼人における共同体社会の崩壊期について」で、骨蔵器の分布が大口盆地周辺に多く、多くが平安時代初頭であることを指摘した。

1978年亀井明徳は西之表市西俣遺跡発見の猿投塚とみられる灰陶陶器を利用した骨蔵器についての資料紹介を行っている。これは極めて特異な例で、類例をみない。

1988年の「鹿児島県内藏骨器出土地名表」や1990年の黎明館企画展図録「仏教文化の伝来」で、一覧や写真解説が基礎資料となる。

以上の経緯を総合すると、第Ⅰ期が1980年代前半期で、資料紹介を中心とした「藏骨器研究の幼年期」であり、第Ⅱ期が1980年代後半から現在に至る、資料集成・新資料の紹介等多様な研究の「藏骨器研究の成長期」と言えよう。近年、資料は僅かであるが増加していることから「藏骨器研究の成熟期」を目指し研究の深化が期待されるところである。

## 2. 鹿児島県内における藏骨器の紹介

県内では藏骨器の現物、もしくは実測図の確認できるものは50点、実測図の公表されているのは30点で他は資料化されないため、今回新たに10点の実測を行った。また、公表されているが調整技法等表現の附記が必要と判断した7点についても、再実測及び実測図の一部修正を行なった。

### <今新たに資料化した藏骨器>

#### ①小野砂 吹上町小野砂

昭和30年(1955)8月元井熊太郎発見。詳細な出土状況や共伴遺物の記述は無し。

藏骨器は二重口縁蓋で、II線部の冠部付近と底部に打ち欠きが確認できる。器高は23.8cm、底径10.4cmを測る。胴部は最大幅部から丸味を失しI線部に至る。外面には左斜め上のタキが頭部近くまで認められ、内面は指揮さえやナデが施され、当只痕は認められない。

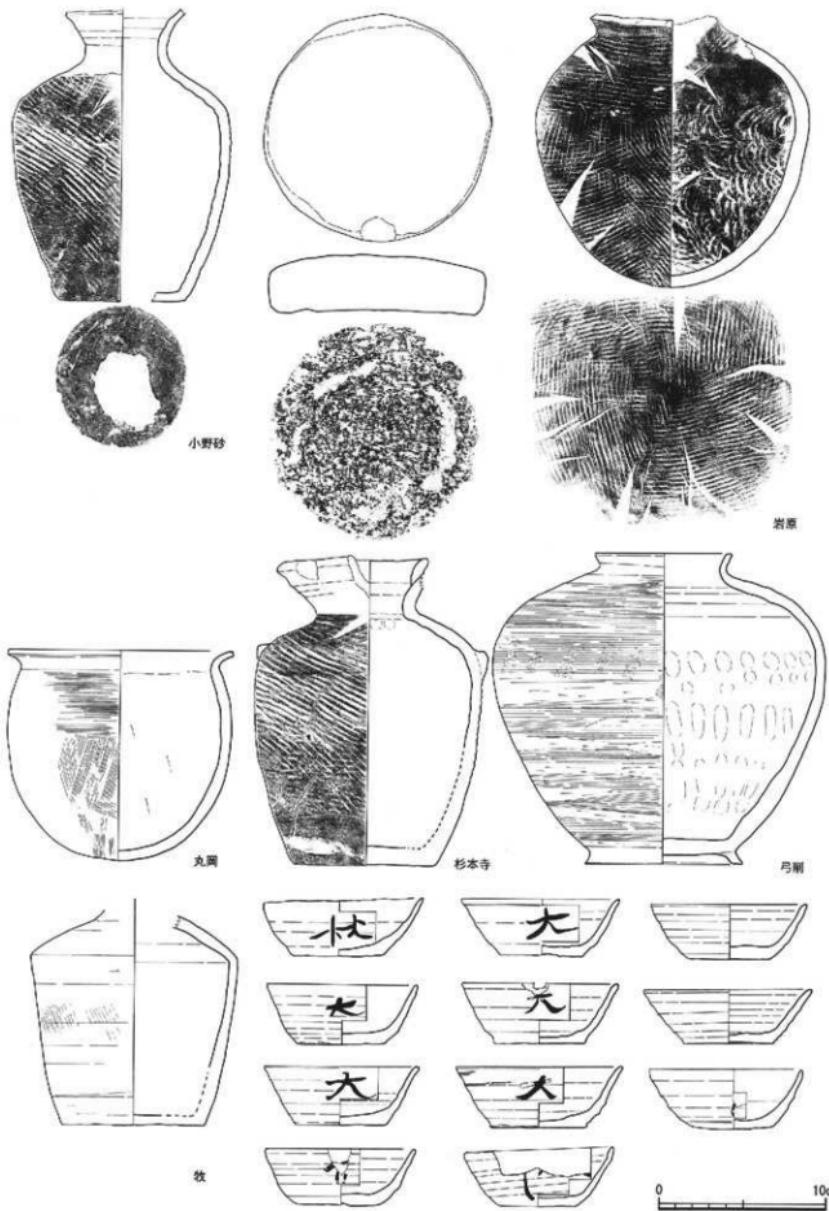
#### ②杉本寺 加世田市川畠

杉本寺は、一乘院の末寺で現在の加世田市役所敷地にあった。藏骨器はその西南隅から出土した(池畠 1990)。

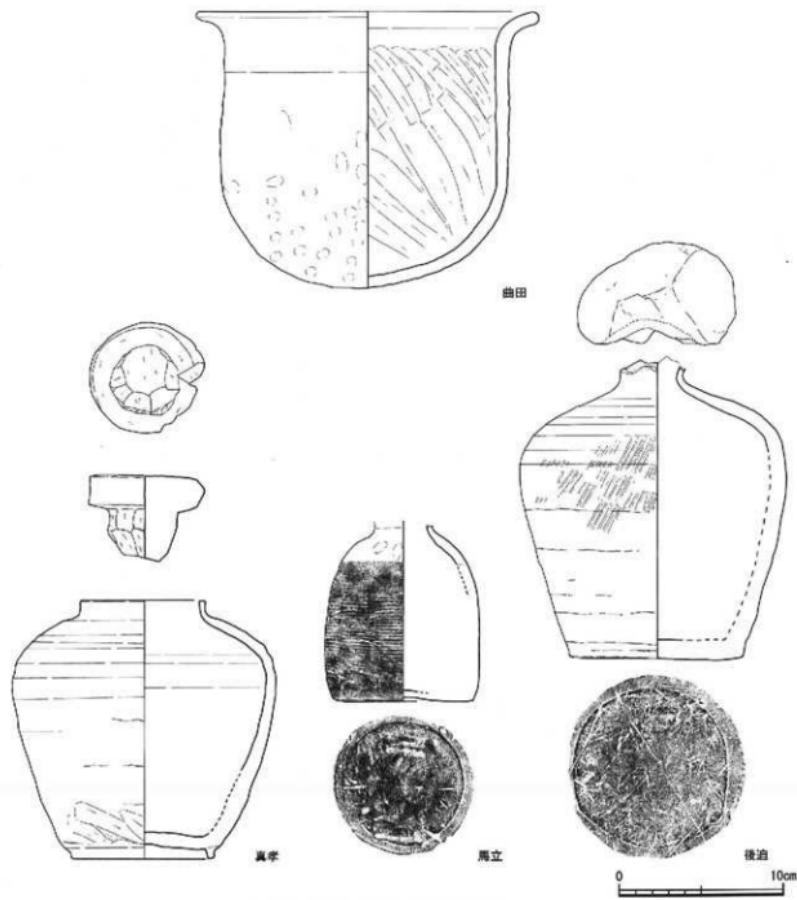
藏骨器は二重口縁蓋で肩部に一对の耳を持つ。口縁部はややいびつで、また一部を打ち欠き、器高25.7cm、底径11.4cmを測る。胴部は若干丸味を持ちながら立ち上がり、頭部近くで最大径となる。タキ調整は胴部下半では水平タキの後に左上がりのタキが、上半では左上がりのタキが頭部付近までみられる。内面は指揮さえやナデ調整が認められる。

蓋は輕石製の栓と、径約33cm程度の円盤状の軽石製蓋が二重に使用されていた。

#### ③牧 吉田町宮之浦



第1図 新たに資料化した葬骨器(1)



第2図 新たに資料化した藏骨器(2)

昭和28年(1953)に芋穴掘り中に発見された。造構は長径100cm、短径80cm、深さ60cmの楕円形の土壙で内部には木炭片の混ざった黒色の埋土がみられた。底面中央に藏骨器がみられ、周囲には合口の土師器坏が6か所にみられた。藏骨器は頸部から打ち欠き、現存長17.5cm、最大径16.5cm、底径11.5cmでやや小型である。胴部最大幅部は脛曲が強く、稜線を呈している。胴部外面には左上がりのタタキを施した後に回転のナデを施し、わずかにタタキ痕が消し切れず残る。底部外面には当具痕がみられる。土師器坏は口部を圓化した。明赤褐色と浅黄褐色を呈す2種があり、前者は体部下端からナデが、後者は体部下端にナデきれない部分を残す。

#### ④丸岡遺跡 斎刈町丸岡

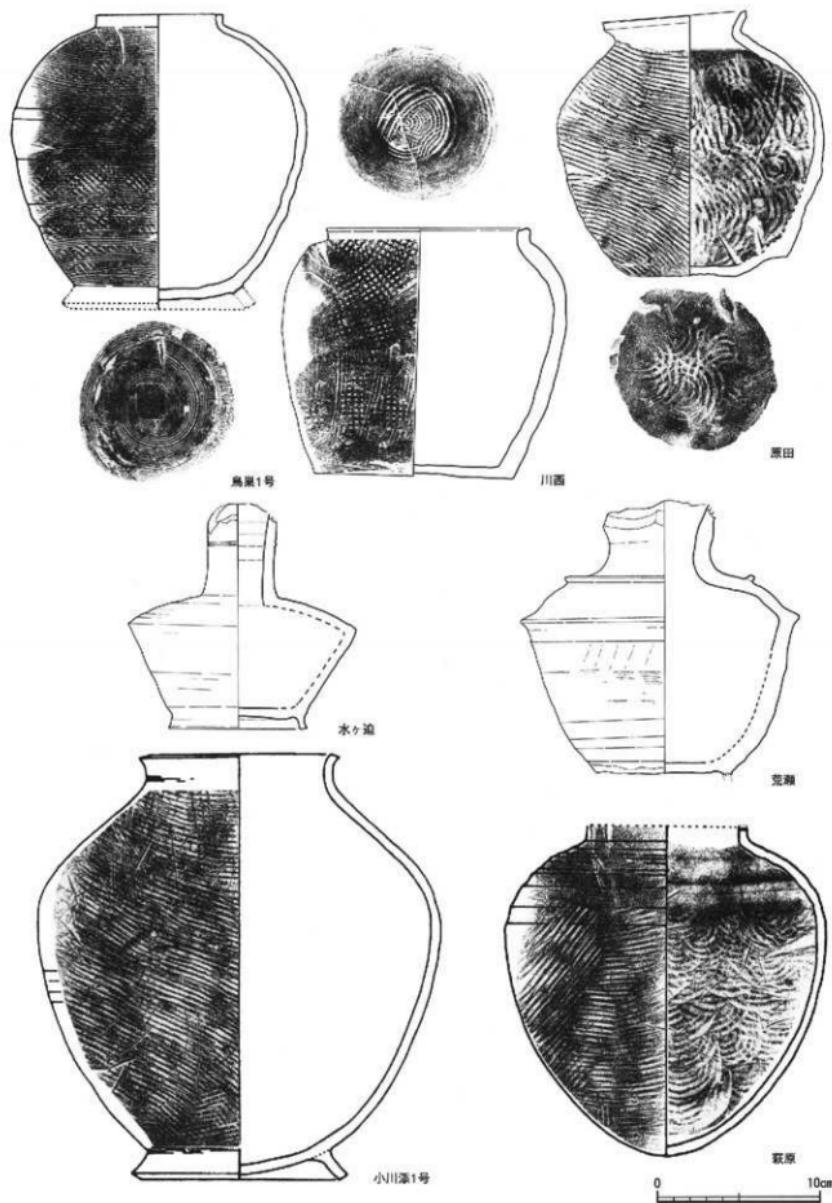
出土状況を伝える資料は無く、寺師見國の所蔵資料で現在黎明館に寄託されている。

小型の土師器壺で口径18cm、器高17cmを測る。橙色を呈し胴部外面の上位に回転の横ハケ、下位に不整方向のハケがみられる。胴部は若干膨らみを持つ。

#### ⑤岩原 加治木町岩原

加治木町立郷土館に所蔵されるが、出土状況は不明である。

藏骨器は須恵器壺で、口縁部は打ち欠き、外面に平行タタキ、内面は上位で回転ナデ、下位で同心円の当具痕がみられ



第3図 再実測・図面を一部改変した藏骨器

る。内外面共に上位と下位で調整方法の違いが看取される。

#### ⑥円削 加治木町円削

加治木町立郷土館に所蔵されるが、出土状況は不明である。

藏骨器は高台付の須恵器短頭壺である。胸部最大幅付近に左上がりのタタキ、それより上位ではカキ目、下位ではカキ目の後に部分的にケズリが施されている。内面は胴部最大部分付近で指揮さえが、下位では指揮さえ、もしくは指ナデがみられ、上位は回転ナデが施され、内外面共に上位と下位では調整方法の違いが指摘できる。蓋は現存しない。

#### ⑦曲田 加治木町西別府

加治木町西別府曲田の岩崎家の塙地から出土した。中には焼骨、木炭があったと伝えられている。加治木町立郷土館に所蔵されるが、出土状況は不明である。

藏骨器は土師器壺である。直線的な胴部から短く口縁部が外反し、端部は丸く胴部外面上位には横ナデ、下位には指揮さえがみられる。

#### ⑧真幸 半人町真幸

高台付の須恵器短頭壺と輕石製の栓が伝えられるが、輕石製の栓は藏骨器よりも小さくセット関係とは考えにくい。

藏骨器は内外面共にナデ調整で、最大幅部から上位で回転ナデ、下位で不整方向のナデである。また、胴部外面下端附近ではケズリが確認できる。

#### ⑨馬立 漢辺町崎森

花園正志により発見されたが、出土状況は不明である。また、蓋も認められない。

藏骨器は胴部下位が筒状に立ち上がり、頭部に向かいすばまる。胴部外面は下位に水平のタタキ、上位に指揮さえと回転ナデがみられる。

#### ⑩後追 錦北町後追

錦北町歴史民俗資料館に所蔵されている。藏骨器の蓋に自然石を用いている点が他にはみられない特徴である。

藏骨器は二重口縁壺で口縁部を打ち欠いている。頸部は強くすぼまり、胴部外面には右上がりのタタキが最大幅付近に、そこから上位は回転ナデが施されている。

### <再実測、図面を一部改変した藏骨器>

#### ⑪鳥巣 1号 大山市羽ノ鳥巣

胴部外面の調整高台付の須恵器短頭壺で、高台は剥離している。胴部外面は左上がりのタタキの後にカキ目を施し、底部は下部に膨らんでいる。

#### ⑫荒瀬(船津田) 姫川町本城

寺跡見聞図、三島格査により1960年に紹介されている。肩部に凸部を持つ長頭壺は熊本県の阿高や古南遺跡に藏骨器として類例があるが、県内では唯一である。なお、1990年の『仏教文化の伝来』では須恵器壺の転用蓋とセットとされるが本来は別個体である。1960年の報告時には蓋單体で指摘されていましたが、1978年の上野精志による集成時に報告番号283の荒瀬藏骨器と宮崎県高鍋出土藏骨器の2者を同一番号として誤って報告したことから、本藏骨器と伝宮崎県高鍋出土の須恵

器壺がセットとして紹介されたようである。

藏骨器は頭部中位で打ち欠き、高台は剥離している。内部には焼骨、タカラガイと側製品2点を確認している。現在黎明館に寄託されている。

#### ⑬川西 大口市曾木

筒状に近い胴部から短く口縁部が直立する。胴部外面は格子タタキ、胴部下半は縦位のハケがみられる。底部内面の中心部分に当具痕がみられ、周囲はナデ調整を施す。現在黎明館に寄託されている。

#### ⑭麻原 大口市曾木

口縁部を打ち欠いた須恵器壺である。胴部外面上位は回転ナデ、下位に平行タタキを施す。内面は胴部上位に回転ナデ、下位に当具痕、上位と下位で調整方法は明瞭に異なる。

#### ⑮原田 大口市原田

須恵器の短頭壺で、全体的にいびつな形態を呈する。胴部外面には左上がりのタタキ、内面には当具痕、底部外面にも当具痕を認め、口縁部は短く外方に開き端部に面を持つ。現在黎明館に寄託されている。

#### ⑯小川添 1号 美刈町南浦

従来の圓面に胴部外面の調整を追加した。胴部全体に左上がりのタタキ、内面にはナデや指揮さえがみられ、高台はゆがみを生じ、底部は下部に膨む。

#### ⑰水ヶ迫 志布志町水ヶ迫

昭和8年(1933)、道路工事中に横穴から発見された。

藏骨器は須恵器長頭壺で、胴部中位で打ち欠いている。胴部には一条の沈線がみられ、胴部と蓋部の付根付近と胴部外面下位でケズリを認める。

### 3. 分析の視点及び藏骨器の分類と時期的な位置付け

第1に県内の藏骨器の分類・編年を通じて本資料の時期的な位置付けを試み、形態や地域的な特徴を検討する。第2に本資料に伴い土師器壺2点、また資料の下位から須恵器小片が数点出土しているが、こうした副葬品を県内の事例の中で評価する。第3に本遺跡や、その周辺遺跡からの位置付けを検討したい。

上記した県内藏骨器で、形状を伺い知るのは48点である。今回それを1~6類に分類した。なお、類例の認められない5点についてはその他として一括しているが、これらは後に個別に取り扱うこととする。まず各型式の分類基準を指摘する。

#### ①分類

1類 須恵器の高台付有蓋短頭壺で、「斎壺」と呼称される。藏骨器の専用棺として使用され、全国的に同型が認められる。これらを、1A類と1B類に細分する。1A類は器高を最大径で除した指數が0.8以下のもので、1B類は器高を最大径で除した指數が0.8以上のものである。小山富士夫は、器高より胴部最大径の大きいものを奈良時代前半～後半に、器高と胴部最大幅のほぼ同じものは奈良時代後半、器高より胴部最大径の小さいものを奈良時代末～平安時代に位置付けている(小田 1977)。今回は、小田氏の指摘に実際

のデータを考慮し0.8を分類基準とした。また、この属性は器高と胴部外面の調整方法とも関わることが認められる。器高は20cmを基準とし、以下のものを1A類、以上のものを1B類とする。調整技法は1A類が外面に回転ナデが顕著なもの、1B類はタタキやカキ目調整が顕著なものとする。

2類 1類と同じ短頸壺ではあるが、底部の高台が消滅し平底である点が大きく異なる。また、一部を除いて専用の蓋は認められず、また、1類が須恵質のみであるのに対し2類は須恵質と土師質の両者が存在することである。藏骨器の専用棺ということでは1類と共通する。なお、胴部最大径と底部径の比率が小さく簡状に近いもの、胴部最大径が低くナデ肩を呈すものは2B類に細分した。ただし、これらは積極的に分類基準を提示できるものではなく、2A類に統括し難い一群である。即ち2B類の細分・位置付けは資料の増加次第となる。

3類 二重口縁壺である。この種の壺は集落遺跡等で一般的に発見されることから、日常品の転用を指摘できる。藏骨器に使用される容器の中では最も多く、大多数が須恵質であるが、色調の赤く発色する例も若干存在する。なお、これらの内で胴部径が大きく、二重口縁の屈曲の鈍いものを特に3B類として細分する。

4類 外方に開く短い口縁部の須恵器壺である。胴部外面にタタキ、内面は底部まで同心円の当具痕がみられる。口縁部の打ち欠きから転用棺と考えられるが、集落遺跡ではほとんど認められない。尖底状の底部で肩部の張る壺を4A類、丸底のある胴部で底部も丸底となる壺を4B類に細分する。

5類 土師器壺である。一般的な遺跡でみられ、転用棺が想定される。口縁部が長く、器壁が薄く、外面にハケ調整がみられるタイプを5A類、口縁部が短く、器壁が厚く、胴部外面にナデ調整主体のタイプを5B類に細分する。両者は時期差が想定される(松田 2004)。

6類 全て須恵器で、胴部下端から中位で直立もしくは若干外開きになり、胴部中位付近から口縁部で大きくなれる。口縁部は全て打ち欠くために形態は不明で、法量は底部から頭部まで11~17cmの小型品が多い。

その他…上記の分類に当てはまらない一群で、5個体確認できる。これらについては後に個別に検討する。

## ②編年

次に、各形式毎の時期的位置付けを試みる。藏骨器の形

態と共に①藏骨器に使用されている蓋、②共伴して埋納される土器器食器、③集落遺跡等その他の遺跡における類例の出土状況を参考に検討を進める。なお、食器・炊具は高窯遺跡で試みた編年を使用する(松田 2004)。また、検討に際して考慮すべき点として、藏骨器共伴資料はあくまで埋納期の同時性を示すものであって製作時期の同時性とは必ずしも合致しないことである。また、藏骨器と蓋がセットで伝えられている場合、発掘後の経過によってセット関係の変化している可能性も考慮する必要がある。これらの点は検討に際して明確にしたい。

## 1類

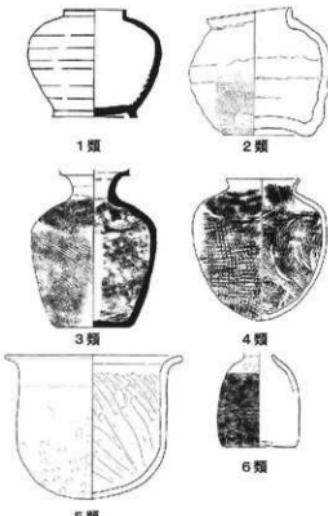
1A類には川内市越ノ巣、金峰町新山上橋ノ丘、大隅町鳥居段1号、高山町後田があり、現存するのは越ノ巣と鳥居段1号である。

越ノ巣藏骨器の外面は、丁寧な回転ナデがみられる。蓋は摘みを有し、火燐がみられる。法量、形態からは身部とセットで製作したと考えられる。また藏骨器は外容器を伴い、外容器を覆うことに関して黒崎直氏は、8世紀の特徴と指摘している(黒崎 1980)。

鳥居段1号は外面に一部タタキを残すが、總じて丁寧な回転ナデで、胴部下半にはケズリが確認される。蓋には絆石製品が使用されている。

新山上橋ノ丘は藏骨器の表面にハケ、タタキがないと指摘されている(藤森 1931)。また、蓋は圓面からの判断であるが6世紀末~7世紀の形態を呈している。報告文にも専用の蓋ではないと指摘されており、出土後にセット関係になった可能性が考えられる。

以上、1A類の藏骨器は總じて胴部の張るものではなく8世



第4図 藏骨器の分類(S=1/B)

第1表 1類法量表

名称	所在地	調整方法 [外側]	器高	口径	底径	最大径	器高/ 最大径
新山上橋ノ丘	金峰町阿多	回転ナデ	14.6	10.0	11.4	18.2	0.80
越ノ巣	川内市御領下町	回転ナデ	16.6	9.6	13.0	20.2	0.82
復田	高山町後田	回転ナデ	15.9	9.4	11.2	18.5	0.86
鳥居段1号	大隅町鳥居段	回転ナデ・ タタキ	(16.0)	8.2	10.8	19.3	(0.83)
東野	荒尻町田中	回転ナデ	(19.5)	8.4	11.2	23.7	(0.82)
真幸	隼人町	回転ナデ	21.0	10.0	11.5	21.2	0.99
新井遺跡	隼人町	カキ目・タ タキ	20.4	12.4	12.0	23.5	0.87
丹南	佐治町弓削	カキ目・タ タキ	25.4	10.8	12.6	26.8	0.95
鳥巣1号	大口市羽口山里	カキ目・タ タキ	(24.2)	10.5	12.8	24.8	(0.98)
小川添1号	妻知町向道	タタキ	26.0	12.1	13.2	24.8	1.06

紀後半の年代が指摘できる。

1B類は大口市鳥巣1号、菱刈町小川添1号、加治木町弓削、隼人町真孝、同町新城遺跡がある。共伴遺物の認められるのは新城遺跡のみで、黒色土器皿を伴い、蓋として使用された可能性が高い。藏骨器は外面の胴部最大径付近にタタキ、タタキ調整の後に胴部下から口縁部にカキ目状の回転ナデを施している。胴部下半には部分的にケズリが、内面は最大径から上位で丁寧な回転ナデ、下位で綫位の指ナデが顕著で、上下で成形方法が異なる。

弓削の藏骨器は形態、法量で若干異なるが調整方法は新城遺跡と共通し、上位と下位で成形方法が異なる。両者共に胴部最大幅部が膨張する。

真孝は胴部の張りが弱く、縱長気味の形態である。胴部外面は最大幅より上位で丁寧な回転ナデ、下位では不整のナデとケズリが認められ、上位と下位で成形方法が異なる。

鳥巣1号と小川添1号は法量と、右上がりのタタキが胴部外面全体に看取れる点で共通している。上3者で認めた胴部上位と下位の成形方法の違いは認められない。

以上、1B類は時期を明らかにする共伴遺物が少ないが、新城遺跡の黒色土器から9世紀前半が想定される。また、成形方法として胴部上位と下位で異なる成形方法を用いるものが多く確認できた。

#### 2類

2A類は金峰町白樺野、大口市笄トキ2号、同原田、菱刈町小川添2号、財部町財部城ヶ尾遺跡である。また、菱刈町大迫では土師器甕の藏骨器に伴い、2類の土師器蓋が4点出土している。2類には比較的の共伴遺物が多くみられる。

白樺野は土師器坏4点が共伴し、4点の体部外面に「山」が墨書きされている。時期は2期に位置付けられる。藏骨器は土師質を呈し、外面の調整方法に回転横ハケを用い、土師器壺の製作方法が指摘でき、土師器製作集団により製作されたものであろう。

大迫は共伴する5点の土師器坏から、2期が想定される。

本遺跡は蓋に土師器碗、共伴遺物として土師器坏2点がある。土師器坏は底部が若干厚めで2期の後半に位置付けられ、蓋は2期が想定される。

小川添2号は土師器蓋を中央に置き、2点の大型碗で上下から覆う、特異な組合せである。大型の土師器碗は高台が体部窓に比べて相対的に長く、時期的には3期が想定される。

以上、2A類は9世紀前半~10世紀に位置付けられる。

2B類は大口市山城原、同川西、知覧町猿山岡の3点で、山城原は石塔群の整備作業中に五輪塔の掘りこみの中から発見された(河野 1984)。2A類に比べて胴部最大径が大きく、川西は胴部最大径から口縁部にかけての屈曲が弱く、2A類に比べてやや筒状を呈する。猿山岡は張りの無い胴部最大径を下半に持ち、上半は口縁部に向かって大きくすぼまる。同様の形態は後述する6類に類似する。

以上、2B類は共伴遺物が無く、時期的な位置付け明確に提示できないが、上記の特質から10世紀以降を想定できる。

#### 3類

10遺跡以上で確認され、県内で最も多く、集落遺跡等で多く出土することから、日常容器の転用帽と考えられる。大多数が口縁部を打ち欠き、非実用的な容器とする意图が看取される。また、口縁部の打ち欠きのない大根占町笑喜の例でも底部が打ち欠かれ、全てに打ち欠き行為が指摘できる。

吉田町牧では藏骨器に伴って13個体の土師器坏が出土し、1個が蓋で、残りが2対セットで合わせ口の状態で埋納されていた。坏は、体部下端にナデきれない一部を残すものと下端から回転ナデを施すものがある。2期~3期を想定する。

藏骨器の形態からは鷹北町後追が古相を示し、胴部最大径付近に右上がりのタタキが施され、口縁部に向かい丁寧な回転ナデ、下位は不整方向のナデがみられる。このような上位と下位での明確な成形方法の違いは3類の中で他になく、1B類の特徴であることから、9世紀前半を想定したい。なお、頸部は3類の他に比べて細くすぼまっており、また、タタキの方向も他例が左上がりであるのに対して、右上がりで特異である。

加世田市杉本寺、隼人町弓削ヶ園1号の両者は3類の他に比べ口縁部の幅が広く、胴部最大径が高位にあり、胴部最大径付近には二対の耳があり、二重口縁部の屈曲は鈍い。この2例より頸部幅が広く、二重口縁部の屈曲の鈍くなった資料が熊本県下り山1号窯跡出土須恵器である。下り山1号窯は11~12世紀に位置付けられており、当例は県内の多くの二重口縁蓋と下り山1号窯の中間に位置付けることができよう。よって、時期的には10世紀代が想定される。

その他の例は、左上がりのタタキを胴部全体に認められ、タタキが頸部まで及ぶものと胴部最大幅部から上位をナデ消しているものがある。さらには、胴部最大径部分で明瞭に屈曲し複線状を呈するものと、緩やかな曲線で頸部に至るものがある。一方、福山町税町1号のように胴部最大幅部に凸唇を有するものがある。これらは形態変化を組列することは可能であるが、各属性に明確な連続性がみられず、個体数から非常に複雑な分類となるために今回は細分を行っていないが、9世紀の中での位置づけが可能である。

以上、3類は大多数が9世紀段階に使用され、10世紀以降に激減することが指摘できる。

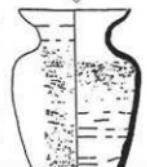
#### 4類

4A類は須恵器の蓋で知覧町小坂ノ上、大口市萩原、加治木町岩原がある。

肩部に最大幅を持ち、底部は尖底



弓削ヶ丘1号 (隼人町)



下り山1号窯 (熊本県)

第5図 3類型式組列(S=1/8)

気味の丸底を呈する。口縁部は後2者が打ち欠きのために明らかではないが、小坂ノ上からは直線的で短い口縁部が指摘できる。整理方法は全て胴部外面にはタクキ、内面は胴部最大径から下位で同心円の当具痕を認める。一方、内面の胴部最大径から上位では回転ナデを施す。小坂ノ上、萩原では外面の肩部から上位で丁寧な回転ナデ、岩原では外面下位と同様に外面上位もタクキを施す。ただ、肩部上位のタクキは下位とは明確にタクキの方位や法則が異なり、3例に上位と下位で明確に成形方法の違いが認められる。共伴遺物が無く、時期的な位置付けは困難であるが、同様の事例は1B類でもみられる事から、9世紀前半を想定したい。なお、内面で同心円の当具を底部まで用いることは、県内の大多数の須恵器壺では内面上位に同心円の当具、下位に平行タクキであることとは大きな違いである。こうした他の日常容器と製作方法が異なる要因として、まず小器であることが指摘でき、次に専用棺として製作したことが考えられるが、口縁部を打ち欠くことから専用棺として限定することは矛盾が生じる。なお、内面に同心円当具のみを残す数少ない類例として滋賀國分寺の北斎地地区出土須恵器がある。

4B類は鹿児島市谷山弓場城跡の1例である。発掘調査で出土し、藏骨器蓋の高台付属の他、土師器坏2点、刀子が共伴する。土師器坏は3期に位置付けられる。藏骨器の形態は4A類でみられたような肩部の張りもなく、底部も丸底を呈している。

以上、4類は9世紀～10世紀前半に位置づけられる。

#### 5類

5類は土師器壺で藏骨器以外でも普遍的に出土することから転用棺として評価できる。

5A類は川内市屋形原、菱刈町大迫、同九岡である。

大迫は胴部外面上位に回転の横ハケを認める。共伴遺物には蓋に使用された可能性のある土師器坏、土師器小型壺4点、土師器坏4点、人形土製品がある。土師器小型壺は2B類で、土師器坏の時期は2期に該当する。なお、土師器坏には「盈」の墨書きが全体外側に正位で書かれていた。

丸岡も大迫と同様に胴部外面上位に回転の横ハケを施す。一方、屋形原は胴部外面上位に縱ハケが施され、前2者とは異なる。こうした調整方法の違いは、そのまま日常容器である土師器壺の地域性と共通している。

5B類は鹿児島市黒崎学校、加治木町出田がある。

黒崎学校は、土師器壺と土師器坏を共伴する。土師器壺は足高の高台を持ち、土師器坏は充実高台である。時期的には3期～4期を想定する。藏骨器は蓋裡が厚く、口縁部が短い。曲田は藏骨器のみで、胴部外面上位に回転のナデを施し、下位には押さえが顕著である。

以上のことから5類は、9世紀～10世紀中頃に転用棺として使用されたことが指摘できる。

#### 6類

隼人町弓削ヶ丘2号、鳥居段2号でみられる。藏骨器に伴う遺物は確認できず、共伴關係からの時期決定は不可能である。藏骨器以外の一般遺跡からは、川内市嚴治屋馬場遺跡に

類例が3点存在し、5期に位置付けられることから、6類は10世紀中頃～後半を想定する。また、集落遺跡からの出土であることや口縁部を打ち欠いていることからは当型式が転用棺であるといえる。

#### (その他)

資料が少數のため類型化しなかったものについて、個別に時期的な位置づけをおこないたい。

水ヶ迫は昭和8年横穴から発見され、人骨や棺蓋の記載はないが藏骨器と判断している。器種は須恵器の長颈壺で、口縁部を打ち欠いている。長颈壺を用いた藏骨器としては福岡県宮ノ本8号墓があり、8世紀代が想定される。

財部町十文字黒田では、土師器壺と土師器蓋がセットで認められ、蓋は1期に位置付けられる。壺は口縁部が直線的で短く、藏骨器の専用棺である短颈壺と類似するが、底部が丸底で土師器壺の特徴を持つ。調査は胴部外面の上位に横ハケ、下位に不整方向のハケ、内面にはケズリがあり、これらは土師器壺の製作方法であり、土師器製作集団が藏骨器の専用棺として製作したものと考えられる。なお、同様の器形が造詣や他の藏骨器に無いことから、オーダーメイド製作が想定される。時期的には8世紀後半～9世紀前半が指摘できる。

菱刈町荒瀬(船津田)は肩部に凸帯をもつ長颈壺で、日常容器の口縁部を打ち欠いている。熊本県阿高、同古墳遺跡等に類例が認められ、9世紀前半が想定される。

菱刈町荒瀬は底部に焼成前に穿孔し、胴部外面上位は回転横ハケ、内面にはケズリを施す土師器壺の製作技法と類似する。回転横ハケを顕著に残す土師器壺との類似性から、9世紀を想定する。

大口市斧持1号は軽石製の容器に直接人骨を納めていた。外容器ではなく、骨盤として合1の容器を使用するのは時期的に後出することが指摘されており、判断材料は乏しいが、9世紀以降を想定できる。

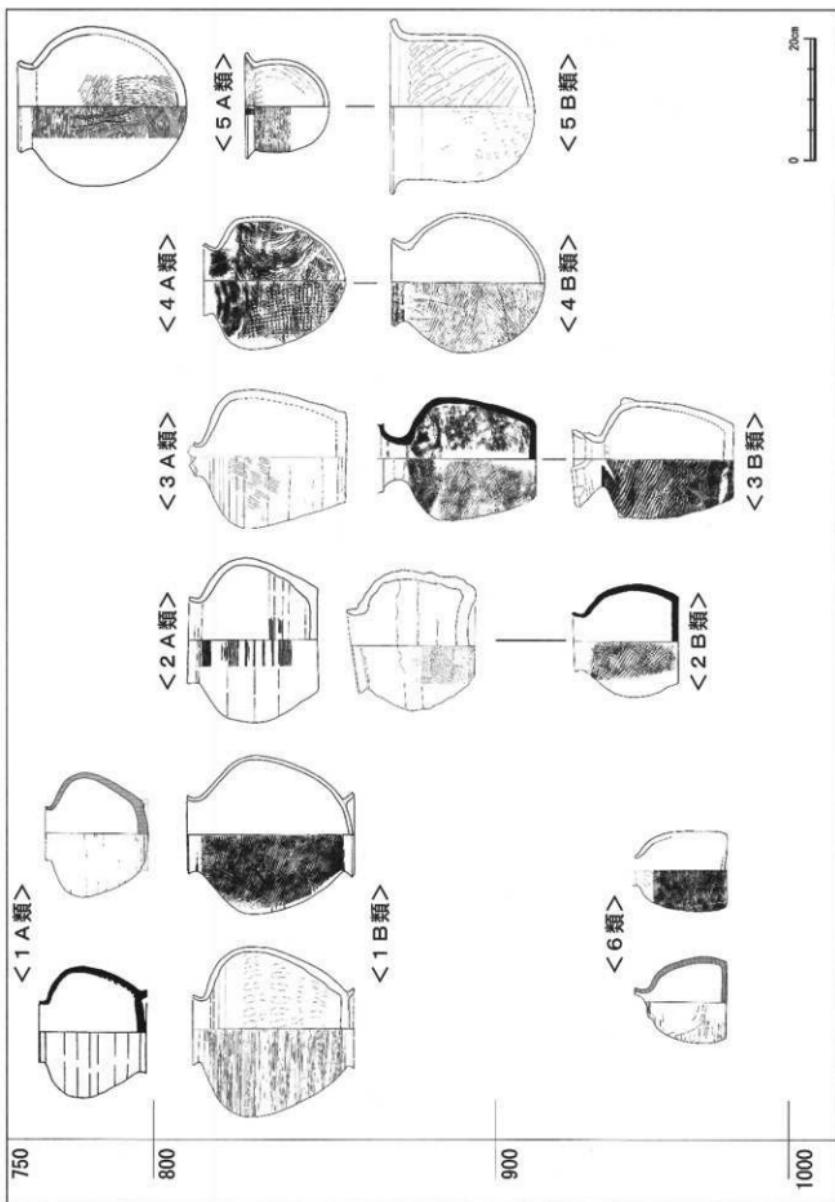
末吉町猿ヶ追は底部が紹介し、官原某氏が発見した須恵器壺で、尖底に近い丸底である。表面は格子状のタクキを施した、全体にややいびつな形態である。

以上、各器式ごとの時期的な位置づけを試みた。上記の検討をもとに作成した年表図が第6図である。

#### 4. 本遺跡藏骨器の歴史的位置づけ

本遺跡藏骨器は上述したように時期的には9世紀中頃から後半に位置付けられ、2A類の専用棺である。こうした特徴は県内の藏骨器の中で時期的、地域的にどのように評価できるであろうか。以下では、藏骨器使用土器の変遷を中心に専用棺と転用棺という視点と分布地図を中心にしながら検討していく。

県内の藏骨器は8世紀中頃～後半より確認できる。型式は専用棺が主体(1A類)であるが、既に水ヶ迫横穴では転用棺がみられる。地域的には金峰町、川内市、大隅町、高山町と数は少ないが広域に存在する。判断は避けるが、万之瀬川、川内川、肝属川、島津駅～大隅国府等それぞれの交通ルート



第6圖 菩骨器層年圖

と関わる可能性がある。

続く9世紀は、藏骨器の増加と共に転用棺を主体として展開し、出土地域は大きく広がる。専用棺は前半段階では1類が多いが、全体的には2類が主体となる。2類は高台を消滅させている点が1類との最も大きな変化であるが、口縁部が複く、平底を保つ点では1類以来の伝統を踏襲している。高台の消滅は転用棺に使用されている須恵器二重口縁蓋(3類)や土師器、須恵器の食膳具など日常容器でも普及し、高台は黑色土器の椀・皿類の一部に限定している。つまり、2類では器種全体から高台を省略・消滅させていったことが指摘できる。同様な指摘は蓋でも可能で、8世紀段階の藏骨器の蓋は藏骨器の専用の蓋であった。蓋内では上橋ノ丘で転用蓋の事例が知られるが、主流は専用蓋と言える。ところが、続く9世紀以降は輕石製蓋を除いて専用の蓋は消滅する。この専用蓋が消滅する原因として、食膳具を皮切りに器種全体に及んだと想定される。即ち、藏骨器の変化は土器様相の変化と密接に関わり、その中で柔軟に変化したのであろう。

一方、転用棺は3類を中心に展開し、転用棺の9割近くで口縁部が打欠かれる。この行為は、器としての機能を消滅させる精神的な意図と蓋との接着度を高める機能的な意団が推測される。当然、両意図を兼ねたことも想定されるが、加世田市杉本寺のように口縁部の一部を打ち欠く事例からは、機能性より精神的な意団が強く想起される。なお、このことは4類の事例からも補強できる。

以上9世紀段階は、専用棺は2類、転用棺は3類を中心として展開しているが、次に両者の分布地域を確認する。

2類は大口市4基、菱刈町2基、財部町1基、金峰町1基、知覧町1基を確認できる。これを古代郡都で表すと菱刈郡を中心に諸県郡、阿多郡、頭塙郡となる。前段階とした1類は川内市と高山町があり、分布範囲は若干広がるが中心地域は2類と重なり、国府周辺を附加した地域となる。このことは、専用棺は菱刈郡を中心に、諸県郡、桑原郡、阿多郡に分布したと解釈可能である。



第7図 2類の分布

3類は川内市、知覧町、吹上町、金峰町、吉田町、福山町、木古町、輝北町、楓占町、大根占町に各1基ずつ広域に分布し地域的な偏在は認められない。一方、専用棺の分布の多かった菱刈郡内は希薄となり、転用棺と専用棺の分布域に違いが生じている。

この分布の違いの背景として、隼人町の国府周辺では大隅国司との関わりが想定でき、被葬者は、中央との関わりの深い郷司及びその一族となる。特に、隼人町には平安時代初期から中世に至る各時期の藏骨器があり、背景に大隅正八幡宮が浮かび上がる。

菱刈・諸県郡は從米交通路の要所「大水駅」の候補地とされてきた。また、両地域は土師器窯の外面上位に回転横ハケを施す特徴を共有し、横ハケを主とする他とは対照する特異な地域である。この横ハケ主体の土師器窯は宮崎県に広く分布することから、日向との関わりの強い地域として評価でき、両地域は他国と隣接する交通の要所としての性格が浮かび上がる。

本遺跡と近い位置に高築遺跡があり、「牧や古代官道」の公的な施設の遺跡と判断したが、こうした施設やそれらに関わる交通の要所に配備された官人層の墓として、藏骨器に納められた被葬者像が浮かび上がる。

高島炎之は牧の土地開拓に関わる地域では、様々な生活活動、流通の起業を指摘している。須恵器生産もその生産活動の一つで、菱刈郡内では岡野窯跡が知られている。諸県郡では出土須恵器の製作技法から、近隣に須恵器窯の存在を予測した。両地域に須恵器窯が存在したら、専用棺のオーダーメイド発注は容易であったはずである。つまり、本遺跡藏骨器の被葬者は専用棺の発注が可能であり、須恵器生産工人集団との関係を維持できる要素を備えた人物と思われる。

##### 5. 本遺跡藏骨器の形態について

今回実見した藏骨器の多くは丁寧な作りであり、本例と大口市原山の藏骨器は例外的であることが判明した。本遺



第8図 3類の分布

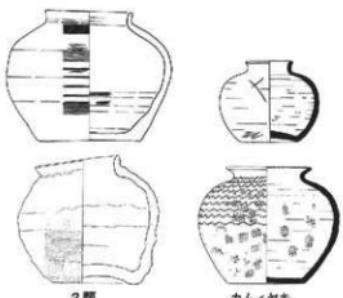
跡山上蔵骨器は器壁が厚く、内外面に粘土帶接合痕を明瞭に残し、総じていびつな仕上がりで、一見して蔵骨器に使用するため故意に非実用品として製作された印象を受ける。原田は胴部の器壁が安定せず器面の凹凸が目立ち、底部も凹凸が顕著な粗雑な作りで、また、土器の色調が赤色に発色している点も共通する。口縁部の形態や調整方法は大きく異なるが、両者共に専用釉として製作された可能性は高い。2類に属し、ほぼ同時期が推測される。

同様な意図で製作した類例として、カムイヤキ（頬須恵器）に注目したい。白木原の抽出したカムイヤキの特徴のうち、本遺跡との共通点として①やや粗い胎土を用いる②叩き締めの後に擦摩で形を整える③赤焼きである④内壁は日常容器の配慮が成されない。また、形態は2類に非常に近く（筆者の指摘）、⑤底部はやや上底気味である。特に、⑥現在の集落から離れた少し高い所で発見されることが多く、⑦葬送に関わるものも多い等の指摘ができる。このように、本蔵骨器とカムイヤキは類似点が多い一方、①カムイヤキの特徴である面部外の波状文は施されず②カムイヤキ口縁部は外反気味で長く③口縁部外面を強くナタで面を形成する等の相違もある。ただ2類は上野の集成に困ると南九州に多く分布し、本県では12例と他地域に比べて多い。このことから、カムイヤキの成立以前に南九州に形態的な粗雑が存在したことは注目できる。本遺跡と原田の蔵骨器が9世紀～10世紀であるのに対し、カムイヤキは11世紀～12世紀以降と明らかな段差はあるが、両者の型式学的な検討を行なう価値はある。ちなみに、両者と関わる資料として熊本県り下山1号窯出土須恵器がある。蔵骨器では2類と3類があり、カムイヤキとでは蓋の類似性、窓構造の類似は新東が指摘している。

## 6. 本蔵骨器の副葬品について

蔵骨器の副葬品は本遺跡では、土師器壺2点と須恵器蓋の小片数点が出土している。壺は隣接するが合口ではなく、須恵器小片と埋葬外遺物との接合関係は存在しない。

課題は、発掘調査に基づく資料が少ないことである。そこで、発掘調査等で出土状況の明らかなものに関しては副葬品の有無に関わらず取上げることとし、それ以外は副葬品の認められるものを取上げる。対象事例は14例である。



第9図 2類とカムイヤキ（頬須恵器）(S=1/8)

副葬品の時期毎推移については、8世紀とする越ノ峠では副葬品を伴わず、副葬品を伴う他の9世紀に属すことから、時期毎の推移については検証できないため、地域毎の概観を試みる。

菱刈郡内では人形土製品と馬形土製品が、知覧町小坂ノ上、金峰町白樺野では鉄滓と縁の羽口等の鍛冶関連遺物が知られる。前者の土製品に関して新東は中九州～南九州の一地域に限られる特質とし、火葬墓の副葬品と荒神祭祀の両者の目的を想定した。後者に関しては上田はガラス化した鉄滓が不朽であることから常世の願望意図を、宮下貴浩氏は鍛冶技術に関わる人物を想定している。一方、川内市の越ノ峠、屋形原、都原の3例全てで副葬品を持たず、この地域固有の特質であるか注目したい。

土師器壺の副葬品は鹿児島市谷山弓場城跡、鹿児島市雲学校、吉田町牧、金峰町白樺野、菱刈町大迫、財部城ヶ尾遺跡の6ヶ所で確認され、広域の分布が指摘できる。土師器壺で注目すべきは①多くに墨書き土器が使用され、②合口或いは対の状態で出土している例が多いことである。①に関しては6遺跡中4遺跡で確認でき、谷山弓場城跡では蓋を含めた3点全てに「大吉」、牧遺跡では蓋を含めた13点中1点に「秋」、7点に「大」。白樺野では4点全てに「山」。大迫では蓋を含めた5点中3点に「盈」が墨書きされている。新東は大迫の「盈」字墨書き土器に関して「皿に物を多く容れみつる義」と解し、3体の文字の書体がそれぞれ異なることから別人によって書記されたと指摘した。白樺野の「山」字墨書き土器を検討した宮下は集団の標識的意味としての意味合いが強く、葬送儀礼のなかで埋葬の目的で準備され使用されたと解釈した。本遺跡の土師器壺2点と蔵骨器蓋である土師器碗1点では墨書きは確認できなかったが、かつて墨書きのあった可能性は十分にある。②に関して、白樺野では蓋板の4隅に土師器壺を配置させており、宮下は結果的な意図を指摘している。雲学校と本遺跡では土師器食膳具が対になっており合口の可能性もある。大迫では土師器壺が7個と土師器蓋が4個あり、杯を蓋に1点、蓋との合口に4点、杯の合口の対で2点とする全てが対の配置であった可能性も想定できる。谷山弓場城跡と牧では合口が確認されている。

このように県内出土の蔵骨器に伴う土師器食膳具は6遺跡全てで土師器壺が対になっており、その内2遺跡では合口の出土状況が確認され、多くで合口として使用した可能性を指摘できる。

ところで、鹿児島市横井竹ノ山遺跡では土師器碗2個が合口で埋納されていた。土師器碗のみという点が蔵骨器とは異なるが、合口であること、胴部外面に墨書きがみられることは蔵骨器に伴う土師器食膳具と共通している。永山修一氏は、この土師器壺の一方で五芒星の墨書きがあることから陰陽道との関わりがあることとし、種類の目的として除災招福あるいは道・境に関わる可能性を指定している（永山 2004）。

以上、土師器壺が県内の広い地域で副葬されていることが明らかとなり、その埋納方法は墨書きした土師器食膳具を合口とすることが多いことを指摘できた。

今回の集成作業で小片の須恵器壺の類例は、確認できなかった。したがって、特異な事例かどうかは今後の調査に期待するが、知覧町小坂ノ上で藏骨器内から標。小石が8個出土していることが報じられている。

## 7. 本遺跡藏骨器とその周辺地域

本遺跡での検討と近隣地域の遺跡を対象として検討を行なう。周辺遺跡から本遺跡藏骨器の位置付けを試みる。

本遺跡では古代の遺構として掘立柱建物跡が検出され、近世ごろの開発によって、既に削平された部分があるものの、おおよその集落域が指摘できる。ここでは、集落と墓との関わりが問題となる。集落城出土の土師器食勝具は平底中心で、体部外縁の回転ナデは丁寧で器壁も薄い。また、土師器壺の多くは、ナデもしくは疊らな縦ハケを施す器壁の厚いものが主体である。これらの特徴は、高麗編年2期の新しい段階に帰属することとなり、集落城は9世紀中頃～後半と想定できる。

したがって、本遺跡の藏骨器と集落はほぼ同時期に展開したと考えられる。

火葬墓が仏教文化に起因したであろうことは、多くが指摘してきた。積極的な根拠は示さないが遺跡からは、「仏」とヘラで刻まれた須恵器が出上している。次が、底部外縁の「桑原」墨書き土器の存在である。この墨書き土器の内面は底部屈曲部に明瞭に炭化物が付着し、灯明行為が確認される。このような例は、小倉畠遺跡で既に指摘されており、灯明に用いた食器其が個体と、仏器様の土師器壺は香炉と報告される。このように、本遺跡の「仏」刻書き及び「桑原」墨書き土器が仏教と関り、ひいては藏骨器へ繋がる推測も可能であろう。

本遺跡と山頂を境に對峙する扇場遺跡からは、掘立柱建物の柱配置や出土遺物から仏教的施設と判断したテラス状遺構が発見されている。時期的には扇場遺跡テラス状遺構の方が若干後出すると思われるが、仏教文化を仲立ちにした密接な関わりを推測する余地は残されていよう。

## <付記>

1 従来、県内の古代藏骨器として指摘されてきた隼人町住例川は、その形態が石塔形であることから、時期的に11世紀以降である可能性が高く、今回の集成では取上げなかった。

2 横川町木浦現はこれまで藏骨器としての記述は認められなかったが、輕石製の栓を伴い藏骨器の可能性を有することから今回の集成において取上げた。

3 資料不足等により集成に取上げなかったものとして以下がある。

①姶良都吉松町ふ山(永山か?) 須恵器出土(済谷忠章・上野精志1984「九州」「新版仏教考古学講座 第7巻 墳墓」に記載)

②大隅町中の内北部落おろのうしろ 須恵器瓶子形(上野精志1978「九州総貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX」に記載)

③喜入町(河口貞徳氏教示 「末吉町郷土誌」1957に記載) 「喜入町郷土史」(1968年)に一児鬼ヶ久保遺跡から完形「齊龕」が出土しているとの記述がある。おそらく、これを指していると思われるが、資料は行方不明であるといふ。

④剣北町郷土史(1966)に写真掲載されている谷田脇田静、岡田千代志両氏の所蔵とされる須恵器壺、瓶が形態から藏骨器の可能性が高い。

⑤加世田市加治屋遺跡、美刈町山下遺跡・池畑耕一、中村耕治1984「大隅半島より出土の藏骨器3例」『鹿児島考古学第18号』で藏骨器として紹介されている。

⑥栗野町山崎B遺跡では土坑内から土師器壺が2点出土している。また、同じ土坑内からは土師器の皿、杯、土製の人物形、棒状品が出土しており、火葬墓である可能性が高い。(鹿児島県教育委員会1982「山崎B遺跡」)

(引用・参考文献)

網田龍生1997「肥後における古代後半期の墳墓」「先史学・考古学論究」II 龍田考古会

池畑耕一、中村耕治1984「大隅半島より出土の藏骨器3例」『鹿児島考古』第18号 鹿児島県考古学会

池畑耕一1980「加治屋遺跡」「日本考古学年報」31(1978年度版) 日本考古学協会

石部正志1956「大隅半島の骨蔵器」「古代学研究」第15・16号 古代学協会

伊仙町教育委員会1985「カムイヤキ古窯跡群I」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

岩澤和徳、松田朝由 2004「高麗遺跡の特質と歴史的な位置付け」「高麗遺跡」

上田耕2001「石坂上発見の須恵器壺」「ミュージアム知覧紀要」第7号 ミュージアム知覧

上野精志1978「九州総貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX」

小田富士雄1977「豊前地方における須恵器」「天觀寺山窯跡群」

鹿児島県教育委員会1973「鹿児島県遺跡地図」

鹿児島県教育委員会1977「鹿児島県市町村別遺跡地名表」

鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査報告概報」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(25)」鹿児島県教育委員会

鹿児島県教育委員会1984「大隅地区埋蔵文化財分布調査報告概報・昭和58年度」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(29)

鹿児島県埋蔵文化財センター2002「小倉畠遺跡」鹿児島県埋蔵文化財センター報告書(34)

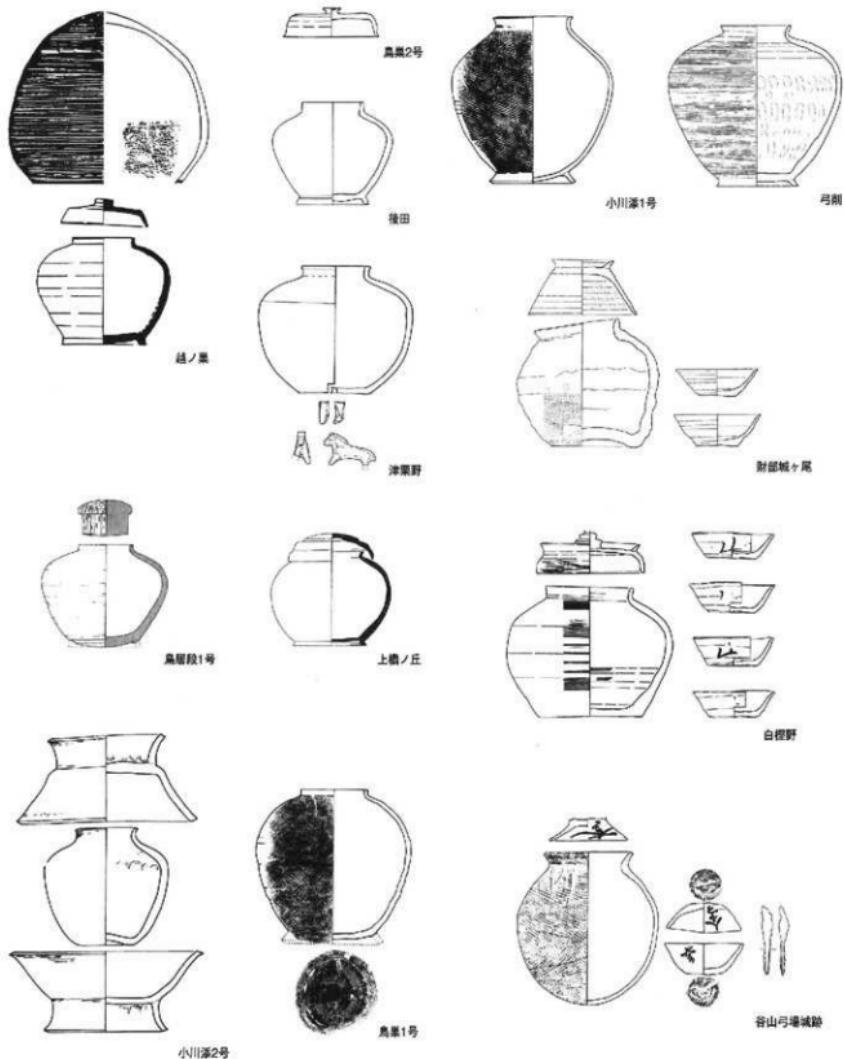
鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「理文だより」

鹿児島市教育委員会1992「谷山弓場城跡」鹿児島市教育委員会発掘調査報告書(11)

上村俊輔1970「飯盛山古墳とその周辺」「九州考古学」39・40 九州考古学会

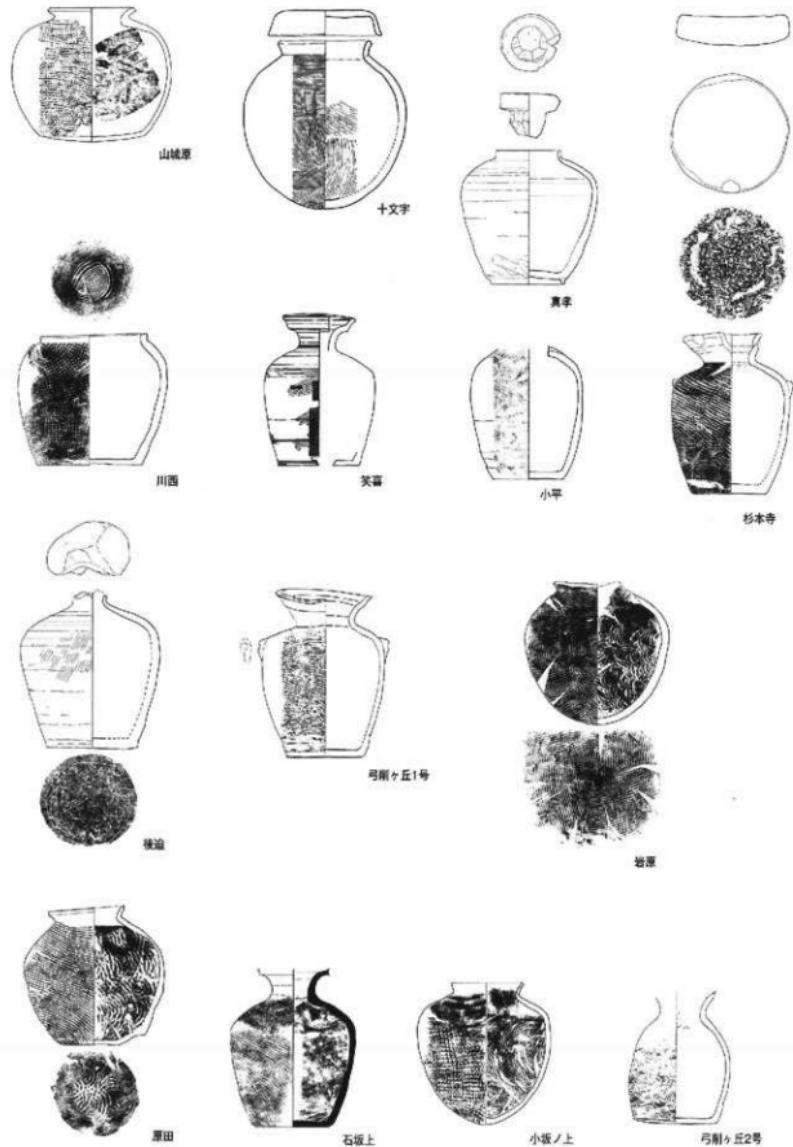
上村俊雄・坪根伸也1985「鹿児島県中岳山麓須恵器古窯群に関する一考察」「古文化談叢」第16号 古文化研究会

- 河口貞徳1991「大昔の吉田・吉田町の遺跡」「吉田町郷土史」吉田町郷土誌編纂委員会
- 河野治雄1985「指宿市の歴史 先史時代」「指宿市誌」
- 河野治雄1984「大口市西太良の山之城原石塔群調査概要」付記「大口市山城原と吾平町川北出土の藏骨器」「南九州の石塔」5号 南九州石塔研究会
- 鶴田静磨1966「輝北町郷土史」
- 黒崎市1980「近畿における八・九世紀の墳墓」「研究論集」VI 奈良国立文化財研究所学報 第38冊
- 小片丘彦1988「川内市御陵下町越ノ巣遺跡出土の火葬骨」「川内市歴史資料館年報 昭和62年度」
- 小片丘彦・惟1992「弓場城跡出土の藏骨器内の火葬骨について」「谷山弓場城跡」
- 新東晃一、牛ノ演修、長野眞一1976「川内市高城町屋形原発見の藏骨器」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)」鹿児島県教育委員会
- 高木秀吉1957「末吉郷土史」
- 高木秀吉1958「山川町誌」
- 寺師見国、三島格1960「薩摩大口伊佐郡における藏骨器」「九州考古学」9 九州考古学会
- 寺師見国、三島格1960「鐵及びタカラガイ圓筒の藏骨器について」「人類学研究」7-1・7-2「貝をめぐる考古学」1977に再録
- 重森重二、東才二1953「吉山村先史時代遺跡について」「鹿児島県考古学会紀要」第3号
- 渢谷忠章、上野精志1975「九州」「新版佛教考古学講座」7 白木原和美「類須恵器集成」1973「南日本文化」6 (「南西諸島の先史時代 白木原和美著開闢論文選」龍田考古会1999に再録)
- 新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化」2号 隼人文化研究会
- 新東晃一1977「國分平野の遺跡」「隼人文化」3号 隼人文化研究会
- 新東晃一1981「古墳時代以降の遺跡」「大口市郷土誌」
- 川内市歴史資料館1988「鹿児島県内藏骨器出土地名表」「川内市歴史資料館年報 昭和62年度」
- 高島英之1996「牧と古代の土地開発」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
- 中島哲郎、長谷川順一1987「越ノ巣火葬墓の意義 付・鹿児島県内藏骨器出土地名表」「川内市歴史資料館年報 昭和62年度」
- 中園聰、中村直子1987「鹿児島県弓削丘出土の須恵器壺について」「鹿児島大学考古学会会報』第5号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 永山修一2000「古代の山川」「山川町史」(増補版)
- 永山修一2004「鹿児島市横井竹ノ山遺跡出土の墨書き土器について」「横井竹ノ山遺跡」
- 中山光大・上田耕1995「小坂ノ上遺跡出土の古代の藏骨器と埋納鉄溶について」「ミュージアム知覧紀要』第1号 ミュージアム知覧
- 平田信芳、新東晃一1976「曾於郡大隅町鳥居段発見の藏骨器」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)」鹿児島県教育委員会
- 隼人町立歴史民俗資料館1992「年報」第2号 平成3年度版
- 隼人町立歴史民俗資料館1994「年報」第4号 平成5年度版
- 斐刈町教育委員会1985「山下遺跡」伊佐郡斐刈町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 吹上町教育委員会1966「吹上町郷土史」上巻 吹上町教育委員会
- 藤森栄一1941「奈良時代の火葬骨壺 - 藏骨器の形態学的研究」「古代文化」12号 古代学協会
- 松下孝幸1984「鹿児島県大隅半島出土の火葬骨」「鹿児島考古」第18号 鹿児島県考古学会
- 松田朝由2004「土器の製作技術と土器様相」「高森遺跡」
- 官下貴浩1999「金峰町白樺野遺跡の古代火葬塚の紹介」「第11回人類史研究会発表要旨」 人類史研究会
- 官下貴浩2001「白樺野古代火葬墓と製鉄遺物」「鹿児島考古」第34号 鹿児島県考古学会
- 本村秀雄1990「古代」「大隅町誌」(改訂版) 大隅町誌編纂委員会
- 黎明館編1990「仏教文化の伝来」「鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 横川町郷土誌編纂委員会編1991「横川町郷土誌」
- 吉松町教育委員会1995「吉松郷土誌」

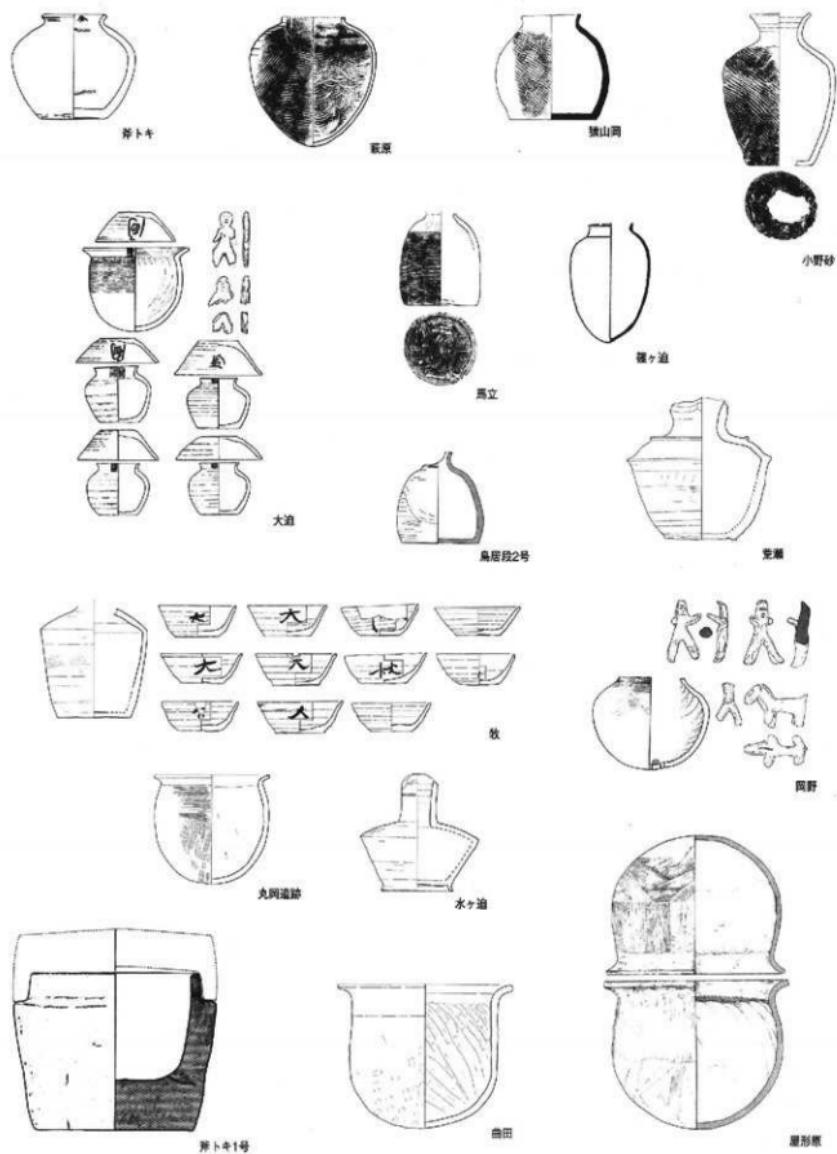


第11図 県内の藏骨器 (1)

0 20cm



第12図 県内の藏骨器 (2)



第13図 県内の藏骨器 (3)

第2表 鹿児島県の須恵器製骨器集成

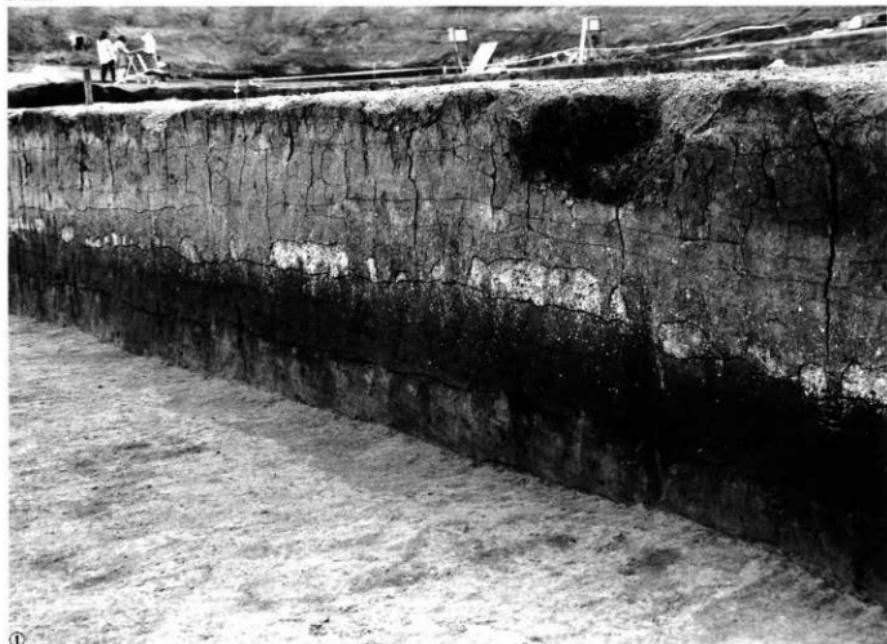
番号	遺跡名	所在地	備考	文献
1	水場	鹿占町水場	須恵器類(II-1)・轆轤	春明謙編1990「仏教文化の伝来」
2	矢張	大隅市伊布利村矢張	須恵器類(Ⅲ-1)・鋸形土器(中古部)	鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分野調査報告書」
3	鹿敷寺1号(碁ヶ浦)	東吉田町之字原寺	須恵器類(IV-1)・轆轤	石部正志1966「大隅島の古墳墓」[古代学研究15・16]
4	荒免兔	東吉田町之字原寺	須恵器類(不明)・人骨・人形	島太秀吉1957「佐古土器」
5	小字	東吉田町之字原寺	鏡(II-1)・人骨	石部正志1956「大隅半島の古墳群」[古代学研究15・16]
6	栗田B	財部町大字栗田黑田	土師器類(その他)・环(ヘラ起こし)・人骨	鹿部第一・牛田勝彦1984「大隅半島から出土の須恵器3例」[鹿児島考古第18号]
7	財部城ヶ尾	財部町大字栗田	鏡(II-1)・土師器類	本報告
8	稻谷1号	福山町稻子田所	須恵器類(II-1)・鏡(に一穿の突起と2つ穴あり)	春明謙編1990「仏教文化の伝来」
9	角松1号	大隅町角松	須恵器類(Ⅰ-1)・轆轤・木炭・砾石重	平田信芳・新東昇-1976「關於都大隅町角松段免史的鎌倉器」[武光寺遺跡]
10	鹿屋城2号	大隅町鹿屋城	鏡(IV-1)・土器形	平田信芳・新東昇-1976「關於都大隅町鹿屋城段免史的鎌倉器」[武光寺遺跡]
11	双子坂	鹿北町御免双子坂	須恵器類(その他)	鶴田勝彦1966「高城町土器」
12	坂道	鹿北町御免	須恵器類(Ⅲ-1)・石製鏡	春明謙編1990「仏教文化の伝来」
13	木ノ瀬横穴	志布志市安底木ノ瀬	須恵器類(頭部その他)	上村茂徳1972「古代より中期の通路」[志布志可吐1号]卷
14	保田	鹿屋市保田	須恵器類(II-1)	上村茂徳1970「船岡古墳・その周辺」[九州考古学39・40]
15	城山山腹	郡分市上小川城山	須恵器類(潜在行方不明)	新東昇-1977「宮分寺の須恵器」[隼人文化2号]
16	赤坂城(別名豊前野城)	郡分市久吉永	鏡(時代未定)	井出典義編1977「鹿児島県市町村別歴史地名表」
17	新工業大学	国分市港水	須恵器(奈良時代)	中島哲郎・高川一郎-1987「越え美津畠の墓蓋 付・鹿児島県内須恵器出土地名表」[川内市歴史資料館編1987年版]
18	弓削丘1号	隼人町弓削	須恵器類(II-2・肩に2つ耳あり)	中島哲郎・中村千洋-1987「鹿児島県隼人町弓削丘出土の須恵器について」[鹿児島大学考古学会会報 第5号]
19	弓削丘2号	隼人町弓削	須恵器類(IV)	中國哲・中村千洋-1987「鹿児島県隼人町弓削丘出土の須恵器について」[鹿児島大学考古学会会報 第5号]
20	真孝	隼人町真孝	須恵器類(II-1)・轆轤・骨器	隼人町立歴史民俗資料館1994「隼人町立歴史民俗資料館年報(第4号) 平成5年度」
21	新城	隼人町小浜新城	須恵器類(II-2)・土師器類・骨器	隼人町立歴史民俗資料館2004「隼人町立歴史民俗資料館年報(第4号) 平成5年度」
22	弓削	詫泊町弓削	埴輪類(II-2)	中島哲郎・長谷川一郎-1987「城ノ森・火葬墓の墓蓋 付・鹿児島県内須恵器出土地名表」[川内市歴史資料館編1987年版]
23	御田	詫泊町西御田	土師器類(IV-2)・後縫・木炭	新東昇-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
24	春泰	詫泊木戸原	須恵器類(V-1)	中島哲郎・高川一郎-1987「城ノ森・火葬墓の墓蓋 付・鹿児島県内須恵器出土地名表」[川内市歴史資料館編1987年版]
25	馬立	溝辺町馬立	須恵器類(V)	隼人町立歴史民俗資料館1994「隼人町立歴史民俗資料館年報(第4号) 平成5年度」
26	木浦畠	鹿野町木浦畠	須恵器類(不明)・焼骨	新東昇-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
27	板谷寺	吉松町板谷寺	石造塔(付)五重塔入骨入須恵器3出土	吉松町立教育会1980「吉松土器」
28	川路	吉松町川路	須恵器	平田信芳・新東昇-1976「都大隅町高須段免史の須恵器」[武光寺遺跡]
29	木浦樋瀬(木浦ノ木浦)	柳川町木浦ノ木浦	楕円(古墳須恵器と紹介)・絞石・瓦	柳川町立教育会1991「柳川町木浦ノ木浦」
30	小川原1号	鹿児島市小川原	須恵器類(II-1)	新東昇-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
31	小川原2号	鹿児島市小川原	土師器類(高・低台)・2・土師器類(II-1)	新東昇-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
32	黒塚(船津田)	鹿児島市本城黒塚	甲斐器(その他の)・焼骨・孫(毛足)・子育月	吉見晃見・三崎裕1960「羅及びタカガイ副葬の骨器について」[人體研究7-1・7-2]
33	大泊	鹿児島市大泊	土師器類(IV-1)・小壹(4)・壹唐(1)	新東昇-1976「南充における人形・馬形・馬頭・馬頭の須恵器」[古代文化30-2]
34	同町	鹿児島市中	吹抜式土器(六穿穴)・石臼	新東昇-1976「南充における人形・馬形・馬頭の須恵器」[古代文化30-2]
35	豊野	鹿児島市中	須恵器類(II-1)・人形・馬頭・馬足	新東昇-1976「南充における人形・馬形・馬頭の須恵器」[古代文化30-2]
36	豊ノ仲	鹿児島市下山	須恵器類・人形・馬頭・馬足	新東昇-1976「南充における人形・馬形・馬頭の須恵器」[古代文化30-2]
37	大丸	鹿児島市大丸	土師器類(V-1)・筒形骨盒コレクション	本報告
38	井手トキ1号	大口町井手赤トキ	輕石器・免史器人骨入り・石椎	寺田見亮・三崎裕1960「羅及びタカガイ副葬の骨器について」[人體研究7-1・7-2]
39	井手トキ2号	大口町井手赤トキ	須恵器類・II-1・口部内部に重印あり	寺田見亮-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
40	脚附	大口町木戸萩	須恵器類(V-1)	寺田見亮-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
41	河西	大口町木戸萩	須恵器類(II-2)・免史時に人骨あり	寺田見亮・三崎裕1960「羅及びタカガイ副葬の骨器について」[人體研究7-1・7-2]
42	島麻1号	大口町羽島麻(桜井神社)	須恵器類(II-1)・焼骨	新東昇-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
43	島屋2号	大口町羽島麻(桜井神社)	裏見は免史時破壊・蓋(須恵器)のみ残存	新東昇-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
44	白木	大口町羽島白木	蓋に土師器若狭色土器祥	寺田見亮・三崎裕1960「羅及びタカガイ副葬の骨器について」[人體研究7-1・7-2]
45	喜田	大口町喜田	須恵器類(II-1)・成人・伴合の焼骨充満	寺田見亮・三崎裕1960「羅及びタカガイ副葬の骨器について」[人體研究7-1・7-2]
46	山城原	大口町山城原	須恵器類(II-2)	河原治郎1964「大口町山城原の山城原石燈籠(須恵器)」[鹿児島の古跡第5号]
47	岱	吉町岱之浦	須恵器類(II-1)・奉事土師器13点(大)・「秋」・骨片・木炭	黒森重二・東才二1953「吉町岱先史時代遺跡について」[鹿児島考古学会紀要 第3号]
48	小野砂	鹿上町小野砂	須恵器類(II-1)・元持脚大邱足瓦残片	上岸三夫・増田一彦・辻正雄1966「吹上町歴史・上巻」
49	阿多(新山崩・丘ノ丘)	金峰町多新山崩下横	須恵器類(II-1)・环(2)	森義栄-1941「奈良時代の火葬骨灰」[古代文12-3]
50	高野	金峰町高野	須恵器類(II-1)	上村俊輔・坪井信也1985「鹿児島県山鹿山須恵器古窯跡に関する一考察」[古文化論叢]
51	日置原	金峰町白川日置原	土師器類(II-1)・筒と桶付器・骨・靴底・石	上村俊輔2001「白川日置原須恵器の須恵器」[ミニアジム知覧紀要 第7号]
52	和本寺	詫泊町川端和本寺	須恵器類(II-2)・軽石器・人形・灯明皿	鹿児島県教育委員会1971「鹿児島県須恵器地図」
53	大泊	詫泊町川端大泊	須恵器類(II-2)・軽石器・人形・灯明皿	新東昇-1976「南充における人形・馬形・馬頭の須恵器」[古代文化30-2]
54	小坂ノ上	詫泊町下坂小坂ノ上	須恵器類(IV-1)・焼骨	新東昇-1976「隼人における共同作業社会の須恵器について」[隼人文化2号]
55	里山岡	知覧町下郡里山岡	須恵器類(II-2)・焼骨	上村新2001「石臼上須恵器の須恵器」[ミニアジム知覧紀要 第7号]
56	石坂ノ上	知覧町石坂ノ上	須恵器類(II-1)	上村新2001「石臼上須恵器の須恵器」[ミニアジム知覧紀要 第7号]
57	足川	山川町足川	須恵器類・竹筒	河原治郎1965「山川町の歴史」第1章先史時代」[福岡市誌]
58	岳宿	鹿屋市指宿南中	須恵器類(II-1)・須恵器・須恵器蓋	河原治郎1965「指宿町の歴史」第1章先史時代」[福岡市誌]
59	豊麗原	川内市高麗原豊麗原	須恵器類(IV-1)・把手付・土製容器・石	河原治郎1965「川内市高麗原豊麗原の歴史」第1章先史時代」[福岡市誌]
60	嵯ノ瀬	川内市嵯峨原下嵯ノ瀬	須恵器類(II-1)・把手付・土製容器・石	鹿児島市立埋蔵文化財センター2003「理文大より」
61	鹿原	川内市	須恵器類(II-1)	鹿児島市立埋蔵文化財センター2003「理文大より」
62	鹿児島市寄学校	鹿児島市草町前田	土師器類(IV-2)・环・帽	春明謙編1990「仏教文化の伝来」
63	谷山弓削城跡	鹿児島市下藤元町	須恵器類(IV-2)・須恵器蓋(大)・刀子	鹿児島市立寄学校会員1962「谷山弓削城跡」
64	四崎城跡	東市来町	土師器蓋・(筒)	祇園宿番者による

図 版

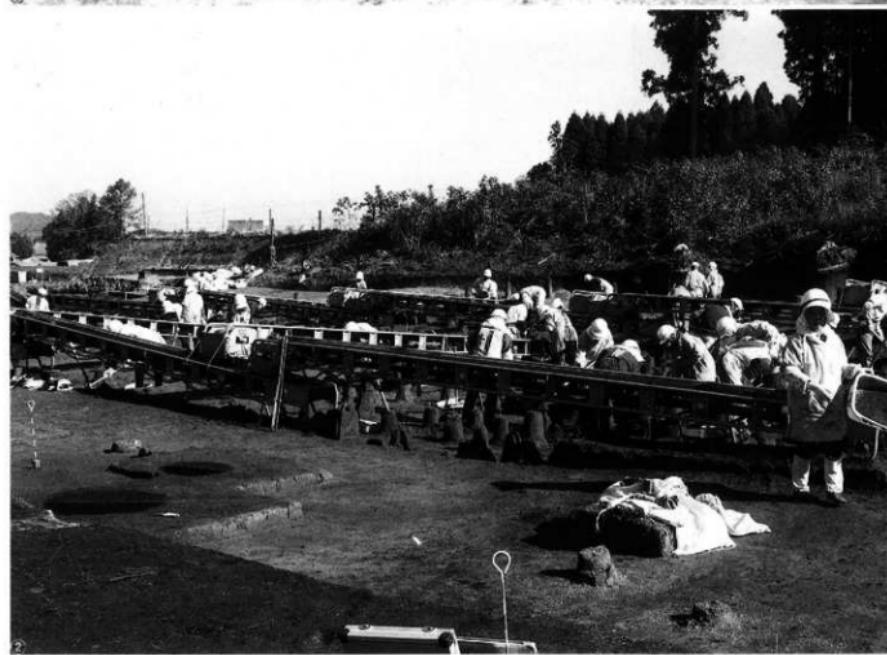


遺跡近景

図版2



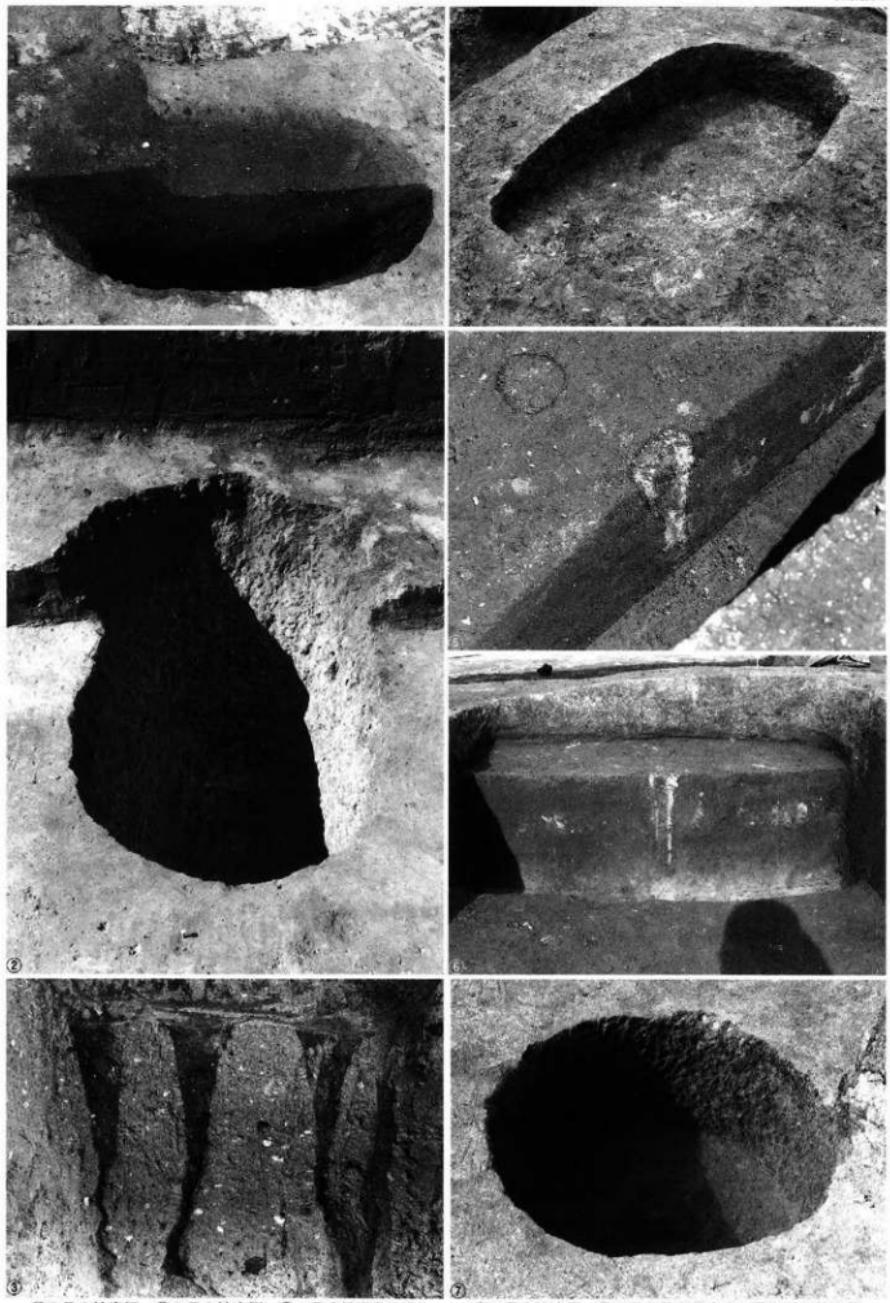
①



②

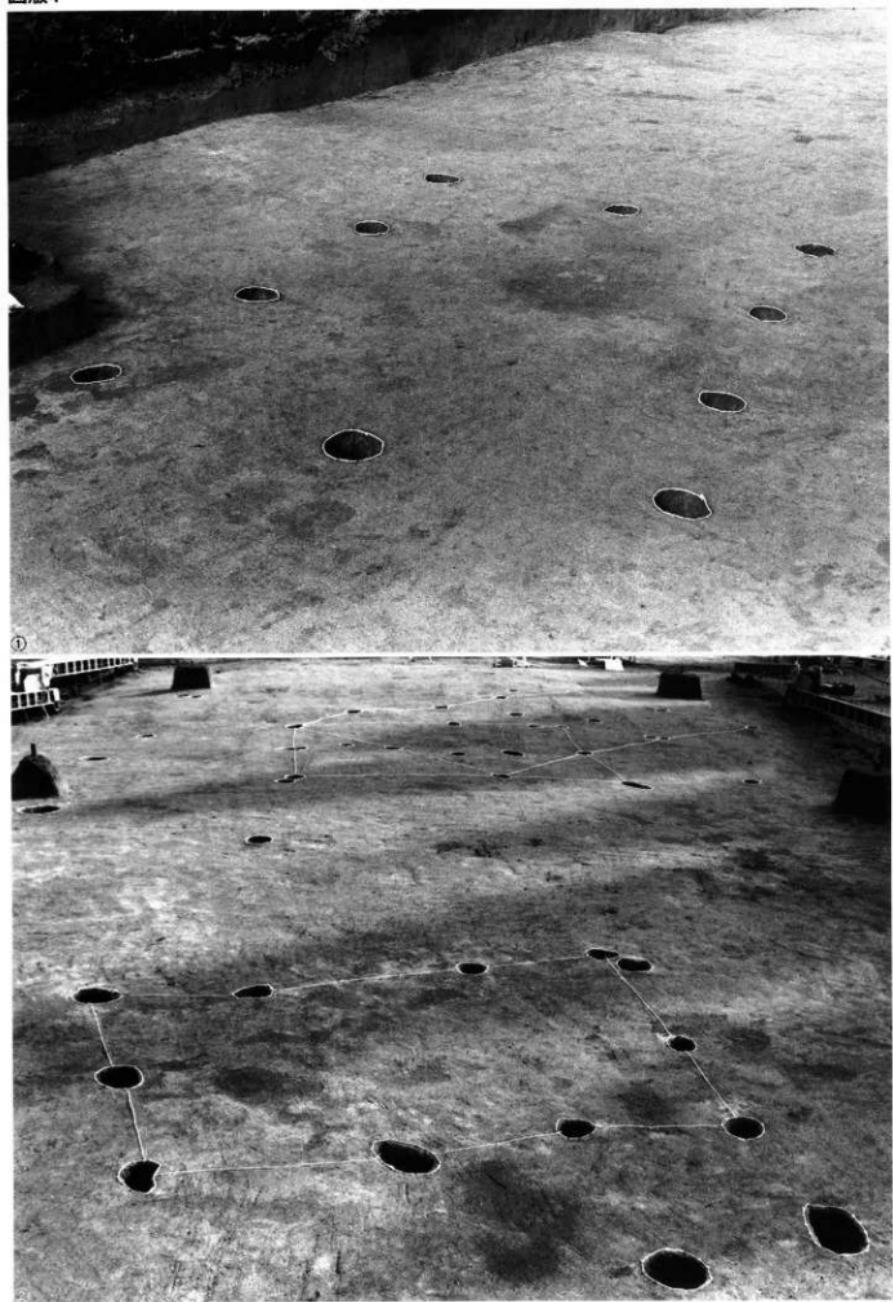
①標準土層（I～XVI層）

②発掘調査風景



① 2号土坑半掘 ② 2号土坑完掘 ③ 2号土坑逆茂木痕  
④ 6号土坑完掘 ⑤ 6号土坑逆茂木痕 ⑥ 6号土坑半裁  
⑦ 4号土坑完掘

図版4

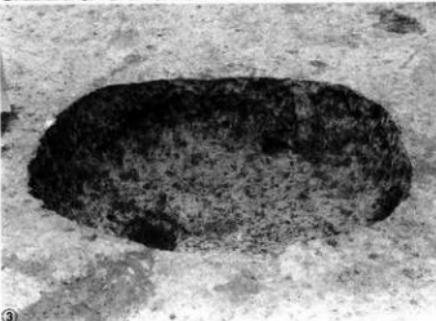


① 1号掘立柱建物跡 ② 2~4号掘立柱建物跡

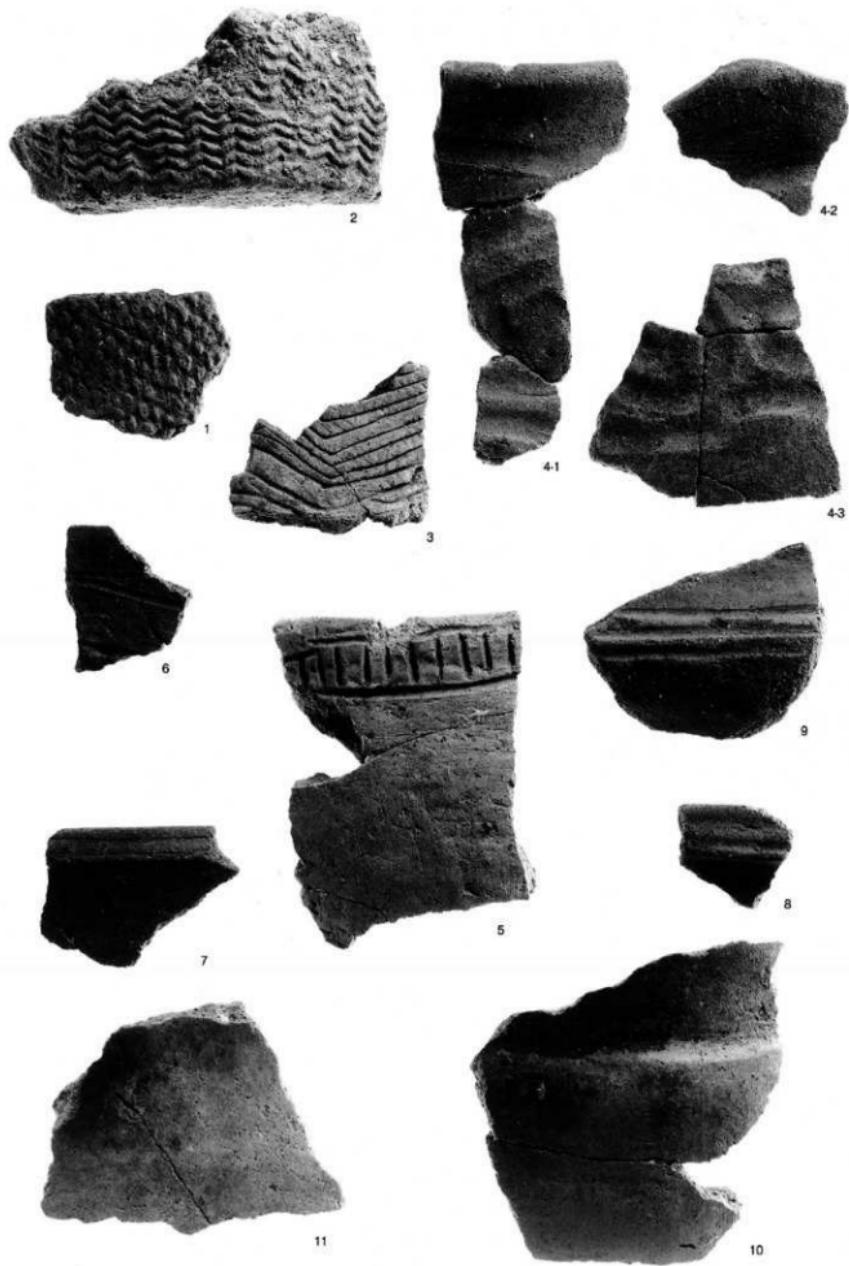


藏骨器埋納遺構

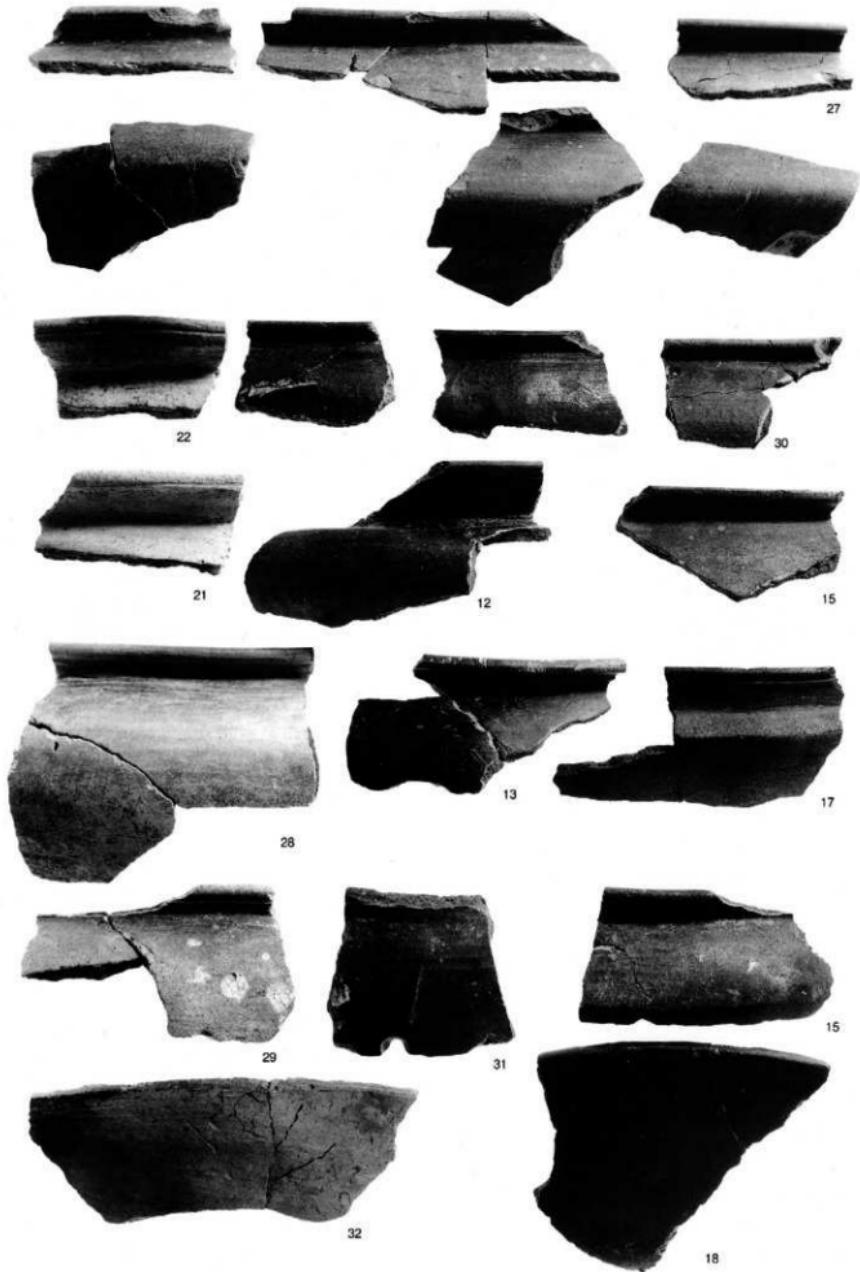
図版6



①E-5区古道路 ②C-2区古道断面 ③8号土坑完掘 ④F-11区古代遺物出土状況



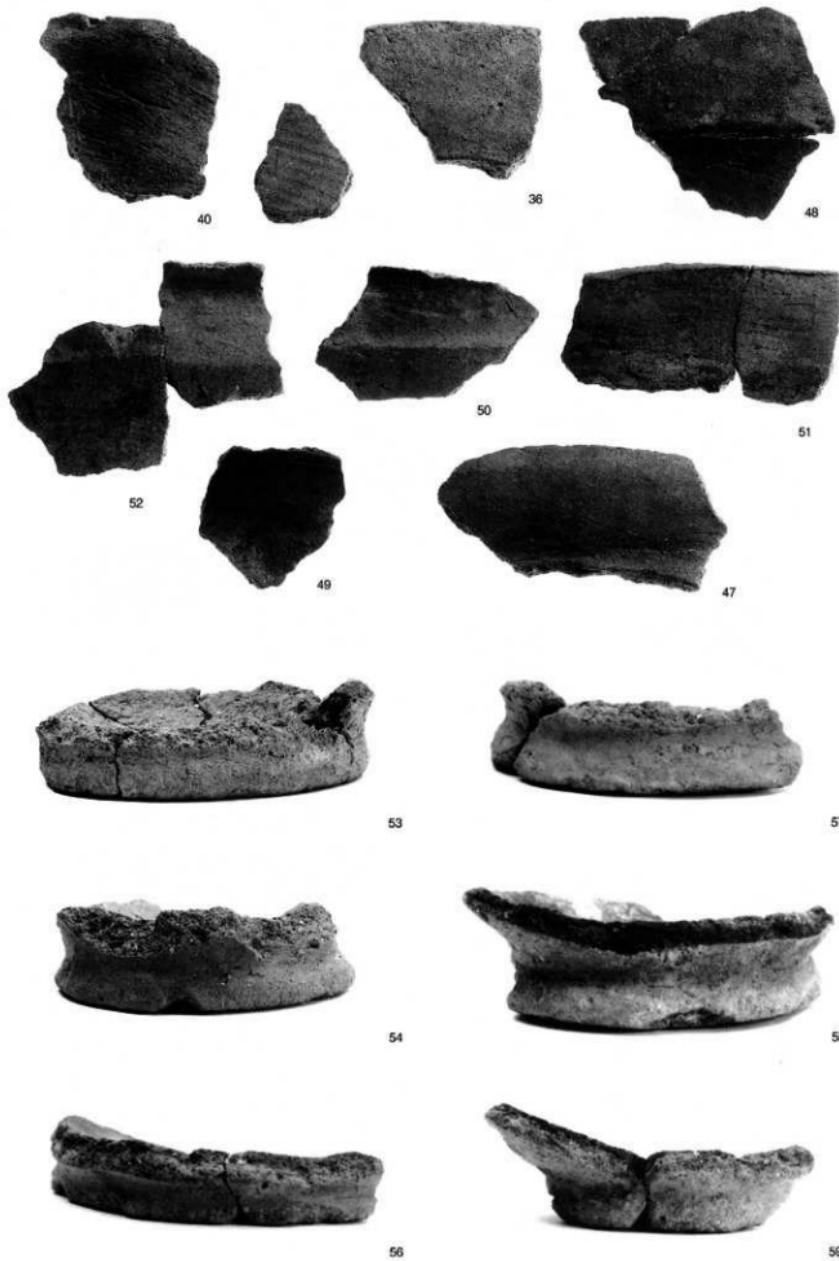
縄文時代 1類～6類土器



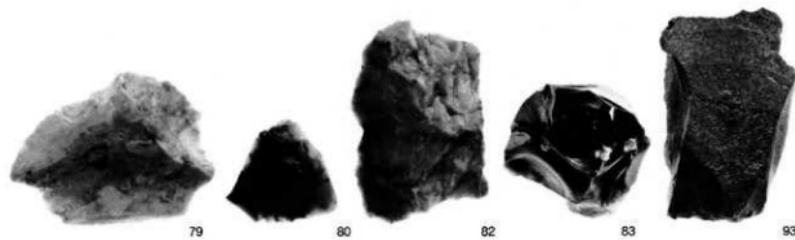
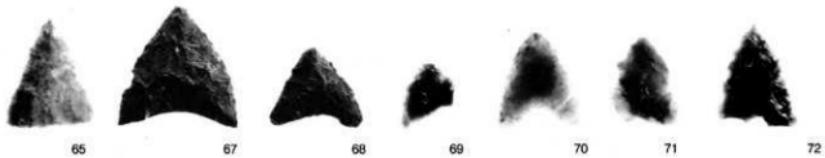
縄文時代 7類土器(1)



縄文時代 7類土器(2)



縄文時代 7類土器(3)と晩期土器底部



縄文時代 石器



古代 火葬墓関連遺物(1)



108



109



107



110



古代 火葬墓関連遺物(2)



古代 土器



4



19



7



22



9



28



30



31



41

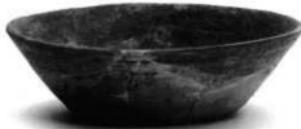


42

土師器坏・杭、赤彩・黑色土器



82



85



83



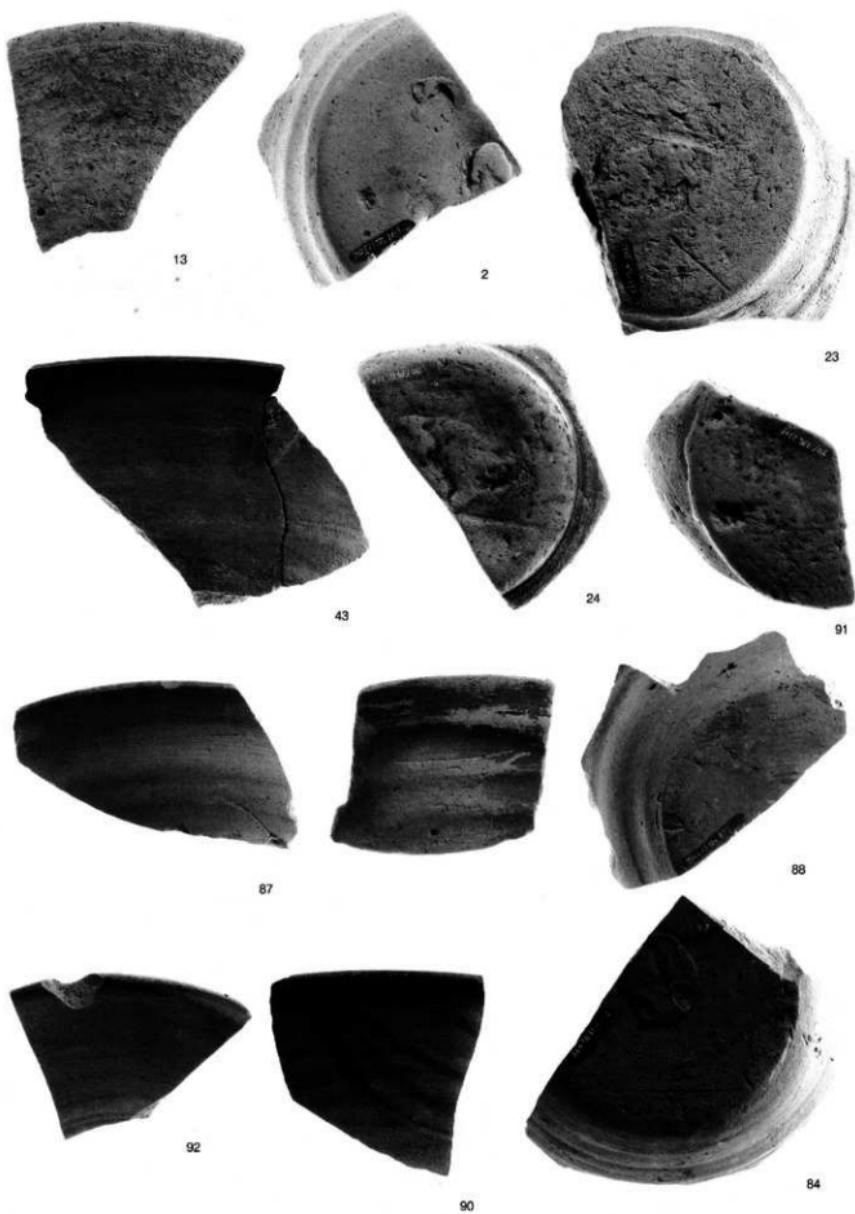
89



93



51



古代土器 底部ヘラ切り, 火棒, 器面調整痕





59



68



75



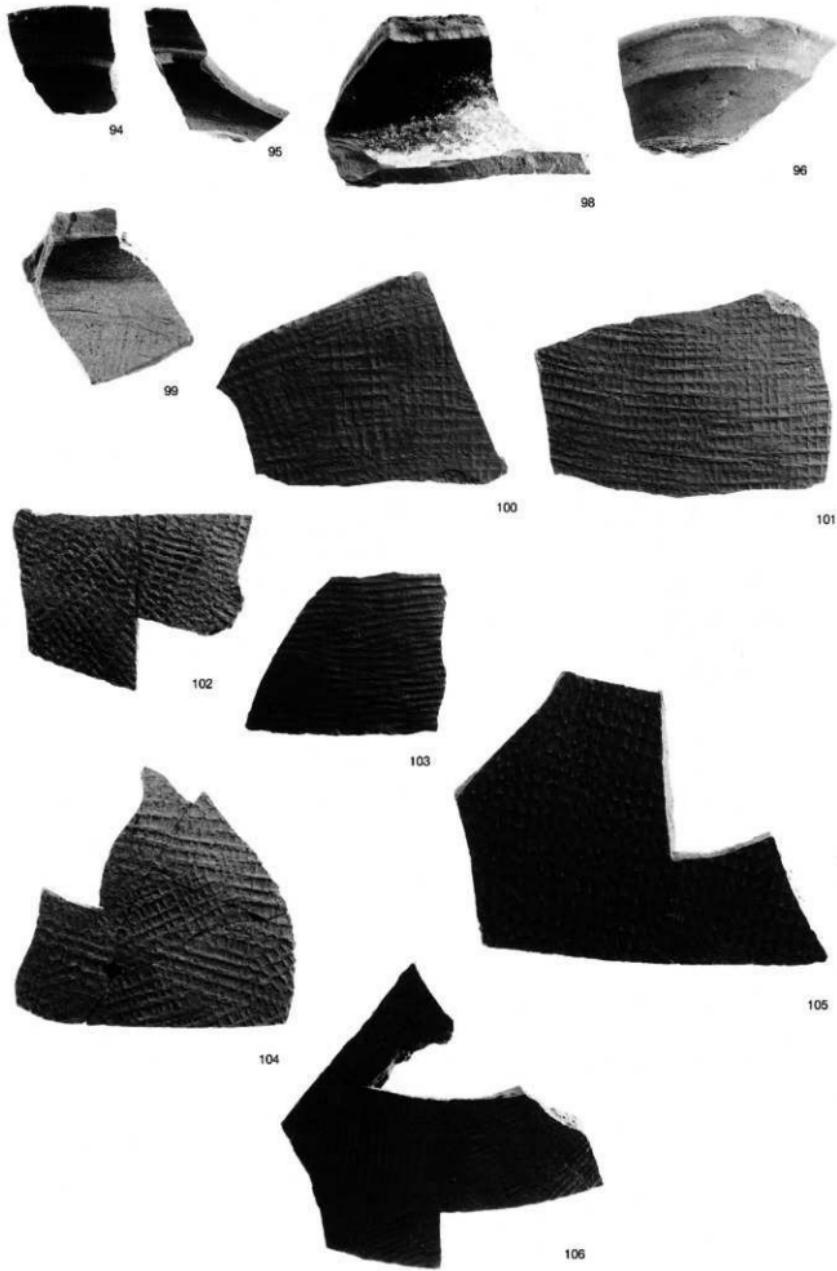
64



60

土器(3)

図版20



須恵器臺・甕



111



112



113



115



116



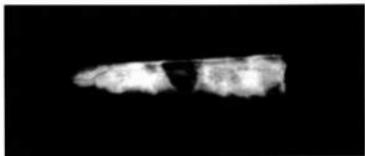
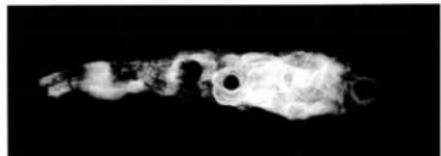
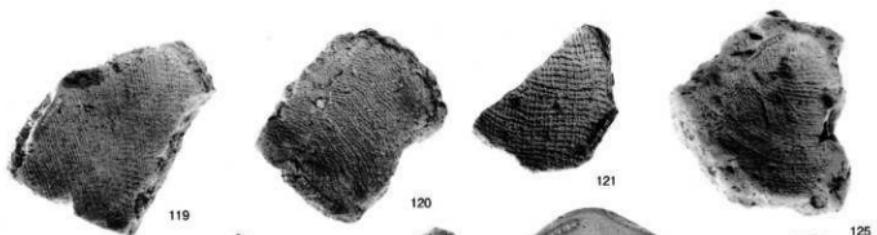
114



118



117



焼塙臺と訪錦車、鉄製品

## あとがき

高篠遺跡では「牧」の発見から、律令社会と関連した遺跡であることが指摘され、踊場遺跡では仏教祭祀とみられる特殊遺構の発見があった。今回は“古代火葬儀礼の様相”を藏骨器の発見が提供したことになり、古代社会の様相が徐々にではあるが明らかに成りつつある。

藏骨器の発見は、山の頂から少し下った緩やかな場所で、そこに立つとそびえ立つ高千穂峰を一望できる。現在既に高速道路が開通し、快適なドライブ道路に変身したが、遺跡に残された古代人のメッセージを読み解くことは容易ではなかった。

私たちに課せられた「限られた時間の中で調査報告書を作り、失われた貴重な遺跡を正確に、謙虚に、あますことなく後世に伝えること」の命題に近づくため、若い職員を中心に県内の藏骨器関連資料収集に奔走した。また、これまで培ってきたデジタル技術を本遺跡の報告書作成でも大いに活用した。

報告書作成の最終章まで、“この地を選んだ古代の人々の暮らしや歴史を解明する”強い意志を持ち続けたことを今、誇りとしたい。

発掘調査から報告書作成にいたるまで関係してくださった全ての人々へ感謝したい。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 90  
東九州自動車道建設(末吉財部IC~国分IC間)に伴う発掘調査報告書

財部城ヶ尾遺跡

発行日 平成 17 年 3 月 31 日  
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒 899-4461  
鹿児島県国分市上之段 1175 番地 1  
印 刷 株式会社あすなろ印刷  
〒 899-0041 鹿児島市城西 2-2-36

